

余市水産博物館

BULLETIN OF
YOICHI FISHERIES MUSEUM

研究報告別冊

2018年3月

乾 芳宏 : 余市における考古学調査・研究の歴史
文化財行政をふまえて

余市水産博物館

余市水産博物館
研究報告別冊

2018年 年 3 月

余市水産博物館

余市における考古学調査・研究の歴史

文化財行政をふまえて

乾 芳 宏

新冠町字西泊津

1 はじめに

北海道の考古学史については藤本英夫・野村崇氏により昭和50年代までまとめられており、後志管内については野村氏により積丹半島西海岸（岩内地方）・東海岸（小樽・余市地方）に分けて整理され、遺跡・遺物の概況にふれている¹⁾。

余市町には64か所の遺跡が確認され、文化財保護法に基づき埋蔵文化財包蔵地として搭載されている（第1図）。こうした遺跡は先人たちの絶え間ない踏査によって発見され、調査・研究されてきたことは言うまでもないが、遺跡発見の経緯や当時の地形を知るためには、その後の経過を把握しておく必要がある。

近年の開発行為によって緊急（行政）発掘が行われ多くの遺跡が消滅しているが、また新たな発見や知見が得られることも多い。

本稿は、余市における遺跡（報告）・遺物（資料紹介）の発見と発掘の調査・論考を年表的に整理し、今後の方向性を模索してみたい。なお、余市の遺跡や遺物が主題ではなく、概説書、論考の一部として、ふれているものについては内容に応じて割愛した²⁾。

2 遺跡の発見と発掘

(1) 明治時代

考古学が科学的学問として初められたのは、明治10年（1877）に東京大学に招聘された貝類の研究者であるアメリカ人E・S・モース氏による大森貝塚の発掘調査とされる。氏は翌年7月に貝類研究のため矢田部良吉氏（東京大学）とともに札幌、小樽、函館などを旅行し、その様子は『日本その日その日』³⁾に記されている。日本人として坪井正五郎氏（東京大学）が日本人類学会を立ち上げて考古学を引責していく。明治時代にも多くの遺跡を発掘している

が、当時の様子は江見水蔭氏（小説家・考古学愛好家）の『地底探検記』⁴⁾に書かれたように珍品と言えるような遺物探しの要素が強く、良好な貝塚を主としていたことが窺える。

大森貝塚の発掘調査以降、発掘で出土した遺物から石器時代はどのような人々であったかの民族（住民）論が関心の的となり、アイヌ説・コロポックル説などの論争となっていた。

明治19年（1886）2月、渡瀬荘三郎氏（東京大学）による「札幌近傍ピット其他古跡ノ事」⁵⁾が報告され、アイヌの人々は土器や石器を使用せず、これらのピットはコロポックルが住んでいた跡であることを発表し、再び民族（住民）論争が本格化する。

明治21年（1888）10月、坪井正五郎氏（東京大学）は「石器時代の遺物遺蹟は何者の手に成たか」⁶⁾において余市の遺跡が初めて登場する。北海道の石器時代遺物にふれながら、アイヌの口碑であるコロポックルについて採集するが、余市の遺跡も住民論争がその背景にあった。遺跡として川村に数個の竪穴があること、そして石鏃・石斧・土器類を掘り出すことが一時流行したことや、小型の精製石棒の出土したこと、さらに8個の壺のうち、2～3の中に石鏃が2～3個入っていたと記している。また川村に住むアイヌ民族のキケ氏から「現存する竪穴の中より土製の椀、鉄製の鍋、石製の刃物など出づる事有り何れもコロポクウクルの用いた器物なり」と話している。

明治22年（1889）4月、石川貞治氏（北海道庁）は「石器時代住民ノ分布」⁷⁾において、人種論のアイヌ説とコロポックル説にふれつつ、現在確認している北海道の遺物遺跡76か所を列挙し、余市の項では「余市郡余市村 穴・石器・土器、同郡河村 同上」の2か所を記している。

同年11月、高畑宜一氏（北鳴学校）は『小樽港史』⁸⁾の石器時代人種の項において「石器を包含せるところは九郡各町村至る所に散在す中就き高島郡手宮町、手宮裏町、忍路郡鹽谷村、余市郡大川町、岩内郡堀株村に殊に多し石器は砥石、合砥を以て石斧、石鑿を磨礪し石碓、石匙とともに日用必需の器具を製作せり又石包丁、石斧にて動植物を調理し石鏃、石鎗を以て魚鳥獸を殺獲物し或る場合に於いては闘争用にも使用せしならん 土器は石器に比し所在地の範囲狭しと雖とも有名なる所在地と同一なり其形状は瓶、壺、急須、猪口、茶碗等に頗る製作は轆轤にあらざるを以て均齊を欠くも手製ついで甚だ精巧なり土器の色は赤、黒、鶯色等あり又稀に朱を塗しもの存在す底は平底、糸底、高臺附の三種なり而して土器の外面に印象せし模様は浮紋、沈紋、無紋にして縄、筵、又は唐草等諸種の形状あり而して其意匠は頗る技至なるもの尠からず朝鮮土器は稀有なるも余市郡澤町尋常小学校生徒の採集せし一品及手宮裏町小野某々町にて発掘せしめたり 貝塚は残物捨場なり九郡内には小樽郡朝里村、高島郡祝津村、忍路郡鹽谷村に各一ヶ所及岩内郡堀株村に二ヶ所あり・・・環状石籬は其名の如く圓形に石を樹立したるものにて圓の直径二三十尺なり所在地は忍路村に二ヶ所及岩内市街に一ヶ所あり・・・小樽港炭鑛株式会社手宮工場敷地内の懸崖岩石に彫刻せし奇形の記號あり・・・」と記されており、余市町では現在の太田遺跡と沢町附近と思われる遺跡にふれている。

明治30年(1897)～大正6年(1917)の4版まで発行された東京帝国大学人類学教室の坪井正五郎氏を中心とした『日本石器時代人民遺物発見地名表』⁹⁾が刊行された。石器時代総論要領では、石器時代の遺跡を(1)遺跡散布地、(2)遺物包含地、(3)貝塚、(4)竪穴に大別し、石器時代人民についてコロポックルであるとしている。因みに明治31年の第2版では北海道之部において144か所が地名表にあり、余市について「余市郡余市村 土器、石器、穴 石川貞治報 同郡川村 土器、石器、石斧、石棒、石鏃入りの壺、穴此中ヨリ土器、石鏃、石斧出ズ 坪井正五郎報 石川貞治報」と記され、東京人類学会報告からの引用であった。

明治38年(1905)6月、河野常吉氏（北海道庁・北海道史編纂）は「チャシ即ち蝦夷の砦」¹⁰⁾において、石器時代ではない遺跡としてチャシの重要性を説いている。明治34年(1905)に、余市の砦址を踏

査して地名、文献、現地調査からまとめたもので「余市川左岸。今墾して畑となるも濠及び中段等の形を存す。津軽一統志に与市に乙名チフラケ八右衛門、家四十軒、居城ありと云うもの、是れか」また口碑として「古昔虻田アイヌと余市アイヌと戦争したること事ありしが、其時余市にはチャシありしも、虻田にはチャシなかりし云々」としている。

上記のチャシは余市川左岸の天内山チャシ（フルカチャシ）を指していると思われる。

明治45年(1912)1月、鹽田弓吉氏（上川中学校）は「北海道に於ける石器時代遺跡遺物所在地」¹¹⁾において「余市郡余市村 竪穴。石器、土器」と記している。

上記の遺跡は川村にある太田遺跡附近を指していると思われる。

(2) 大正時代

大正時代になると坪井正五郎氏の逝去とともに民族（住民）論争も薄れ、北海道在住者による考古学研究が進められていく。大正7年(1918)11月には河野常吉氏が中心となって北海道人類学会が設立された。大正15年(1926)8月には国産振興博覧会が札幌で開催され、北海道歴史館が設けられ、道内各地の考古遺物が展示されている。

大正7年(1918)3月、阿部正己氏（北海道庁・北海道史編纂）は「北海道のチャシ」¹²⁾において全道のチャシ133基を形態と構造から(1)丘岬の突端に築くもの、(2)山頂に設けるもの、(3)平原中を流れる河岸に設けるもの、(4)平坦なる原野に築くものの4分類をしている。余市のチャシとして「フルカ山 貝塚 竪穴」を掲げ2分類に相当するとしている。

同年4月、阿部正己氏は「北海道貝塚に関する私見」¹³⁾において22か所の貝塚分布を示し、余市では太田フルカ山を列挙している。ここでは主に室蘭における貝塚について説明をしており、フルカ山は現在の天内山チャシのある高台を指していると思われる。

同年8月、河野常吉氏は「余市の砦址」(第3図上)として『北海道史附録地図』¹⁴⁾に天内山チャシの測量図面を報告している。地勢の附近図では赤文字で現存セル竪穴の地点が示されている。

同年11月、寺田貞次氏（小樽高商）は「北海道小樽附近古代住民の遺跡に就いて」¹⁵⁾において忍路塩

谷～蘭島附近の環状石籬にふれつつ、余市のフゴッペ周辺についても記している（第2図下）。第3～7遺跡が以下のとおり余市に関係するものである。

第3フゴッペの遺跡：フゴッペ川右岸沖積層の低地にて遺物はいたるところに分布する。

第4遺跡：フゴッペ川左岸で鉄路より浜側で土器、黒曜石石屑等多数見られることから住民住居の遺跡を推測している。

第5貝塚：丸山と称する丘陵の北端附近。其下部道路に接する地域1段歩許に蛤牡蠣等一面に散在し、獣骨も交り土器破片、黒曜石屑等が多く土器は黒色の貝塚土器にして厚さ約5分大形のものが多い。

第6貝塚：水田と沼沢地の中間にある砂質地。貝殻累々、殊に東端の小高きところに最も多く、殆ど白色を呈す。貝殻には牡蠣、蛤、ながにし等多く、土器の破片黒曜石其他の石屑が散布し、少量なれど獣骨を交える。土器は厚さ23分の薄手ものより厚さ5分の厚手で大形のもの、石器では石鏃、石斧、石包丁等各種、穴を穿てる玉、紅用小盃の発見もしている。

第7遺跡：フゴッペ東部丘陵の西麓鉄路の南に位置する平地にて環状石籬参考の地としている。

上記の遺跡について第4遺跡は栄町3遺跡、第5貝塚はフゴッペ貝塚、第6貝塚は大谷地貝塚、第7遺跡は小樽市の忍路、塩谷の環状列石群を指していると思われる。

大正8年(1919)3月、寺田貞次氏は「余市附近の土地と古代住民」¹⁶⁾を小樽に次いで報告しており、余市町内における最初の遺跡分布図として重要である。

ここでは12遺跡に番号を付して紹介している(第2図上)。

第1號：余市町に至る新道の左側、余市小学校附近の丘陵にして、阿部正巳氏の調査によれば竪穴の遺跡が存在する(詳細は氏の報告に譲る)とあり、土器破片、黒曜石屑を発見している。

第2號：大川町より余市町に通じる新道に平行して、西北より南東に連なる丘陵にして、以前はクルマ大樹密集していたが、開墾され頂上は苹果園、両斜面は畑地。頂上は平坦で両斜面は2壇となっている。これは一種のチャシであり、俗にアイヌの砦としている。黒曜石屑、土器破片散在し、南斜面に貝塚があり、牡蠣、蛤の貝殻が多く、土器、石器とともに、鉄器も混在している。明治34年(1904)に河

野常吉氏が調査しており、この土地所有者は天内氏としている。

第3號：チャシの南約半町、本願力寺の前方、道を隔てた東側の畑。黒曜石屑、土器破片多数散布。溝渠開墾の時多数の石鏃が発見されたと聞いている。

第4號：チャシより南数町山田村に出る。余市川畔は平地で一体は苹果園。三宅輔・川俣秀氏によれば、かつて無数の竪穴がり、平面形は方形または円形で、大きさは3～10間、深いもので杖くらい。掘ってみたが土器、石器は発見できなかったらしい。また、山田村から大川町に至る道路の東側には貝殻累々白色の場所があったが、殆ど失われてしまったが黒曜石屑や土器破片が散在している。

第5號：山田村の西丘陵地にして、競馬場ある場所。黒曜石屑や土器破片で芥川氏(小樽)が小型の石鏃、や土器を採集(詳細の調査必要)とある。

第6號：大川町の地にて、普通の石器より珍奇な遺物が甚だ多く、古代民族の居住多いことを想像するとしている。ここから出土した完形土器や曲玉を図示している。

第7號：登川の沿岸で各所に遺跡があり、河岸高乾燥、清水澹々たる処に多く発見され、土器は赤褐色で薄手の土器、石器は多く青色を呈し余市附近砥ノ川産の石材にて製作したようである。

第8號：畚部貝塚。7號遺跡より登川と別れ、鉄路と平行して進む砂丘地である。牡蠣、蛤等の貝殻が累々し、黒曜石其他の石器原料石片、土器破片に交り珍奇な遺物が出土する。玉、朱の壺、土偶破片など採集されている。

第9號：畚部貝塚の東南丘陵の間の溪谷で苹果園であり、石鏃、石斧、石包丁、石冠などが発見されている。

第10號：登貝塚、畚部貝塚の西南、沼澤の対岸、俗称丸山の麓、約7段3畝歩の畑地に貝殻が累々として石鏃、土器が見られ、附近の農家の段によれば人骨も発見されたという。

第11號：黒川村字モンガクの丘陵で遺物の発見が多く、一丘陵を越えて南に一溪谷があり、細流の源でその南斜面に黒曜石片、土器破片が散在する。石鏃、石斧、石包丁、石冠、鉄器破片が発見されている。

第12號：11號から更に南一丘陵を越えた仁木村字中澤で石器原料石屑、土器破片が散在しており、石鏃、石斧、石包丁類を採集している。

以上が遺跡の紹介であり、畚部貝塚と言う名称の初出と思われる。今日の遺跡では第1号は警察裏山、第2号は天内山遺跡、第3号は該当なし、第4号は山田遺跡、第5号は旧御園競馬場遺跡、第6号は大川遺跡、第7号は旧登川右岸遺跡、第8号はフゴッペ貝塚、第9号は該当不明、第10号は大谷地貝塚、第11号はモンガク遺跡、第12号は仁木町モンガクE遺跡附近と思われる。しかし、大正7年と8年の分布図とではフゴッペ貝塚他の貝塚位置が相違しており、前者が正しい位置と考える。

大正13年(1924)秋、逢星北斗氏(歌人・行商)は大川町163番地で和鏡を採集している。その後、小樽市談話会を通して東京帝国博物館に和鏡の鑑定を依頼し、昭和3年3月に博物館の高橋健自氏は南北朝期の双鳳唐草文鏡と鑑定の回答をしている¹⁷⁾。

大正14年(1925)3月、清野謙次氏(京都帝国大学)は「男女生殖器を示し且同時に交接を意味せる日本石器時代土製品」¹⁸⁾において余市町内出土の土製品について紹介している(第5図No.9)。この土製品は五十嵐鉄氏が所蔵していたもので、氏は医学的見地から石器時代における男女の生殖器を表現したものと注目している。

同年7月15日、清野謙次氏によって大谷地貝塚の発掘調査が行われ、多くの遺物が出土しており、縄文時代晩期の中空土偶も発見されている¹⁹⁾。7月初旬に札幌で開催された大日本病理学会の帰途に小樽在住の五十嵐鉄氏の道案内や調査協力があり、順調に進められたようである。この調査は余市における最初の学術的発掘調査であり、この当時すでに周辺の地名から大谷地貝塚と呼ばれていたと思われる。

同年10月30日、『河野常吉ノート』²⁰⁾によれば、蘭島村の丸山辰之助氏の家案内で畚部村と蘭島村の境となる丘陵の頂上部にある畑に多数の石が散乱しているのを発見する。「径1尺以上の石も20余個あって、其内3個は、旧来の儘に埋まって頭をだして居る。径1尺以下の細長き石、扁平なる石も若干ある。正しくストーンサークルであったことが知れた。此れストーンサークルは、既に破壊されたので、判然と云うことはできないが、其残っている3個の石の状態並に、残って居る石の数から推測すると、直径約3間くらいのものであろうと思はれる」と記しており、この遺跡は西崎山環状列石に相当する。

大正15年(1926)8月1日～31日、国産振興博覧会が札幌で開催され、北海道歴史館が設けられた。

内容は先史～道庁時代と広範囲であり、陳列品の多くは道内の地方収集家から借用展示を主としている。『北海道歴史館陳列解説』²¹⁾によれば、先史時代のストーンサークル(環状石籬)として余市郡畚部村、遺物では石鏃50点<山田村及び大川町:川俣秀氏蔵>、石斧13点・朝鮮土器1点・茶碗形土器2点(1点は行基焼に類似)・皿形土器2点(青磁)、馬形土器1点<山田村:川俣秀氏蔵>、石錐1点<黒川村:五十嵐鉄氏蔵>、石臼2点<畚部村:河野常吉氏蔵>、土偶の首1点<大谷地附近:五十嵐鉄氏蔵>:大正12年採集、壺形土器3点<余市町:山岸礼三氏蔵>、大谷地貝塚採集品1箱<石器、土器片、貝殻、骨片:河野広道氏蔵>、畚部遺物散列地採集品1箱<此の処小貝塚あり、其付近数町部の間遺物多し。石器、土器片、朝鮮土器(第5図No.1～2)、貝殻骨片:河野広道氏蔵>と記している。これらの資料には大川、山田、大谷地貝塚、フゴッペ貝塚の遺物が含まれていると思われる。

(3) 昭和時代(戦前)

混沌としていた縄文土器の編年について山内清男氏(東北帝国大学)が積極的に試案を行い²²⁾、北海道と本州との比較が容易になるとともに、北海道内では河野広道・名取武光氏によって、土器編年が進められていく²³⁾。昭和8年に『北海道原始文化展覧会』が函館・札幌・小樽・旭川の丸井今井呉服店を会場に開催され、広く一般にも考古学遺物が周知されていった。しかし、日中戦争・太平洋戦争による戦時化が激しくなるにつれ、考古学は停滞を余儀なくされた。

昭和2年(1927)10月、現在のフゴッペ洞窟の裏手の函館本線の切通して、蘭島駅保線に勤務する宮本義明氏によって古代文字と石像が発見される。『小樽新聞』の記事見出しに「神秘を語る古代文字と謎をきざむマスク～東洋のスフィンクスと喜ぶ西田さん 考古学上の好資料」²⁴⁾と掲載される。宮本氏の談話として「この文字の箇所を掘り初めたのは10月の5日でその3日目にこ々に到達したのであるが文字が目についたので不思議と思って丁寧にみると手宮の古代文字と似て居るので大切にしたい、そのうちにこの首が出て来て始めは知らぬので鶴はしで頭部の邊を少し欠いたが遠くで見ると人の顔に似て来たので保存する事にした同所に土器と石斧と人骨を発見したので只事でないと思っていました」と突然

の出現に驚いていたことが感じとれる。西田氏とは小樽高等商業学校の西田彰三教授であり、この記事をもぐって余市の歌人こと遠星北斗氏と小樽新聞紙上で論争となっている²⁵⁾。

昭和3年(1928)2月、杉山寿栄男氏(図案家、考古学・アイヌ文化研究家)編集による『日本原始工芸』²⁶⁾が刊行された。全国の優れた土器を中心に、石器・土製品・骨角器・土偶を個人や博物館の資料から集成している労作である。気になるのは第142図版の匙形土器1点である。図版にはYoiti, Siribesi. 解説には発見地:後志国余市郡, 所蔵家:東京帝国博物館と記載されている。

同年10月、東京帝国大学刊行の『日本石器時代遺物発見地名表(第5版)』²⁷⁾によれば北海道で292か所、余市では「畚部村、圓山(貝塚)、大谷地(貝塚)、大川町(チャシ)、フルカ山(貝塚)、同(堅穴)、川村」と掲載されている。

昭和4年(1929)3月、室谷精四郎(東北帝国大学生)は「小樽西部の遺物遺跡について」²⁸⁾において、手宮～塩谷に遺跡に触れつつ、フゴッペの岩面刻画の略図、余市のチャシとアイヌ墓地、沢町中島遺跡付近採集の石斧について紹介している。

同年7月、西村正典氏は(忍路郡考古学研究会)は「畚部村出土の珍しい遺物」²⁹⁾でマスクを彫刻した土器片(第4図No.1~2)、石鏃19本、石槍8本、石刀1本、皮剝2本、独鈷石?1本を採集したと報告している。現在のフゴッペ貝塚周辺での採集であり、土器については縄文中期土器と思われるが定かでない。

12月、忍路郡考古学研究会による、登村、畚部村、塩谷村の遺跡分布調査をしている³⁰⁾。畚部貝塚周辺の遺物を図示し、フゴッペ古代彫刻の現状について「風雨のためますます落脱の□□殆んど耗失せり、又附近へ落□せるもの著し、適当な保存を講ぜざねば5年后には全部脱落のおそれあり」と記している。

昭和5年(1930)4・5月、新岡武彦氏(北海道大学生・忍路郡考古学研究会)は「北海道古代文字研究並に沿革、環状石籬に及ぶ」³¹⁾においてフゴッペの彫刻はアイヌ土俗品の有する記号に一致し、イカシシロシの可能性を記している。

5月、五十嵐鐵氏(小樽市教育主任)は「土器焼場の発見」³²⁾において、フゴッペ古代文字彫刻の基部に煤が付着し、焼けた2尺あまりの細長い石2個、粘土の塊が4個を山田村の川俣秀氏とともに発見し

たことから土器焼場である可能性を推測している。新岡武彦氏は付記として、洞窟中央に胎婦の腹部石偶があることから生殖崇拜の場所と推定している。

昭和6年(1931)2月、新岡武彦氏は「北海道古代文字論」³³⁾において畚部で発見された彫刻を畚部記号として「大正の始め頃アイヌの児童によりイトクパされたイカシシロシであり、中にはうる覚への片仮名も混じて居ると云われて居るが、全体としてアイヌのイトクパの立派な標本であり土器にある記号なども酷似するもので参考として亦或る意味の史蹟として保存の価値がある。猶この際も記号をぬきにして畚部洞窟を検するならばこの遺跡は石器時代の土器製造所、墓地、祭壇など兼たもので考古学者の見逃すべからざるものである」と記している。

同年6月17日~24日、北海道帝国大学付属博物館・札幌市犀川会の主催で第1回北海道先史時代遺物展覧会が河野常吉氏の一周年忌を記念して博物館を会場として開催された。こうした展覧会は民間団体として最初のもので、国産振興博覧会歴史館のように道内の考古収集家からの借用展示であった。陳列品目録として大谷地貝塚発掘品1箱〈土器片・黒曜石製打製石斧・貝殻・獣骨:河野広道出品〉、石斧〈余市:故河野常吉蒐集品〉が記されている³⁴⁾。

同年10月、新岡武彦氏は「北海道出土朝鮮土器資料」³⁵⁾において小樽・余市の須恵器を紹介している。余市では8カ所、小樽1カ所を紹介している。「(1)余市郡余市町大谷地堅穴より河野広道氏朝鮮土器採集し開道五十年記念博覧会に出品せり(刻文あるものであったらしい)、(2)余市郡大川芝座の建築地均しの際五個重なりし出土し、これを同郡山田村川俣秀氏と高山氏保存す。(3)昭和4年余市郡フゴッペ貝塚より旭川鷹栖神社々掌五十嵐氏大破片三個を得たり。(4)余市郡山田村より本式土器屢々出土し、川俣氏所蔵す。(5)昭和5年小樽市教育主任五十嵐鐵氏フゴッペ丸山附近より大破片一個を得(写真)。

(6)昭和6年フゴッペ小学校長同村貝塚より破片を得たり。(7)昭和6年廳立小樽中学生西崎氏同貝塚より(6)と同一土器片とおぼしき破片を得、二分して一分を筆者に贈る。(8)昭和6年余市郡フゴッペ海岸砂丘散布地にて新岡破片二個採集せり。(9)昭和6年小樽郡熊碓川口西側沖積台地上散布地より新岡一個を得たり」とある。(5)の写真には大型の甕と擦文土器(刻文)で文末には「6.7.10樺太にて」と記されている。

昭和8年(1933)1月、河野広道氏(北海道帝国大学)は「北海道に於ける洞窟遺跡」³⁶⁾において、小樽市手宮、余市町フゴッペ、浜益村茂生、美国村、泊村茶津、釧路市外春採、網走町郊外の7遺跡を紹介している。フゴッペについて「浅い洞窟で奥壁には手宮の彫刻に似た彫刻があるが偽作説が有力である」と記している。

同年3月、名取武光氏は「故篠原亮一氏の蒐集せる北海道先史的遺物の紹介」³⁷⁾において遠星北斗氏が大川遺跡で採集したほぼ完形の板状土偶を紹介している。

同年6月21日～8月15日、犀川会が主催、後援に北海道庁学務課・北海道帝国大学付属博物館・函館市立博物館による『北海道原始文化展覧会』が丸井今井呉服店(札幌・小樽・函館・旭川)を会場として開催された³⁸⁾。

展覧会は先史時代～アイヌ民具にまでで、考古要覧の出品目録によると余市の遺物は、菱形石器1点・石剣1点・環石1点(大川:小樽市色内町 大塚徳松氏蔵)、矢尻1点・骨器1点・玉1点(フゴッペ:小樽市花園町 岩佐千晴氏蔵)、縄文土器3点(大川・山岸病院蔵)、土器2点・骨器1点(余市:河野広道氏蔵)、北筒土器(余市:北海道帝国大学付属博物館内 名取武光氏)と記している。また『北海道原始文化聚英』³⁹⁾には余市出土の石棒・板状土偶が掲載されているが説明はない。しかし、後者土偶については上述した遠星氏の採集したものである。

同年10月、『余市郷土史』⁴⁰⁾の「古跡」では1) 畚部の環状石籬、2) 畚部の砦址、3) 余市砦址及び竪穴、4) 余市の貝塚、5) 畚部古代文字、6) 遺物の項では「畚部、大浜中、大川、鱈釣町、ヌッチ川口附近等より多くの土器、石器等多くの遺物を多く発見されしが、中に古鏡刀剣もあり、郷土考古学上幾多の参考品ありしが完全なる保存方法を講ぜざりし為め現存せるもの至って少し」と記している。

現在の遺跡としては1) 西崎山環状列石、2) フゴッペチャシ、3) 茂入山城址、4) フゴッペ貝塚、5) フゴッペ洞窟に相当する。遺物の項の大浜中は大浜中遺跡、鱈釣町は入舟遺跡、ヌッチ川口はヌッチ川遺跡に該当すると思われる。

同年、河野広道氏が大谷地貝塚を発掘調査されて土器と彩礫などを得ている(第5図 No.6)。この貝塚と遺物について「大谷地貝塚は余市式土器期のもので、余市下層式と上層式を出土し、表層の砂層に

は亀ヶ岡式土器が散布しているが、彩礫の出土層位は貝塚横の砂中で、如何なる文化期に属するものか不明である」⁴¹⁾と後日に報告している。

昭和9年(1934)2月、山岸玄津(禮三)氏(山岸病院院長)の『北海道余市貝塚に於ける土石器の考察』⁴²⁾では「余市土石器集覧」として氏の敷地内から出土した昭和4～8年に出土した土器・土製品・玉類を写真で解説している。また昭和8年4月の余市大川大火以後に、犀川会の河野(広道)氏や名取(武光)博物館司書及び長野氏等札幌より来て相当の効果を収められよう、考古学研究者との交流も知ることができる。余市の遺跡について「第1に余が山岸病院の敷地六百坪の地域を挙げなければなるまい。而して此地区は貝塚ではない。何となれば貝殻乃至人獣骨等の一片をも認めない真の清浄地であったからである。第二には余市川の西北方余市城址の附近にて、其北東僅か二百米突距の現警察署附近・・此處処には石器就中石冠石の多数、及び土器としては、余が附近のものとは少しく形式を異にして圓筒形のものも多く、且つ厚手式のものを出土する。第三には余が病院裏手より余市川に至る間、及び病院の南西續きなる現アイヌ住居地区一帯を挙げ得る。第四には其他大濱中と称する濱邊に二箇所のそれらしいところがあると聞いてある。附記 城址、竪穴「ストーンサークル」或は古代文字等、アイヌ民族に関係のあるものもあろうし、尚其先住民族に関わるものもあろう。併し此等は余の主題目でないから省略する。」としている。現在の遺跡として第1と第3は大川遺跡であり、その範囲を知ることができる。第2では茂入城址と警察裏山、第4ではフゴッペ貝塚附近や大浜中遺跡などが相当すると思われる。附記にある古代文字は旧フゴッペ刻画のことである。

同年6月～10月、五十嵐鐵氏(小樽市手宮尋常小学校)により、大谷地貝塚の発掘調査が実施された⁴³⁾。町内において最初の本格的な調査であり、報告書が刊行されている。土層の堆積や分布を重視しながら、土器の文様と形態の変化を考察しており、当時の優れた調査方法として特記すべきものであった。大正9年(1920)10月、氏は郷土資料の収集として小樽の古代文字、環状石籬など調査しつつ、大谷地貝塚を発見したと、発掘調査に至る動機を記している。

昭和10年(1935)6月、河野広道氏は「北海道石器時代概要」⁴⁴⁾において北海道の土器型式を4類に

大別し、第2類土器群のD群に大谷地貝塚を代表とした余市式（仮称）を設定しており、今日に至っている。

同年10月24日、余市郷土研究会が発足し、初代会長に山岸禮三氏が選任され、大川地域の発掘調査、郷土のユーカラや伝承などの聞き取りなどの活動をしている。

昭和17年（1942）5月、松下亘氏（小樽中学生）は「フゴッペ貝塚の研究」⁴⁵⁾において、友人2人と畚部貝塚の3m四方の試掘調査を行っている。貝塚の南側と西側の土層を明らかにし、第1貝層、第2貝層に分けられること、土器の特徴から2つの時代があったことを指摘している。氏によれば昭和15年（1940）年6月頃から畚部貝塚の遺物表採をはじめていたようである。

（3）昭和時代（戦後）

戦後は昭和22年（1947）7月の静岡県登呂遺跡の学術調査を皮切りに、昭和24年（1949）群馬県岩宿遺跡の調査によって旧石器文化が確認され、古代の歴史が次々と解明されてゆく。北海道では昭和22年9月、網走モヨロ貝塚の学術調査が行なわれ、著名な道内外の研究者による『北海道先史学十二講』⁴⁶⁾が刊行されている。

昭和25年（1950）に文化財保護法が施行され遺跡の重要性と保護思想が普及していく。大学と地元の郷土史家や高校の歴史クラブなどによる発掘調査も行われるようになり、大学で考古学を学びUターンした道内出身者が学術及び行政発掘に従事するようになる。昭和29年（1954）に初めて旧石器文化の寿都郡樽岸遺跡が市立函館博物館により発掘され、昭和30年代は白滝遺跡団体研究会による旧石器調査が継続している。昭和38年（1963）10月には北海道考古学会が誕生し、考古学研究的発表、地域との情報交換も行われるようになった。

昭和41年（1966）に文化庁から『埋蔵文化財の手引き』⁴⁷⁾が刊行され、道内の埋蔵文化財包蔵地も緊急に整備されることとなる。昭和40年代半ばから函館空港や新千歳空港滑走路の拡張工事などの大規模な発掘調査も行われるようになり、市町村では発掘調査員の人材確保に苦慮することとなる。こうした情勢に対応するため、昭和54年（1979）、（財）北海道埋蔵文化財センターが設立され道内各地の調査に携わっていくこととなる。

昭和25年（1950）8月初め、フゴッペ洞窟が大塚誠之助氏（札幌中島中学生）によって発見された。早速、兄の以和男氏の所属する札幌南高校郷土研究部とともに、8月末～10月の毎週土・日曜日ごとの6回ほどフゴッペ洞窟の発掘調査をしている⁴⁸⁾。

この洞窟は、夏に小樽市蘭島のキャンプに来ていた中学生であった誠之助氏が旧フゴッペ刻画を見学した時に偶然、洞窟を見つけ埋まっていた土砂から土器を採集し、兄は郷土研究部の顧問ある島田善造先生に話し、夏休みを利用して発掘調査をすることとなった。

同年9月25日～10月5日、西崎山の発掘調査が駒井和愛氏（東京大学）によって行われた⁴⁹⁾。駒井氏は北海道内の深川、ニセコの環状列石の発掘も実施している。余市では西崎山（環状列石）、西崎山裏山（環状列石のあるところ）から、小さい沢を一つ越えた西方の台地で、積石が三つほど残っていたものも調査している。

同年12月14日、河野広道氏（札幌学芸大学）は高山奨氏（札幌学芸大学原始文化研究会）、豊田英彦氏（札幌西高校考古学同好会）、三浦順平氏（札幌北高校郷土研究部）とともにフゴッペ洞窟内の土砂の中から彫刻された岩の一部を発見している⁵⁰⁾。

昭和26年（1951）7月25日～8月26日、名取武光氏（北海道大学）を団長とするフゴッペ洞窟発掘調査団が組織され本格的な第一次発掘調査を実施している⁵¹⁾。縄文時代の洞窟であり、岩面全体に多数の刻画が発見されたことから、図面の作成に時間を費やしている。

同年9月26日～29日、西崎山裏山の立石遺構の発掘調査が駒井和愛氏によって行われ⁵²⁾、また北海道内の深川、ニセコの環状列石の発掘も実施している。なお、西崎山は同年9月6日に北海道史跡に指定されている。

同年11月、フゴッペ洞窟発掘調査概要が『民族学研究』⁵³⁾に報告された。名取武光氏は「フゴッペ洞窟の発掘」において発掘調査の経緯と概要、護雅夫氏は（北海道大学）「フゴッペ洞窟と大陸文化との関係」において祭祀・信仰に関係する洞窟で大陸からの影響を考察している。服部健氏（北海道学芸大学）は「フゴッペの彫刻」において壁画彫刻は文字である可能性は極めて少ないと述べている。これらはフゴッペ洞窟調査における最初の報告であり、以降も3氏の論考が中心となっている。

同年11月、大浜中から中世陶磁器や鉄鍋などが大量に出土している⁵⁴⁾。北海道新聞には「遭難船の遺留品？ 刀や古銭がぞくぞく 余市の大浜中で発掘」と写真を掲載して大きく報道された。この遺跡は小樽土木現業所で登川の切り替え工事の際に発見されたもので、海岸に対して平行に流れていた登川は余市川と合流していたが、屈曲部分をまっすぐにして海に直結させる工事であり、その最中に大量の遺物が出土したもので、一部の遺物は紛失とも聞いている。その後の遺物調査から中国製青磁碗、古瀬戸、内耳式鉄鍋などの資料が一括して見られることから北海道の中世を考える上で貴重な遺跡となっている。現在は大浜中遺跡と称しているが、すでに遺跡の大半は消失している。

同年秋、フゴッペ洞窟から鉄斧を豊田氏が拾得したと『河野広道ノート』⁵⁵⁾に記されている。

昭和27年(1952)10月3～4日、駒井和愛氏はストーンサークルの調査として、西崎山の小さい沢を一つ越えた西方の台地で、積石が三つほど残っていたもの⁵⁶⁾を調査している。第3号積石となっている河原石やその近くの河原石に簡単な彫刻をしたものを発見しており「小樽の手宮や余市のフゴッペ洞窟の彫刻と無関係でないことを示すものと言えるであろうか」と記している。3日午前10時から東中学校生徒30名を動員し、警察裏山ストーンサークルと東中裏の竪穴についても調査をしている⁵⁷⁾。4日は雨天のため、午前中は余市高校で郷土史の講演をし、午後は東中学校教員室で特に陳列された付近出土の遺物を瀧川政次郎氏と見学し、5日～8日は西崎山裏の立石調査を継続している。

同年10月4日～9日、余市郷土史研究会では瀧川政次郎氏(国学院大学)を余市町に招聘している⁵⁸⁾。発掘をしていた駒井和愛氏と4日に合流し、町内の名所や遺跡などを今善作氏(会長)が案内し、日記の内容は以下に要約する。

5日は登川の河川切替工事現場を見る。「海岸寄りに海浜に面して、それぞれ八米、十米の間隔を以て、長さ二百米ばかり低小な築地が三本東西に走っている。築地の高さは現状で七十糎、厚さ一米に過ぎない。その略々中央を新水路が南北にうがれている。・・・時に鉄製品(鍋・湯沸・刀・鏝)、陶器・漆器及び崇寧通宝・淳化元宝・永樂通宝などの古銭が検出されるという。殊に今春永樂通宝一串が発見された。・・・この三条の築地に区割された一劃は、

近世の交易場ではないかと考えられる」また「函館本線鉄路を越える道路に西面して一小祠がある。土地の人は、この地を貴人塚と呼んでいる。小祠は墳丘の上に営まれているからである。墳丘は現状では、径二米、高さ九十糎ばかりの小円丘で、かたわらに墳丘にあったといわれる巨木が腐ち倒れている」と記し、西崎山の様子について「西崎山は海拔七十米ばかりの丘陵でストーンサークルは何れも尾根上あたかも日本海を見下ろすような位置に点在する。そしてこれらを中心として、空濠をめぐるした砦址(ちゃし)と伝えられてるものがあるが、濠といわれるものが、人工か自然の窪地であるか判然としない。然し土地の傳承によると、このあたりはウのアイヌの占拠地といわれる。ウのアイヌとは、大酋長の意ということである。そこでここにありおされる砦址を、その居址とする考えが出るのである。然し右の傳承は兎も角、西崎山一帯が砦址であるかどうかを決定するためには、付近の地形の精密な実測を行うことが先決である」と述べている。最初は現在の大浜中遺跡の様子であり、築地列の存在は何かの施設であったことが想定される。現状では宅地化や削平により築地は消失している。二番目は大山神社の場所に位置しているが、墳丘は消失している。現在の大浜中貴人の塚遺跡に相当する。三番目は現在のフゴッペチャシのことである。ここでは空濠らしきものが見られるようであり、現状では崖面の崩落が進んでおり確認はできない。もし人工的なものであれば丘先式のチャシ形態といえる。

6日は「夕、余市町を圍繞する丘陵の一つ時田山に登る。このあたり石鏃の発見される例が特に多いとされる。丘陵は海拔八十米けわしくはないが複雑な地形をなし、この天然な構えを利用した砦址がある。然しいまは山肌があまねく開墾され斜面は段畑を作って果樹が植え、容易に砦址の遺構はわからない」とある。恐らく天内山チャシのことで、当時すでに形態は失われ、現在は消失している。

7日は「林氏居宅の背後にある茂入山に登る。・・・尾根づたい六十米の三角点は、長径三十米、短径七米の楕円形の自然の隆起をしている。ここから海面の眺望は極めてひろく、また余市町一円も一望のうちにおさめることが出来る。土地の人は砦址としているが、或いは林長左衛門が海防費として献じた金子千両は、ここに設けられた砲坐の代価かも知れぬ。・・・南斜面を下り、山肌に築かれた積石石垣を

見る。高さ一～二米、長さは判然としないが、数十米の及ぶと思われる。恐らく頂上の砲坐のため、これを粉飾し威厳を誇示するための備えではないかと考えられる」としている。これは現在のモイレ城塞跡であり、その年代、性格についての調査は行われていない。

昭和 28 年 (1953) 8 月 17 日～10 月 18 日までフゴッペ発掘発掘調査団によって第二次調査を実施している⁶⁰⁾。第 1 期：8 月 17～22 日、第 2 期：8 月 26 日～29 日、第 3 期：9 月 13・20 日：10 月 2 日～7 日：17・18 日の日程で調査をしている。当初は昭和 27 年に調査を計画していたが、名取団長の体調が優れないために延期したものであった。発掘調査の結果、縄文時代の洞窟であり、岩面全体に多数の刻画が発見され、当時の精神文化を知ることのできる貴重な発見と日本中の話題となった。8 月 21 日、第 8 回日本人類学会・民族学会の研究者約 130 名がフゴッペ洞窟、忍路ストーンサークルを見学している⁶⁰⁾。学会は北海道大学医学部において 22・23 日開催されたもので、縄文早期の住吉町式やアイヌ民族について議論がかわされた。発掘後、日本を代表する遺跡として、11 月 14 日に国指定史跡となっている。

同年 11 月、余市郷土研究会から『余市』⁶¹⁾ が刊行された。瀧川政次郎氏は「斉明朝における東北経路～特に斉明記に見える地名について」において日本書紀の斉明 4 (658)～6 年に見られる阿倍比羅夫の蝦夷地経略に登場する後方羊蹄を余市シリパと断定している。駒井和愛氏は「余市附近のストーン・サークル、環状列石墓、その他」においてストーン・サークル、環状列石墓、立石ある積石などは色々な民族により、各時代に作られ、日本にもあることに注目している。名取武光・護雅夫氏は「フゴッペ洞窟」において洞窟の概要にふれ、彫刻は文字ではなく呪術的意味をこめた原始絵画の可能性と考えている。

昭和 29 年 (1954) 3 月、護雅夫氏は「シベリア岩壁画とフゴッペ洞窟彫刻」⁶²⁾ においてタールグレン氏による「内陸アジア・シベリアの岩壁画」を紹介し、フゴッペ洞窟と比較している。シベリア岩壁画の第 1 群〈原始的〉刻像群と共通した要素を有すること、呪術的・シャマニズムの色彩を帯びつつも〈記述的〉生活を持つものと推測している。

同年 3 月、河野広道氏は『苫小牧地方古代史』⁶³⁾ において、阿倍比羅夫の北征記事に見る後方羊蹄の場所について瀧川氏の余市シリパ説を批判する。ア

イヌ語の解釈、考古学的に北海道式古墳の分布から江別～苫小牧間の何れかと推定している。

同年 8～9 月、金田一京助氏 (東京大学) が宮中で天皇陛下を囲んで開催された言語学者の座談会で手宮洞窟の岩面彫刻は偽作であると説いたことから、道内の考古学研究者である河野広道氏や名取武光氏がフゴッペ洞窟の刻画調査から反発した論争が新聞紙上で展開されている⁶⁴⁾。今日ではフゴッペ洞窟が学術的に調査され、手宮洞窟の刻画と類似することから偽作説は根拠を消失した。

同年 11 月、河野広道氏は「後方羊蹄とはどこか」⁶⁵⁾ において再び瀧川氏の後方羊蹄の余市シリパ説はアイヌ語の解釈、考古学的資料から批判している。

昭和 30 年 (1955) 4 月、フゴッペ洞窟の一般公開が行われた。当時は洞窟の入口に防護柵を設置している。

同年 6 月 28 日、フゴッペ洞窟保存工事完成に伴い三笠宮殿下がフゴッペ洞窟を視察し、余市日果会社講堂で行われた名取武光氏の講演会に臨席されている⁶⁶⁾。

昭和 31 年 (1956) 6 月 24 日、ヌッチ川の河川改修工事中に貝層が露出しているのが発見され、今善作氏から連絡を受けた峰山巖氏 (小樽桜陽高校) は現場に赴き、層位や遺物の出土状況を調査された⁶⁷⁾。出土遺物は陶磁器、鉄製品、アイヌ玉、骨角器などで近世に相当すると断定した。ヌッチ川は河口近くで急激に曲折するため一帯が浸水することが多いため、曲折部から直接流水を海に導入するために 4 月から実施された切り替え工事で、この遺跡は現在のヌッチ川遺跡であるが貝塚は消失してしまった。

同年 7 月 20 日、文化財保護法 (昭和 25 年法律) に基づき、余市町文化財保護条例が施行され、文化財の重要性が周知されることとなった。

同年 8 月 2 日～7 日、余市町教育委員会ではシリパ・ケールンと称した港町の余市神社北方約 350m、標高 60～80m の斜面の大小 16 基の積石墓と思われる発掘調査を実施している⁶⁸⁾。名取武光氏がその概要を記しているが、現況のみの記載にとどまっている。

同年 10 月 28 日、名取氏と調査をしていた峰山氏は岡崎繁男氏の案内で土偶の出土した小谷内川付近の発掘調査を実施する⁶⁹⁾。この土偶の発見は昭和 27 年 (1953) 5 月 10 日、登町で農業を営む岡崎氏が造田の工事中に発見したもので、シリパ・ケールンを

調査していた名取氏に見てもらうために持参したものであった。当時は小谷地川遺跡と呼んでおり、現在の登町5遺跡に相当する。

昭和32年(1959)8月1日～8日、シリパ・ケールの第二次調査が教育委員会によって行われた。名取武光・峰山巖氏が担当として昨年同様に積石調査をしている⁷⁰⁾。

昭和33年(1958)2月、河野広道氏は『小樽市史』⁷¹⁾において小樽市フゴッペ岬チャシの伝承を紹介している。「昔男二人と女一人の兄妹がフゴッペチャシに住んでいた。兄はリコマアイヌ、弟はラワランケ、妹はコクッテシマツという名であった。このアイヌ達は意地が悪く、忍路や余市アイヌがあ岬の下を通ると上から石をおとして邪魔するので、危なくて通れなかった。それで忍路と余市アイヌ達はフゴッペチャシの兄弟を追いはらって交通を安全にしたいと期をうかがっていた折から、ある年の春、鯨がくきて浜一面に寄り鯨があがった。この時忍路アイヌが付近を通ったらチャシの断崖に鯨の鱗がずっと上まで条になってついているのが見えた。それはリコマアイヌ達が寄り鯨を縄で束にして断崖を引っぱって上った跡だった。それでチャシへの登り道が判ったので、忍路アイヌは余市アイヌに連絡して、ある夜この鯨の跡をたどってチャシに攻め入りリコマアイヌ兄妹を攻め亡ぼすことができた。それから後、ずっとあのチャシには人が住んだことがない」と記している。

同年4月、フゴッペ洞窟に近接する畑から刀類が発見され、6月に栄浜遺跡を名取武光、峰山巖氏が発掘調査をしている⁷²⁾。報告書の刊行はないが、峰山氏によれば「余市町教育委員会、余市郷土研究会の発掘したもので、砂丘に構築された墳墓である。人骨は検出していないが、足白の太刀、兵具用の鉤、鎧の大袖の化粧板等の副葬品があり、径30cm、高さ12cmほどの円形の器に、貝殻、魚骨が充満する供物が発見されている」としている。この遺跡は現在の栄町1遺跡に相当するものである。

同年5月、畠山三郎氏(札幌学芸大学OB)は「北海道余市出土の石棒について」⁷³⁾において、大正12年(1923)秋に大川町番外地の余市川沿岸砂地で3尺底から発見した石製品を紹介している(第5図No.7～8)。男根を模したものと推定し、大形(全長約3尺)と小形(全長約3寸5分)の2点を説明している。

同年7月27～30日、余市郷土研究会は、発掘担当者として名取武光・峰山巖氏として大川遺跡の学術的な発掘調査を行っている⁷⁴⁾。その結果、縄文時代晩期の墓坑群であり、重要な遺跡であることが判明した。この報告書において峰山氏は、「北海道及余市町における先史文化年表」(第3表)を作成しており、当時の調査された遺跡と年代について知る事ができる。

同年8月2～3日、木村台地遺跡の第一次調査を発掘担当者に名取武光氏として、余市町教育委員会と余市郷土研究会によって発掘調査された⁷⁵⁾。この遺跡は昭和32年(1957)6月、梅川町で果樹園を営する木村克己氏が馬耕の際にほぼ関係に近い土器を発見したもので、今善作氏に連絡し、町教育委員会の沢口主事と現地に向かい石器と特殊な土器を採集している。

同年8月15日、河野広道氏は「小樽・余市附近の重要遺跡」⁷⁶⁾において、小樽市手宮洞窟・三笠山・地鎮山、余市町フゴッペチャシコツ・大谷地貝塚・フゴッペ洞窟・フゴッペ貝塚を挙げている。フゴッペ洞窟の発見は昭和25年(1950)12月、大谷地貝塚は客土のため掘り崩されて原形をとどめていないと記している。

昭和34年(1959)7月、河野広道氏は「北海道の土器」⁷⁷⁾において従前発表されている土器型式を整理し、写真で簡単な説明をし、土器型式変遷模式図(第6図)を作成している。土器について大川遺跡出土の双口土器と二足土器、大谷地貝塚出土の余市式土器が掲載されている。

同年、鍛冶照三氏(余市郷土研究会)は『日本書紀と余市』⁷⁸⁾において斉明四年の阿倍比羅夫の蝦夷地遠征の場所を余市とし、シリパ山麓に分布する約60基のケールン群を肅慎征伐と関係あると記している。昭和27年10月に来町された瀧川政次郎氏の後方羊蹄がシリパ・ヨイチとする地名説が後押しとなっている。また大川砂丘にある貝塚について安在造船貝塚、電報電話局貝塚、協会病院貝塚、京野呉服店裏貝塚、三吉神社貝塚、砂山貝塚、板垣牧場貝塚、佐藤貝塚、第一浜中貝塚、第二浜中貝塚、大谷地貝塚、フゴッペ貝塚の12カ所を報告している。

昭和35年(1960)6月、芹沢長介氏(東北大学)は『石器時代の日本』⁷⁹⁾において縄文文化にふれながら、亀ヶ岡式土器の細分をしている。第Ⅲ期(大洞C2期)に平行する北海道の土器として、大川遺跡

出土の双口土器と二足土器を類例として写真説明をしている。

同年 11 月、大場利夫氏（北海道大学）は「宗仁式土器について」⁸⁰⁾において樺太で発見された宗仁式の類例を北海道及び北方地域としており、フゴッペ洞窟からも出土していると記している。

昭和 37 年（1962）4 月、今善作氏、沢口清氏（町役場）によって沢町で石垣を確認調査して先住民の遺構と確認し、大崎山遺跡と名付けている⁸¹⁾。昭和 31 年（1956）5 月、沢田義夫氏（余市町役場）によって、沢町にある山頂から斜面にかけて石積を発見し、郷土研究会に調査を依頼したものであった。

同年 11 月 3～4 日、木村台地遺跡の第二次調査を発掘担当者に峰山巖氏として、余市郷土研究会、余市高校郷土研究部の協力の下で実施された⁸²⁾。この遺跡は木村台地遺跡として縄文時代早期の貝殻文土器文化と周知されることとなった。

昭和 38 年（1963）3 月、余市町教育研究所によって郷土読本の資料集『余市町郷土誌（その 1）』⁸³⁾が刊行された。昭和 35 年（1960）に刊行した佐藤忠雄氏（旭川市博物館）・竹田輝雄氏（小樽市博物館）執筆による概説書である『北海道の先史文化』⁸⁴⁾を参考として町内の先史文化をまとめられている。余市の歴史的概観の先史時代の項では無土器時代から擦文時代までを町内の遺跡発掘成果を取り入れて説明し、先史時代遺跡一覧と遺跡図を掲載している。遺跡の年代として無土器時代：梅川木村台地、縄文時代として中期：大谷地貝塚（余市式・北筒上・円筒上）、後期：大谷地貝塚（野幌式）、晚期：大谷地貝塚（亀ヶ岡式）、西崎山配石遺構、警察裏山立石遺構、大川遺跡（亀ヶ岡式）、ヌッチ遺跡（亀ヶ岡）、東中学校裏竪穴、続縄文時代としてフゴッペ洞穴（後北 C・D、刻文、岩壁彫刻）、大川遺跡（恵山式・後北 C・D）、ヌッチ（恵山式・後北 C・D）、擦文時代に大川遺跡（擦文・刻文・高坏形）、鎌倉期にフゴッペ鎌倉遺跡（刀剣・墳墓等）、新登川口遺跡（古墳・遺物等）、？シリパ配石遺構（ケールン？）とし、他にモンガク（立石）、大川嘴浜南斜面一帯（中期以降の各種遺物）に多くの遺物遺蹟が知られると記している。

同年 4 月、日本考古学協会・洞穴遺跡調査特別委員会編『日本洞穴遺跡地名表（第 1 版）』⁸⁵⁾が刊行され、後志管内では小樽市手宮、余市町畚部、積丹町美国茶津、泊村茶津・照岸、神恵内村神恵内観音

を掲載している。この特別委員会は前年に結成されたもので、縄文時代文化の起源を探究する上で洞窟遺跡は重要であり、調査を早急に推進する必要性の趣旨であった。

同年 5 月に北海道文化財専門委員の高倉新一郎氏（北海道大学）、大場利夫氏（北海道大学）によって大崎山遺跡の予備調査が行われ、同年 10 月大崎山調査団が編成された⁸⁶⁾。

同年 7 月 28～30 日、余市高校郷土研究部は昭和 34 年以降、毎年 1 回、西崎山の除草と整備をしていたが、3 区の一部が破壊されているのを知り、町教育委員会と保護対策のため現状調査を行ったところ 2 区にも一部の破壊が確認された。そのため実測図や写真を手がかりに復元と整備を行うこととし、2 区は久保武夫氏（余市高校郷土研究部顧問）、3 区は峰山巖氏が担当となり、余市高校郷土研究部員の協力のもとで行われた⁸⁷⁾。

同年 8 月、朝枝文裕氏（小学校教員）は『彫刻と洞窟人』⁸⁸⁾においてフゴッペ彫刻を個々に取り出して、支那古代文字、イカシシロシなどと比較している。

昭和 40 年（1965）7 月、吉崎昌一氏（北海道大学）は「縄文文化の発展と地域性～北海道」⁸⁹⁾において道内の土器編年表を提起し、大谷地貝塚を標識とする余市式土器を中期終末に位置づけている。

同年 9 月 1 日～6 日に大崎山遺跡の第一次調査が実施された⁹⁰⁾。調査団長は高倉新一郎、副団長：大場利夫、顧問は斉藤忠（東京大学）・三上次男（東京大学）・芹沢長介（東北大学）、協力者：峰山巖（札幌医科大学）、竹田輝雄（小樽市博物館）他多数の研究者によって進められた。第 1 区では積石遺構 10 基とこれを囲む石畳、第 2 区では積石遺構 15 基とこれを囲む石畳が確認され、一部の石積遺構を解体している。調査結果、出土遺物がなく年代の特定は難しく、構築の目的も更なる調査が必要とされ、判然としないまま終了したのだった。

同年 11 月、大場利夫氏「北海道先史文化と大陸文化」⁹¹⁾において先土器文化（無土器文化）～オホーツク文化までの考古遺物を主として大陸との関連を記している。フゴッペ洞窟においては壁面彫刻や大陸系の宗仁式土器に注目している。この宗仁式の時期について縄文文化終末ないしは続縄文文化期としている。

昭和 41 年（1966）3 月、久保武夫氏（余市高校）

は「余市海岸の砂丘」⁹²⁾において、地形と遺跡立地との関連について言及している。砂丘列を黒川砂丘と大川砂丘と命名し、前者は縄文時代中期～後期以前、後者は縄文時代晩期以降に形成されたと推定しており、遺跡分布を考慮する上で重要な指摘である。

同年8月、時田山の頂上付近を歩いていて、大形の集石積を農村青年である青木延広氏（郷土史家）が発見した⁹³⁾。鍛冶照三氏（余市郷土研究会）を現地に案内し、ストーンサークルの可能性があると、大場利夫氏に調査依頼をする予定と記事にある。

同年8月18日～10月8日に大崎山遺跡の第二次調査が調査団により実施された⁹⁴⁾。第1区では積石遺構10基とこれを囲む石畳、第2区では積石遺構15基とこれを囲む石畳が確認され、一部の石積遺構を解体している。調査結果、出土遺物がなく年代の特定は難しく、構築の目的も更なる調査が必要とされ、判然としないまま終了したのだった。

昭和42年（1967）3月、北海道教育委員会は、『北海道遺跡埋蔵文化財包蔵地一覧』⁹⁵⁾を作成して、市長村に配布している。作成の目的に「最近における諸開発事業のいちじるしい進展等に関連して、貝塚や遺物包含地等の遺跡の保護が問題」となってきたため、昭和40～41年の2カ年にわたり、北海道遺跡等調査員、市町村教育委員会、市町村遺跡等調査関係者の協力を得て作成したもので、ここにおいて初めて全道的に公開されたといえる。

全道を支庁別の14（1～14）に分け、市・郡別にA、町村をBに区分し、さらに町村名に細分した標記方法とし、遺跡を貝塚、遺物包含地、住居跡、墓地に大別し、各遺跡にA（きわめて重要）、B（比較的重要）、C（普通）、D（消滅）の4ランク付けを明記し、1,597ヶ所を掲載している。また、参考事務処理資料を巻末としている。余市は4（後志）-B2（余市郡）-1（余市町）の表記となり、17遺跡が掲載されている（第1表上）。

同年8月、大塚和義氏（立教大学生）は「北海道・余市出土のオロシガネ状土製品」⁹⁶⁾を発表している。松平義人氏（考古学愛好家・教員）が採集したものであり、詳細な出土地は不明である（第4図No.3）。縄文後期の所産とし、狩猟時に用いるブシ（トリカブト）毒などのすり皿の用途などを推測している。

同年9月1日～12月20日、大崎山の第3次調査を行っている⁹⁷⁾。第2次の調査団に北海道大学北方文化施設のスタッフが加わり、遺跡全体の実測図の

作成、積石遺構の解体などを実施しているが、積石、石畳の年代と目的は明らかでないが先住者によって構築されたことは明らかであり、遺跡を保護し今後さらに研究を重ねることが必要である」と要約している。

同年11月、登丘陵の標高約20mの八幡神社跡の境内で、青年会の共有地をブルドーザーで整地したところストーンサークルが発見された⁹⁸⁾。余市高校郷土研究部の報告によれば「石組の直径1mから1.2mくらいのほぼ円形で西崎山南西麓にあるものと全く同型式である。規模もほぼ同じで20数個の石組がほぼ同じに配列され、この小グループの外囲を高さ70から80cm位の立石を点々とサークル状にめぐらしてあったようであるが破壊されてその跡はほとんどない。組石の大部分がブルドーザーで破壊されたが、ほぼ原形をとどめていたのが1か所あったのでそれを緊急調査した。上面の石組を取り除くと、深さ60cm位の墓坑があってその底には大福もち状の河原石がきれいに敷きつめてあり、その上に遺体をのせて土盛りし約40cmばかりの立石をのせてその根を扁平な石約100個ばかり放射状に並べて完成したようである。この近くからヒスイ玉と長さ20cm位の磨製石斧がそれぞれ1個出土した」と記している。現在の八幡山遺跡であり、現状として4か所の配石が残され、水産博物館前に一か所が移設復元されている。

昭和43年（1968）6月、桑原護氏（千葉県立小金高校）は「余市式土器」⁹⁹⁾において余市式土器の研究史をふまえ、円筒上層式以後と関係すると記している。

同年10月26日～11月4日、北海道大学の¹⁰⁰⁾大場利夫・重松和男氏と北方文化研究施設のスタッフが主となって西崎山遺跡第4区の学術調査をしている¹⁰⁰⁾。第4区はこの調査で設定したもので、海岸に向かう尾根上の一角である。この時は費用が不十分との事から次年度以降に継続して進めることとした。

昭和44年（1969）6月3日、余市水産博物館が開館する。北海道百年地域記念事業として建設されたもので、ニシン漁にかかわる資料を中心として、考古資料も展示されることとなった。

昭和45年（1970）3月、久保武夫氏は「余市附近のストーンサークルの分布」¹⁰¹⁾において、A：三笠山・地鎮山、B：フゴッペ山、C：西崎山南尾根、D：西崎山北尾根、E：八幡山、新たに1)フゴッペ山、2)

西崎山北尾根, 3) 時田山, 4) モンガク, 5) 警察裏山, 5) 墓場山と記している。しかし 1) 3) 5) については現在では確認できない。

同年 5 月, 大塚和義氏は「刻みつけられた舟〜フゴッペ洞穴における岩壁画の歴史的背景」¹⁰²⁾においてフゴッペ洞穴の舟彫刻と同じモチーフを北方ユーラシアとの関係に求め, 観念的な構図であることから宗教的表像と考えている。

同年 6 月, 名取武光編『フゴッペ洞穴』¹⁰³⁾がニューサイエンス社から刊行された。昭和 25〜28 年に行われた発掘調査の正式な報告書であり 17 年経過したことになる。出土遺物や刻画の一覧図が公開され, ようやく全体像を見ることができるようになり, 諸研究者によって洞窟とともに手宮洞窟との比較研究が進められるようになった。

同年 6 月 13 日〜21 日, 余市町教育委員会により天内山遺跡が発掘調査された¹⁰⁴⁾。この発掘の原因は余市川護岸工事に必要な土砂の運搬, 宅地造成計画によるもので, 現状のまま保存は困難なことから, 余市町の緊急発掘における始まりとなった。調査には, 峰山巖氏(札幌医科大学), 松下亘氏(北海道開発局), 竹田輝雄氏(小樽市博物館)が主となり, 縄文時代の墓坑と近世の貝塚が確認されている。出土遺物 171 点は昭和 51 年(1976) 5 月 21 日に北海道有形文化財に指定されている。また, 天内山遺跡の報告書では詳細は不明であるが, 工事担当者であった安崎諭氏が黒川地区の土地改良のために砂丘上に堆積する土壌を採取している工事中に礫の集石を発見した。緊急発掘となり松下亘・竹田輝雄両氏が主となり, 余市郷土研究会有志により配石遺構 1 基を発掘調査している。この遺跡は現在の安芸遺跡である。

昭和 46 年(1971), 北海道教育委員会は『文化財保護の手引き』¹⁰⁵⁾を作成し, 関係法令, 調査の方法, 実務に使用できるように編集し, 巻末に埋蔵文化財一覧を掲載している。埋蔵文化財の調査と方法は北海道大学の吉崎昌一氏の執筆によるもので, 「文化財を包含する遺跡にはランクはつけられない。あるのは, すでにこわされて 0 になったもの, 調査に値するものの 2 種類だけなのである」と述べており, そのためか昭和 42 年のランクづけの項目は消失している。全道 2,021 ヶ所で遺跡表記は同じであり, 余市では天内山遺跡と安芸遺跡の 2 遺跡が追加され 19 遺跡が掲載されている(第 1 表下)。

同年 9 月 26 日〜10 月 11 日, フゴッペ洞穴の保存覆屋を建設するために, 前庭部の発掘調査を実施している。調査団長は名取武光氏, 統括者は峰山巖氏で, 調査補助員として札幌医科大学助手, 北海道大学学生となっている。この調査では太刀, 刀子が副葬された墓坑 1 基, 彫刻された柱状石, 土器に入った鹿の肩甲骨が発見されているが概報のみで詳細は定かでない。発掘での彫刻実測は小川原脩氏(画家)が担当となっている¹⁰⁶⁾。

昭和 47 年(1972) 7 月, 朝枝文裕氏は『北海道古代文字』¹⁰⁷⁾においてフゴッペ前庭部出土のシカ肩甲骨について, 支那神聖政治でのト占用のために交易品として準備していたものと推測している。

同年 9 月 26 日〜29 日, 昭和 43 年度の継続調査として北海道大学の太田利夫・重松和男氏と北方文化研究施設のスタッフが主となって西崎山遺跡第 4 区の学術調査をしている¹⁰⁸⁾。一・二次調査により縄文時代後期に相当する 5 基の組石遺構が確認され, 下には土坑は発見されなかった。

昭和 48 年(1973) 9 月, 八幡山にて白鳥千代治氏がブドウ棚の支柱杭穴を掘っていたところスコップが石に当たり, 丁寧に約 65 cm 掘り下げたところ石棒を発見した。北海道新聞社余市支局の江尻司記者から連絡を受けて佐藤利雄氏(余市郷土研究会)が現地へ赴き, 出土状況などの簡易な図面と石棒について報告された¹⁰⁹⁾。昭和 42 年(1967) 11 月に調査されたストーンサークルとの関係が考えられる。

昭和 50 年(1975) 1 月, 石附喜三男氏(札幌大学)は「シンポジウム北奥の古代文化の諸問題」¹¹⁰⁾において珠洲焼と混乱している須恵器を検討して, 北海道須恵器出土地名表(昭和 45 年 3 月現在)を作成し, 余市から甕が出土したと記している。

同年 11 月 3 日, 安倍臣引田比羅夫記念像建立協賛会により阿倍比羅夫記念碑が旧ヤマウシ稲荷神社跡地に建立された。これは日本書紀にある阿倍比羅夫遠征記事に見られる後方羊蹄の政庁場所をシリパ山のある余市であると比定したもので, 今善作氏(余市郷土研究会)が中心となり, 有志の寄付によるものである¹¹¹⁾。

昭和 51 年(1976) 3 月, 北海道教育委員会は『埋蔵文化財包蔵地一覧表及び分布図』¹¹²⁾を作成し, 市町村で閲覧場所を掲示できるように周知を図っている。従前と大きく異なるのは遺跡の表記方法の変更である。全道を支庁別の 14 (A〜N) に分け, 市町村

の別を無くして、すべて算用数字(01～)とし、遺跡ごとに番号制を採用している。余市はD(後志)―19―遺跡番号の表記となり、シリバ山麓遺跡・天内チャシ跡・浜中台地・旧下余市運上家の4ヶ所が追加されて23遺跡が掲載されている(第2表)。今回の改正は、現在に続く埋蔵文化財包蔵地一覧・分布図の基本となるもので、社会状況の変化への対応と言える。こうした埋蔵文化財に対する整備は昭和46年(1971)から北海道教育委員会に埋蔵文化財担当の専門職員が置かれ、昭和48年(1973)には札幌市でも埋蔵文化財専門職員が配置にされたことにより、市町村にも埋蔵文化財行政の重要性が認識されていくこととなった。

同年3月、石附喜三男氏は「鈴谷式土器の南下と江別式土器」¹¹³⁾において、フゴッペ洞窟出土の鈴谷式土器の口縁部破片を紹介しつつ、論考を展開している。この土器は昭和46年(1971)に前庭部で出土したもので未報告の資料である。

同年10月、千代肇氏(市立函館博物館)は「フゴッペ洞窟人の南進」¹¹⁴⁾においてフゴッペ洞窟で江別(後北)式土器が層位的に出土したことを編年上極めて重要と述べ、刻画について多産と豊漁祈願に関係すると推定した。

同年8月24～29日、国指定重要文化財「旧下ヨイチ運上家」の保存修理に伴って地下調査の発掘が2年間行われた¹¹⁵⁾。担当は峰山巖氏(札幌医科大学)で、現建物周囲にトレンチを入れて規模の確認、台所、旧釜場跡、便所の位置を古図と比較している。

昭和52年(1977)5月24日～9月9日、前年に続いて「旧下ヨイチ運上家」の発掘調査が行われ、運上家の礎石位置の確認、旧建物位置との比較を行っている¹¹⁶⁾。

同年6月、余市町郷土文化財愛護少年団(代表：川端義平)が余市町文化財保護条例制定20周年を記念して結成された。西崎山ストーンサークルの清掃、文化財めぐり、餅つきなど郷土の歴史や文化の学習会活動をしている。

昭和53年(1978)12月28日、余市町歴史民俗資料館が余市水産博物館に併設され、考古関係やアイヌ民族資料、開拓時代の資料が展示されることとなった。

同年8月27日～9月1日、旧下ヨイチ運上家の環境整備事業として池庭の発掘調査が実施された¹¹⁷⁾。調査団長は峰山巖氏で、池の泥埋土から銅鍋、樽の

蓋、舟釘、三分ノミ、陶磁器、陶器、土器片(擦文土器)などが出土している。庭園調査は道内で類例がなく注目される。史跡の概要で、裏山のモイレ山について「コロポックルの居城であったと伝えられている」と記しているが、伝承者は定かでない。

昭和55年(1980)3月、国指定重要文化財「旧下ヨイチ運上家」が整備を終え一般公開された。昭和46年(1971)12月に建物が重要文化財、昭和48年(1973)7月に敷地も史跡指定されている。

同年5月、藤本英夫氏(北海道教育委員会)が北海道での責任編集となり『日本城郭体系～北海道・沖縄』¹¹⁸⁾が刊行された。北海道のチャシ・城・陣屋・館がまとめられており、余市の天内山チャシは寛文拾年狄蜂起書に記録された古城と推測している。

同年7月、宮宏明氏は「余市式土器文化研究の史的展開」¹¹⁹⁾において余市式土器の研究史にふれ、縄文時代中期のノダップⅡ式との関係を重視している。

昭和56年(1981)3月、大沼忠春氏(北海道教育委員会)は「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」¹²⁰⁾において道南と道東の土器編年を無理なく理解するために余市式土器を従前の中期から後期に位置づけられる可能性を指摘している。

昭和57年(1982)9月、余市町教育研究所から『余市郷土史3～余市文教発達史』¹²¹⁾が刊行された。「第二章 余市の先史時代」において木村台地、大谷地貝塚、環状列石(西崎山、旧八幡山)、大川、フゴッペ洞窟、天内山遺跡が発掘風景とともに説明されている。

昭和58年(1983)3月、峰山巖氏と掛川源一郎氏(写真家)による『謎の刻画フゴッペ洞窟』¹²²⁾が刊行された。一般の普及書として書かれており、刻画の源流を大陸に求め、民族例などからシャマニズムを背景とする呪術的宗教の所産と位置付けている。

同年8月、野村崇氏は「石剣・石刀」¹²³⁾において、文章のみで「日本海側では河野広道氏の集成した記録によれば、余市町山田町において、玉抱き三叉文風の文様を持ち、柄部に幾何学的な刻線の刻まれた石刀が出土している」¹²⁴⁾と記している(第5図No.11)。

昭和59年(1984)2月、越田賢一郎氏(北海道教育委員会)は「北海道の鉄鍋」¹²⁵⁾において鉄鍋を集成し内耳・釣耳式に分け、形態分類をして年代を推定している。余市で形態のわかるのは大浜中遺跡の

内耳式のみである。

同年9月、宇田川洋編『河野広道ノート』¹²⁶⁾が刊行され、記録ノートと採集された遺物との照合を丹念に調査してまとめている。大川遺跡の内耳鉄鍋破片、フゴッペ洞窟から底部に刻印のある土器、鉄斧、フゴッペ貝塚の須恵器、山田町の独鈷石、石刀、フゴッペ出土の側縁有溝石器、大谷地貝塚の Prallus 形石器（松下春治氏蔵）などが記録されている（第5図）。

同年10月、北海道教育委員会の木村尚俊・矢吹俊男文化財保護主事によって広域農道のための登町地域の範囲確認調査が行われた。

昭和60年（1985）3月、齊藤傑氏は「北海道出土の須恵器地名表」¹²⁷⁾において道内の出土分布と文献を整理している。余市はフゴッペ貝塚・大谷地貝塚・大川町・山田を記している。

同年9月、北海道教育委員会の越田賢一郎氏（文化財保護主事）による町内の一般分布調査が行われ、前年度の調査を踏まえ、多くの遺跡（No. 24～46）が文化財包蔵地に搭載された。

同年11月、矢吹俊男氏（北海道教育委員会）は「縄文時代の区画墓について（前篇）」¹²⁸⁾において縄文文化の区画墓として環状列石、環状土籬、環状溝墓（周溝墓）があり、基本的に集団（数家族）と考え、西崎山ストーンサークルの特徴を記している。

昭和61年（1986）3月、大島秀俊氏（小樽市教育委員会）は「余市町大川遺跡出土の擦文期の資料について」¹²⁹⁾において、底部に糸切痕を残す刻書のある土器器を紹介している。この土器は青木延広氏が所有するもので、昭和58年（1958）4月に大川町の文沢光男宅の造成時に採集されたものである。

同年4月、天野哲也氏（北海道大学）は「続縄文期末および擦文期の若干の資料」¹³⁰⁾において天内山遺跡の発掘調査後に佐藤利雄氏が採集した鉄斧1点を紹介している。

同年5月、国指定史跡「フゴッペ洞窟」と国道との間にある敷地を保存のため史跡指定を拡大している。

同年5月、矢吹俊男氏は「縄文時代の区画部について（後篇）」¹³¹⁾において区画墓の変遷と副葬品の石棒に着目して分類を行っている。

同年10月、余市町登町区会により『登郷土誌』¹³²⁾が刊行された。登地区の冷水付近で見つかった青木延広氏（郷土史家）採集の黒曜石製の石刃（プレ

イ）が写真で掲載され、赤井川村の日の出、曲川遺跡などと同時期の1万年以上前に住んでいた人々の使用したものと説明している。この冷水峠付近の遺跡は余市で最初に紹介された旧石器時代の遺跡として注目されるが、この場所は開発によって消失している可能性がある。

同年11月、松下亘氏（北海道開拓記念館）は「北海道余市町沢町出土の柱状石斧」¹³³⁾を資料紹介している。この石斧は昭和42年（1967）頃に果樹園を営んでいた橋本清氏が荒地を開墾していた時に採集されたもので、他に遺物はなかったらしい。遺跡の位置は大崎山遺跡のある丘陵の南東方向で緩い傾斜面、標高約55m前後である。柱状石斧は特徴的な形態で、フゴッペ洞窟に類例があり、注意すべき遺物である（第4図 No. 4）。

昭和62年（1987）6月、加納博（秋田大学）・早川寛志（北海学園大学）・石川俊夫（十和田科学博物館）は「忍路環状列石の考古岩石学」¹³⁴⁾において忍路及び西崎山環状列石の原産地は余市湾北端シリパ岬の安山岩岩脈であるとし、石を運んだ海上の道を推定している。

昭和63年（1988）3月、山本哲也氏（君津郡市文化財センター）は「擦文文化に於ける須恵器について」¹³⁵⁾において道内出土の須恵器を供膳形態（坏・碗）と貯蔵形態（壺・甕）に大別しており、余市は両形態を含み、その分布を通して本州からの集団移住についても考察している。

同年3月、桐谷賢一氏（日本考古学協会）は「フゴッペ洞窟発掘の頃」¹³⁶⁾においてフゴッペ洞窟の第一次（昭和26年）～三次（昭和46年）の発掘の様子を記している。

同年3月、青柳文吉氏（北海道教育委員会）は「北海道のひすい玉」¹³⁷⁾において道内のひすい玉を集成し、玉類の分類と変遷を考察している。氏の研究史によれば、ひすい玉が出土した最も古い記録は山岸禮三氏が発掘して紹介した大川遺跡出土の青玉勾玉としている（第3図下 No. 4）。

同年6月15日～11月14日、余市町教育委員会により沢町遺跡の発掘調査が余市仁木地区道営畑地帯総合土地改良事業余市第1号幹線農道町道沢町御園線舗装改良工事に伴って調査が行われた¹³⁸⁾。宮宏明氏（余市町教育委員会嘱託）が発掘担当となり、縄文時代晩期前半の墓坑や擦文時代の竪穴住居を調査された。

この遺跡は昭和初期からリング園、畑地を馬耕すると土器、石器、青い石でできた勾玉が採集、昭和5・6年頃には旧制中学校（現余市高校）の生徒が教師に引率されて遺物採集をしていたようである。報告書には遺跡周辺で遺物を表採された米沢一道氏と土野茂氏の資料が紹介されている。また、佐藤利雄氏による「遺跡の位置と環境」ではシリパ山の遺跡として、シリパ岬烽火台跡、カッチャライシ遺跡、シリパ山ケールン群、シリパ沢遺跡、シリパ山麓遺跡を地図上に示しているが詳細は不明である。

同年6月20日～10月25日、(財)北海道埋蔵文化財センターにより柴町5遺跡が発掘調査された¹³⁹⁾。この遺跡は北後志東部地区広域営農団地農道整備事業に伴う調査である。西崎山ストーンサークルのある丘陵の1区と3区の間をトンネルと一部切土となるため、事前の分布調査と試掘調査が丹念に行われている。発掘調査により、縄文時代晩期後半の土坑群が確認されている。報告書では西崎山ストーンサークルの位置と配石図を掲載している。また千葉英一氏は旧石器時代と思われる黒曜石製の有舌尖頭器1点についてふれている。

(4) 平成期（元年～29年）

北海道では平成20年ころまでは、高速道路、ダム建設工事などに伴う大規模調査が、(財)北海道埋蔵文化財センターが主に対応し、道南地方ではNPO法人による発掘調査が行われ、市町村が調査主体となる発掘調査が次第に減少していく。平成20年代後半は市町村で文化財行政に携わる考古学関係者の定年退職が続き、新旧交代の時期を迎えており、民間の考古学調査機関への委託も進みつつある。

平成元年(1989)5月10日～11月11日、(財)北海道埋蔵文化財センターによってフゴッペ貝塚の発掘調査が行われた¹⁴⁰⁾。この遺跡は北後志東部広域営農団地農道整備事業に伴う調査であり貝塚や竪穴群が確認された。竪穴からは小型土偶が出土し、縄文前期後半～中期前半の円筒土器についてフゴッペ1～3式を設定している。

同年5月16日～7月1日、(財)北海道埋蔵文化財センターにより登町3遺跡が北後志東部広域営農団地農道整備事業に伴い発掘調査された¹⁴¹⁾。縄文前期後半～中期前半の円筒上層式・北筒式土器が主に出土している。

同年5月16日～7月17日、(財)北海道埋蔵文化

財センターにより、登町2遺跡が北後志東部広域営農団地農道整備事業に伴い発掘調査された¹⁴²⁾。縄文中期の円筒上層式、北筒式が主で、土坑、焼土が検出されている。

同年6月1日～10月31日、余市町教育委員会により大川遺跡の発掘調査が余市川改修事業に伴って平成4年(1994)まで発掘調査された¹⁴³⁾。調査担当者は宮宏明氏、指導顧問に岡田淳子氏(北海道東海大学)とする初めての長期継続調査であった。町の中央部を流れる2級河川の余市川は度々氾濫を起こし、地域住民に被害があることから、治水対策は急務であった。余市川河口一体は右岸に大川遺跡、左岸に入舟遺跡があることから、工事の年間計画との調整をしながらの長期にわたる大規模河川改修に伴って、橋脚の立替、道々の拡張などの発掘調査となった。この遺跡から、縄文晩期～続縄文時代の墓坑群、擦文時代の集落、中・近世の墓坑群、大量の遺物が出土し、北海道史を語る上で欠かせない重要遺跡となった。

同年8月、松下亘氏は「北海道の中世武具」¹⁴⁴⁾において道内出土の分布図とともに余市町柴浜遺跡についてふれている。

平成2年(1990)2月、佐藤矩康氏(刀剣愛好家・共立診療所長)は小冊子『埋もれていた余市の宝物』¹⁴⁵⁾において大浜中遺跡出土の遺物についてわかりやすく説明している。

同年2月、(財)佐藤奨学会から『鉄器が語る余市の文化』¹⁴⁶⁾が刊行され、佐々木稔氏(元新日鉄)・赤沼英雄氏(岩手県立博物館)は天内山遺跡の鉄器について金属学的解析、大浜中遺跡出土の刀装具を廣井雄一氏(文化庁美術工芸課)、鍔片を鈴木友也氏(文化庁文化財保護審議委員会)が解説している。このように注目されたのは昭和63年(1998)に武具類に関心のあった佐藤矩康氏が余市水産博物館を訪れたのがきっかけとなり、調査が進められたものであった。

同年5月10日～11月9日、余市町教育委員会による大川遺跡の発掘調査が行われた。

同年8月、宮宏明氏は「化外の地における銚帯金具出土の意義」¹⁴⁷⁾において、大川遺跡出土の刻書土師器や墨書須恵器の資料紹介をふまえて本州との関連についてふれている。

同年9月、山岸素夫氏(古甲冑研究家)は「北海道大浜中出土の異式の胴丸残欠についての一考察」

¹⁴⁸⁾において遺物の説明をしつつ類例と比較を試みている。氏は昭和49年(1974)と昭和61年(1986)に水産博物館で調査を実施し、全国的に見ても異質であると注目している。

同年11月、野村崇氏・瀧瀬芝之氏(埼玉県埋蔵文化財調査事業団)は「北海道余市町フゴッペ洞窟前庭部出土の鉄製武器」¹⁴⁹⁾において昭和46年に発掘調査された第1号墳墓出土の副葬品を紹介し、太刀の年代から7世紀前半の可能性を述べている。

平成3年(1991)5月10日～10月31日、余市町教育委員会により大川遺跡の発掘調査が行われた。

同年12月1日、古代学協会北海道支部・余市町教育委員会によるフゴッペ洞窟40年記念として講演会とシンポジウムが余市町図書館を会場として開催された。基調講演は峰山巖氏であり、洞窟との関わりや刻画の謎について話された¹⁵⁰⁾。

平成4年(1992)3月、野村崇氏・大島秀俊氏は「北海道余市町フゴッペ洞窟出土の土器(1)」¹⁵¹⁾において、すでに報告されている洞窟の報告書であるが、写真掲載であることから北海道開拓記念館所蔵の報告書関連資料を含めて実測図、拓本を掲載している。フゴッペ洞窟出土の土器を調査・研究する上で基礎資料として重要である。

同年3月、長沼孝氏(北海道教育委員会)は「北海道の土偶」¹⁵²⁾において道内の土偶を年代別に集成をしている。この論考は国立歴史民俗博物館が主催した全国の土偶情報を把握する目的にまとめられたものであり、余市ではフゴッペ貝塚・大谷地貝塚・栄町5・登町5遺跡が掲載されている。

同年5月18日～11月7日、余市町教育委員会により大川遺跡の発掘調査が行われた。

平成5年(1993)3月、土谷昭重氏(北海道考古学会)は「フゴッペ洞窟岩壁画一部画像の民族学及び民俗学資料による若干の考察」¹⁵³⁾において、刻画を再検討し、呪術的雰囲気が充満していると記している。

同年3月、宮宏明氏は「大川遺跡出土のキュラソ一瓶とコンプラ瓶」¹⁵⁴⁾において大川遺跡出土の資料紹介と近世・近代の余市場所について触れている。

同年6月15日～11月19日、余市町教育委員会により大川遺跡の調査が行われた。

同年8月、宮宏明氏「北海道出土の泥めんこ」¹⁵⁵⁾において大川遺跡出土と他遺跡の資料紹介をしている。

同年11月、熊谷仁志氏(北海道埋蔵文化財センター)は「押型文土器の変遷と縄文文化の位置付け」¹⁵⁶⁾において道内の押型文土器を地域別に整理し、フゴッペ貝塚出土資料を道央3類とし、第6期の円筒上層b式に位置づけている。

同年12月、宮宏明氏は「墓塚伴出の魚形石器と鉄製品」¹⁵⁷⁾において大川遺跡GP179出土の魚形石器の頭部と尾部に樹皮と紐の痕跡が残る貴重な資料として紹介している。

平成6年(1994)3月、宮宏明氏は「大川遺跡出土の源氏香施文の染付と香道」¹⁵⁸⁾において近世陶磁器の紹介と染付模様について記している。

同年4月、宮宏明氏と青木誠氏は「サメの歯とサパンベ～余市町大川遺跡墓塚伴出例をめぐって」¹⁵⁹⁾において、資料紹介と民族例との比較をしている。

同年6月16日～10月31日、余市町教育委員会により大川遺跡の調査調査が行われた。

同年7月30日～8月3日、北海道・東北史研究会の主催による余市シンポジウムが余市町中央公民館を会場に開催されている¹⁶⁰⁾。

同年札幌市市民局に保管されていた山岸コレクションの考古遺物5点(土器2点、ヒスイ勾玉1点、土製品2点)が余市町に移管されている¹⁶¹⁾(第3図下)。

同年11月、宇田川洋氏(東京大学)は、「北方地域の土器底部の刻印記号論」¹⁶²⁾において北海道と東北アジアの刻印記号の分布から日本海を挟んだ大陸側との文化交流を想定している。また刻印はフゴッペ洞窟の刻画に見られる仮装人物(シャーマン)の具象から抽象への記号化のプロセスとして、擦文土器の刻印との類似性を指摘している。

平成7年(1995)3月、大島秀俊氏は「フゴッペ洞窟および手宮洞窟壁画の一考察」¹⁶³⁾において岩壁画を分類、構図についてフゴッペ洞窟と手宮洞窟を比較している。

同年4月、国指定史跡「旧余市福原漁場」が整備を終え一般公開された。昭和57年(1982)2月、59年(1984)8月、62年(1987)12月にかけて敷地が拡大されて史跡指定となっている。

同年5月16日～11月7日、余市町教育委員会により入舟遺跡の発掘調査が、大川遺跡と同様に余市川改修事業に伴って調査された¹⁶⁴⁾。近世～近代の貝塚、石組炉が検出され、客土からは縄文時代の手形・足形土版が発見された。

同年7月、後志管内で初めて、制度化となる余市町の文化財ボランティア説明員の会が発足した。国指定重要文化財「旧下ヨイチ運上家」、国指定史跡「旧余市福原漁場」・「フゴッペ洞窟」の町内外の来館者への文化財ガイドとして期待されている¹⁶⁵⁾。

同年9月16日～17日、小樽市教育委員会の主催で『手宮洞窟シンポジウム～波瀾を超えた交流』¹⁶⁶⁾が小樽市民センターを会場に開催された。手宮・フゴッペ洞窟を含む岩壁彫刻と北東アジアとの関係などが討論されている。

平成8年(1996)2月、高瀬克範氏は「恵山文化における魚形石器の機能・用途」¹⁶⁷⁾において道南地方に分布する魚形石器について、大川遺跡 GP179 墓坑出土の魚形石器見られる紐状の痕跡や民族例から骨角器を着装して使用する方法を考察している。

同年3月、宮宏明氏は「北の海の文化交流の跡を探る～北海道余市町大川遺跡の発掘調査」¹⁶⁸⁾において、6年間の大川遺跡の遺構・遺物について概要を報告している。

同年3月、高橋理氏(千歳市教育委員会)は「余市式再考」¹⁶⁹⁾において、余市大谷地貝塚出土の余市式の沿革をふまえて、その型式の把握の在り方を再考している。

同年6月18日～平成9年2月23日、『発掘された日本列島 96～新発見考古速報展』¹⁷⁰⁾において大川遺跡出土の青銅製鈴、刻書土器、ガラス玉、骨角器などが出品された。

同年7月31日～8月2日・11月9日～18日、登町11遺跡が工事立会に伴う発掘調査をしている¹⁷¹⁾。道営半島基幹農道整備事業登地区に伴う道路工事中に遺物が出土したため、藤原秀樹氏(北海道教育委員会)の指導のもと余市町教育委員会の浅野敏昭学芸員他で調査されている。この遺跡からは縄文早期の竪穴が発見されている。

同年9月、鈴木靖民氏(国学院大学)は「古代蝦夷の世界との交流」¹⁷²⁾において「類聚国史」延暦14年(795)の記事に見られる夷地志理波村を余市の大川遺跡との類縁性を仮説とし、物資の集積地、港湾としての大川擦文集落を想定している。

同年9月、宮宏明氏は「大川遺跡出土古代の文字資料をめぐる」¹⁷³⁾において、本州における遺物との比較を試みている。

同年9月、岡田淳子氏は「流通拠点～余市大川」¹⁷⁴⁾を第10回大学と科学公開シンポジウムで発表し、

大川遺跡を縄文～中世にかけて南北文化の交流基地と強調している。このシンポジウムは第7回全国生涯学習フェスティバル(まなびピア)の一環として札幌で開催されたものであった。

同年10月、宮宏明・小川康和氏は「渡来銭とガラス玉」¹⁷⁵⁾において大川・入舟・大浜中遺跡の資料を紹介し、渡来銭とガラス玉を通して山丹交易などを推定している。

平成9年(1997)4月、北海道教育委員会の田才雅彦氏(文化財保護主事)による町内の一般分布調査が実施され、余市町教育委員会の乾・浅野学芸員が同行する。

同年5月、宮宏明氏は「いかさま賭博と考古学」¹⁷⁶⁾において大川遺跡出土のサイコロの資料紹介と類例について記している。

同年5月、宮宏明氏は「場所請負と大川遺跡」¹⁷⁷⁾において大川遺跡の近世以降・遺物と場所請負人であった林家文書との関連性について記している。

同年5月12日～7月31日・11月1日～30日、大谷地貝塚の遺跡発掘事前総合調査が実施された¹⁷⁸⁾。この場所は安田貢氏の経営するこのブドウ園となっており宅地計画が進められたことから平成8年に北海道教育委員会による範囲確認調査が行われ、現状保存を前提として開発業者と地権者の理解を求めた。その後、トレンチ調査による詳細分布調査を行い、岡村道雄氏(文化庁調査官)の現地視察では、縄文時代の汀線に沿って貝塚や住居などが存在する重要遺跡であるとの見解があった。平成12年11月20日に国指定史跡としてこの一帯が保存されることとなった。

同年5月12日～11月11日、宮宏明氏を調査担当とした入舟遺跡の発掘調査が、余市川改修事業に伴って行われた。近世アイヌの墓坑群から豪華な太刀や漆器類の副葬品が出土し注目された¹⁷⁹⁾。

同年8月1日～10月31日、登川右岸遺跡の発掘調査が大浜中登線道路改良工事に伴って行われた¹⁸⁰⁾。この遺跡は登川の氾濫原のため、水が浸透するため矢板で調査区を囲み生活面の砂層まで約1mの粘土層を取り除いて調査を行った。縄文時代中期に相当する北筒式の竪穴、土坑、剥片のブロックなどが発見されている。

同年9月、宮宏明氏は「北海道大川遺跡・大浜中遺跡出土の中世陶器」¹⁸¹⁾において大川遺跡の資料紹介とともに余市の中世について記している。

同年9月、小樽市先史談話会から『大谷地貝塚と五十嵐鐵』¹⁸²⁾が刊行された。小樽市博物館、余市水産博物館、旭川市博物館に収蔵されている大谷地貝塚出土土器を集成したもので、標準資料を知るうえで重要である。

同年11月10～15日、西崎山ストーンサークルの範囲確認調査のため、北海道教育委員会が主体となり、小樽市教育委員会、余市町教育委員会の協力で3区を中心とした調査が行われた。尾根全体に集石が散布しており、その広がり地形測量を実施している¹⁸³⁾。

平成10年(1998)5月11日～10月31日、再び大川遺跡が大川橋線街路事業に伴って発掘され、平成15年(2003)までの長期発掘調査である¹⁸⁴⁾。平成10年度は、旧山岸病院の敷地であり、その後旧公民館跡のため攪乱が激しい。昭和33年の大川遺跡の調査は区域の南西部付近と推定され、縄文時代晩期の墓坑群が発見された。墓上部は他場所からの土を封土とする特徴があり大川式葬法と仮称された。

同年5月11日～10月31日、余市町教育委員会により入舟遺跡が余市川河川改修事業に伴って発掘調査された¹⁸⁵⁾。2年間の継続調査であり、対岸では大川遺跡の調査が行われている。続縄文時代の貝塚や近代の釜場跡、河川の護岸石垣が発見されている。この遺跡で町内初の測量にかかるトータルステーションを導入している。

同年5月、余市町史編纂室から『余市生活発達史(史料2)』¹⁸⁶⁾が刊行された。「古代・中世の生活文化以前」において阿倍臣北征余市説、大川遺跡の擦文集落と文化接触、コシャマインとの戦いと與衣地の役割などが記されている。

同年5月、宮宏明氏は「中・近世と古墳時代の特殊な刀子」¹⁸⁷⁾において大川遺跡から出土した異形な刀子の類例とその用途について記している。

同年5月、石川直章氏(小樽市博物館)は「回転式銚先再考」¹⁸⁸⁾において続縄文文化からアイヌ文化のキテに至る骨角器製銚先の変遷について考察しており、続縄文文化ではフゴッペ洞窟出土の銚先を重視している。

同年6月、『北方の考古学(野村崇先生還暦記念論集)』が刊行され、宮宏明氏は「縄文文化の土鈴と鳴る土偶」¹⁸⁹⁾において大川遺跡出土の資料紹介と類例について記している。斉野裕彦氏(仙台市富沢遺跡保存館)は「北海道・東北の柱状片刃石斧」¹⁹⁰⁾にお

いて分布、時期、形態の特徴からⅠ～Ⅲ類に分けて説明をしており、余市では沢町・栄町5・フゴッペ洞窟資料についてふれている。小川勝氏は「北海道開拓記念館蔵フゴッペ洞窟岩面刻画石膏型資料評価」¹⁹¹⁾において94箱111個の石膏型と実作品との比較の重要性を指摘している。土谷昭重氏は「北海道開拓記念館蔵余市フゴッペ洞窟岩面刻画 Rock Engravings 石膏資料調査の概略な報告」¹⁹²⁾において石膏資料と岩面刻画画像との比較を行っている。

同年11月、芸術集団自由の会(代表:中村小太郎氏)により第1回縄文野焼き大会が入舟遺跡発掘跡地で開催され、以降継続されている¹⁹³⁾。

平成11年(1999)3月、乾は「旧東中学校庭遺跡出土の遺物について」¹⁹⁴⁾において水産博物館に収蔵されていた内耳土鍋と骨角器の銚頭を資料紹介している。

同年3月、押切孝作氏(余市郷土研究会)は「ピラミッド・余市姫・刻画～私の好古学」¹⁹⁵⁾においてフゴッペ洞窟刻画とユウカラに出てくる余市姫・ライクルハッターリチャシとの関連性について記している。

同年5月12日～10月31日、余市町教育委員会により入舟遺跡の発掘調査が行われた。昨年度調査区の上流にあたり、この場所は河川敷地の埋め立て地であり近代の遺物が少量出土している。

同年5月19日～7月7日、北海道開拓記念館・朝日新聞社の主催、国立民族学博物館の協力により『新弥生紀行～北の森から南の海へ』(巡回展)が北海道開拓記念館を会場に開催された¹⁹⁶⁾。この展示にあたりフゴッペ洞窟実物大の奥壁と刻画が再現され出土遺物資料とともに注目された。巡回展後、このレプリカはフゴッペ洞窟保存館で教育教材として展示されることとなった。

同年6月、以前から知られていた八幡山遺跡の範囲確認調査を行っている。現在に残る配石の周辺を精査して測量と写真撮影を実施している¹⁹⁷⁾。

同年8月18日、ライクルハッターリチャシの一部を田才雅彦氏(北海道教育委員会)と乾(余市町教育委員会)が土地所有者の押切孝作氏の立合いの下でトレンチ調査を実施したが、人為的な痕跡は確認されなかった¹⁹⁸⁾。

同年10月16日～17日、小川勝氏(鳴門教育大学)が代表となるフゴッペ洞窟・岩面刻画の総合的研究の一環として「フゴッペ洞窟セミナー」が丸山公園

管理棟を会場として開催された¹⁹⁹⁾。

同年11月9～10日、日本考古学協会1999年度釧路大会のシンポジウム『海峡と北の考古学～文化接点を探る』が釧路市生涯学習センターで開催された²⁰⁰⁾。道内の旧石器から擦文文化にかけての主要遺跡の考古資料がまとめられている。

平成12年(2000)1月～平成13年3月、余市町教育委員会『大川遺跡における考古学的調査』Ⅰ(総説・竪穴状建物跡篇)、Ⅱ(3月:墓坑篇1)、Ⅲ(12月:墓坑篇2)、Ⅳ(平成13年3月:総括篇)が刊行された。平成元年～5年の大川遺跡は、概報と遺物論考が先行していたが、正式な報告書によってようやく全貌が明らかになった²⁰¹⁾。

同年2月、仲鉢浩氏(余市縄文野焼きの会)は「北海道余市町フゴッペ貝塚出土の貝製平玉について」²⁰²⁾において青木延広氏がフゴッペ貝塚で採集したビノス貝製と思われる平玉1点を紹介している。

同年3月、石川直章氏(小樽市博物館)は「ヌッチ川遺跡出土の銚先」²⁰³⁾について、発掘資料を実測し、その年代について考察している。

同年3月、鈴木克彦氏(青森県立郷土館)は「北海道後志・胆振知己の中期末葉から後期前葉の編年～北海道西南部の縄文後期編年の研究4」²⁰⁴⁾において余市式と手稲砂山式の問題点を指摘し、編年的位置づけを考察している。

同年3月、佐藤一夫氏(苫小牧市埋蔵文化財センター)は「北海道出土の貝製装飾品について」²⁰⁵⁾において道内の貝製装飾品を集成しており、フゴッペ洞窟出土のマクラガイは自然遺物としているが加工痕らしい部分があることから装飾品の可能性を記している。

同年5月17～11月6日、余市町教育委員会により大川遺跡服部・迂回路・道々地点が発掘調査された。

同年8月13日～10月20日、余市町教育委員会により安芸遺跡の発掘調査が余市町黒川第一土地区画整理事業に伴い発掘調査された²⁰⁶⁾。この付近一帯はかつて湿地で水田経営地帯であったが、減反政策と宅地化に進むようになった。そのための農地から住宅地への転換を図ることを目的に都市計画道路を決定し、幹線道路を軸として道路・公園などの公共施設を整備することとなった。遺跡の範囲が広範囲となったため、年次ごとに試掘を進めつつ発掘調査となった。この遺跡は黒川砂丘部分の調査で縄文時代中期～後期の土坑群と余市式の竪穴が発見された。

同年9月25日～10月25日、北海道重要遺跡の詳細調査として(財)北海道埋蔵文化財センターが北海道教育委員会の委託を受けて西崎山ストーンサークルのある尾根一体を試掘調査している²⁰⁷⁾。第3区の配石遺構が測量実測され、他の配石について明確な人為的な遺構は検出されなかったが、全体に礫群の散布が確認された。なお、平成13年(2001)3月に「西崎山ストーンサークル」から「西崎山環状列石」へ名称が変更になっている。

同年11月18日～20日、北海道開拓記念館・余市町・余市町教育委員会主催による「発見50周年記念フゴッペ洞窟シンポジウム～過去・現在・未来」²⁰⁸⁾が余市町中央公民館を会場に開催された。

平成13年(2001)3月、『余市水産博物館研究報告(フゴッペ洞窟発見50周年記念報告集)』4号が刊行される。平成11年10月に丸山公園で開催されたフゴッペ洞窟セミナーで発表された内容²⁰⁹⁾が中心である。高瀬克範氏(北海道大学生)・福田正宏(筑波大学生)は「入舟遺跡出土の土器について～道央の終末期縄文土器と初期統縄文土器の編年」において1995・1997年に調査された入舟遺跡の未報告資料を紹介している²¹⁰⁾。

同年5月14日～6月30日、余市町教育委員会により大川遺跡服部地点の発掘調査が行われた。

同年5月、新進考古学同人会の雑誌『史峰』が刊行され、乾は「北海道余市町入舟採集の碧玉製管玉について」²¹¹⁾において入舟遺跡周辺の河川護岸附近から採集した統縄文時代後半と思われる管玉を紹介している。仲鉢浩氏は「側面に貫通孔を持つ土製品について」²¹²⁾において山岸コレクションである渦巻状沈線を施す土製品とその類例について紹介している。

同年6月、乾は「余市川流域の中・近世」²¹³⁾において、町内の遺跡と特徴的なアイヌ民具についてふれている。この小稿は平成11年9月24～26日に「勝山館発掘調査20周年記念・上ノ国シンポジウム」として上ノ国町総合福祉センターのジョイじょぐらを会場として開催された記録である。

同年7月4日～9月28日、余市町教育委員会によりフゴッペ洞窟史跡整備に伴う発掘調査が行われた²¹⁴⁾。調査は建物の前庭部、洞窟周辺のトレンチ調査、旧フゴッペ刻画の再調査であった。刻画は確認されたが、真偽については判然としない。

同年11月12日～12月4日、余市町教育委員会に

より大川遺跡本多地点が小面積ながら町道の拡幅工事に伴って発掘調査された²¹⁵⁾。

平成14年(2002)3月、佐藤矩康・成田重信(北海道大学)・山崎克彦(日本美術刀剣保存協会)・石川直章・佐々木浩一(八戸市立博物館)・赤沼英男(岩手県立博物館)氏と乾は「石狩・余市湾岸出土上古刀のCT及びCRによる構造解析(1)」²¹⁶⁾において天内山遺跡2振り、蘭島遺跡1振り、青森県丹後平古墳1振りの上古刀のX線CT及びCR法による構造解析の報告をしている。製錬して鋼を製造した遺跡でないことから、他地域からの供給であり、使用不能になった鉄器の再利用として上古刀を製作した可能性を考察している。

同年3月、『余市水産博物館研究報告』5号が刊行され、越田賢一郎氏(北海道埋蔵文化財センター)は「余市町の中・近世遺跡」²¹⁷⁾において道内での余市の位置付けを行っている。小嶋芳孝氏(石川県埋蔵文化財センター)は「大川遺跡出土の黒色壺再々検討」²¹⁸⁾において復元された黒色壺を器形修正して再実測を行い、北方渡来ではなく国内産の可能性を説いている。乾は「天内山遺跡出土の続縄文土器について」²¹⁹⁾において報告書で写真掲載であった土器を実測して紹介している。

同年3月、川端有氏(郷土史家)は「フゴッペ丸山に情熱を傾注した人々」²²⁰⁾において旧フゴッペ刻画から発掘調査に至るまでの記録と聞き取り調査をまとめている。川端氏本人もフゴッペ洞窟に情熱を傾注した一人でもあった。

同年5月21日～11月28日、余市町教育委員会により大川遺跡道々・迂回路・旧河口地点の発掘調査が行われた。

同年5月、乾は「縄文時代晩期から続縄文時代への墓墳変遷」²²¹⁾において大川遺跡の墓墳形態と副葬品の変遷について記している。

同年6月、乾は「海の民としてのアイヌ社会の漆器考古学」²²²⁾において大川・入舟遺跡の墓坑出土の漆器から本州から14世紀以降の搬入の可能性を記している。

同年9月13日～11月3日、北海道開拓記念館第55回特別展『洞窟遺跡を残した続縄文の人々』²²³⁾が開催され、道内の縄文～擦文時代までの洞窟遺跡を写真や出土遺物を通して紹介され、河野コレクションにあるフゴッペ洞窟出土のオホーツク式土器も展示された。展示図録ではフゴッペ洞窟の発掘(昭

和26～29)に参加し、記録写真を担当した奥野義扶氏(当時は小樽商大学生)の貴重な写真が多数掲載されている。

同年10月7日～11月23日、天理大学付属天理参考館の主催による『古代の北海道』²²⁴⁾が東京都にある天理ギャラリーにて開催された。参考館が所蔵する清野謙次コレクションを中心としたもので、余市町大川遺跡、大谷地貝塚、フゴッペ洞窟の岩面刻画片が展示されている。

平成15年(2003)3月、重要遺跡確認報告書『奥尻町青苗砂丘遺跡2』²²⁵⁾において越田賢一郎氏による「後志管内の遺跡分布調査」が報告されている。ここでは河野コレクションにあるフゴッペ洞窟出土のオホーツク式土器が拓本として掲載されている。

同年3月、岡田淳子氏(北海道東海大学)は「近世アイヌ墓の検証」²²⁶⁾において入舟遺跡出土の17・18世紀のアイヌ墓の分析を試みている。

同年3月、『余市水産博物館研究報告』6号が刊行され、石井淳平氏(北海道埋蔵文化財センター)は「栄町1遺跡・大浜中遺跡出土の中世陶器」²²⁷⁾において水産博物館に保管されている伝栄町1遺跡の白磁碗の実測、大浜中遺跡の中世陶器を再実測して両遺跡の関連性について考察をしている。浅野敏昭氏は「フゴッペ洞窟古代彫刻の考察：奥野義扶氏の未完遺稿より」²²⁸⁾において、発見当時の洞窟や刻画の様子について具体的に知ることができる。

同年3月、余市町教育委員会・北海道開拓記念館編集による『国指定史跡フゴッペ洞窟』の解説図録を作成している²²⁹⁾。

同年3月、押切孝作氏は「ピラミッド・余市姫・刻画～私の好古学Ⅱ」²³⁰⁾において前回著作(平成11年)の追跡調査後について記している。

同年5月、乾は「北海道出土の中世和鏡について」²³¹⁾において余市町内で出土した和鏡を集成し、道内出土の和鏡と比較している。

同年5月8日～10月31日、余市町教育委員会により安芸遺跡の発掘調査が黒川第一土地区画整理事業に伴い実施された²³²⁾。町内初の低湿地調査となり、泥炭層によって湧水が激しいため、矢板で調査区を囲いポンプで揚水しながら発掘が進められた。縄文後期の土器や石器とともに大量の木製品が出土し、小樽市忍路土場遺跡と比較できる良好な資料となったそのため、残された低湿地部分の宅地化は協議して公園として現状保存することとなった。

同年10月、日高慎氏（同志社大学生）は「北海道大川遺跡出土資料の再検討」²³³においてGP96出土の鉄器、GP34出土の須恵器の再実測と他資料との検討から余市湾は北方あるいは南方文化の日本海側での結節点（中継地点）と考察している。

同年12月、小川勝編『フゴッペ洞窟・岩面刻画の総合的研究』²³⁴において小川勝氏は美術的視点から刻画をセクション別に個々の制作技法に検討を加え、北東アジアの岩面刻画との比較を試みている。

平成16年（2004）3月、乾は「北海道の中世墓について」²³⁵において道内の中世墓を集成し、Ⅰ群（火葬）・Ⅱ群（土坑）・Ⅲ群（板碑の伴う墓）に分け、それぞれを形態から分類している。大川遺跡からはⅠ・Ⅱ群が確認され、仏教の波及を考察している。

同年3月、余市町教育委員会から『国指定史跡フゴッペ洞窟保存調査委員事業報告書』²³⁶が刊行された。保存調査委員会は福田正己氏（北海道大学）を委員長として平成9～15年度にかけて、洞窟調査、保存施設の改修などを実施したもので、フゴッペ洞窟における調査・研究が総括的まとめられている。

同年3月、鈴木琢也氏（北海道開拓記念館）は「擦文文化期における須恵器の拡散」²³⁷において道内出土の須恵器から五所川原産須恵器とそれ以外の須恵器を抽出してその分布と変遷を記しており、余市ではフゴッペ貝塚・大川・入舟・沢町遺跡の須恵器を対象としている。

同年3月、『余市水産博物館研究報告』7号が刊行され、増田智仁・山田陽介・池内克史氏（東京大学）・朽津信明氏（東京文化財研究所）は「三次元計測データを用いたフゴッペ洞窟内の線刻画の太陽光線の移動による見えのシミュレーション」²³⁸において現状の洞窟最奥部まで直射日光が届く場合があることを確認し、壁画を描く場合に自然光の利用について検討すべきとしている。乾は「考古学入門 土器の見分け方図鑑」²³⁹において町内出土の土器について解説している。春日拓也・清水昌樹氏（シン技術コンサル）・浅野敏昭氏は「フゴッペ洞窟・岩面刻画の立図面作成について」²⁴⁰において洞窟の壁面に50cm四方のグリッドを設定し、すべての刻画配置図を作成している。

同年4月19日、フゴッペ洞窟開館落成式が行なわれ、10月23日には開館記念として千代肇氏（元函館市立博物館）による講演が行われている²⁴¹。

同年5月、乾は「余市町大川遺跡出土ウニ形土器

について」²⁴²において墓坑から出土したウニ形土器の紹介とともに動物意匠遺物についてふれている。

同年7月1日～11月19日、余市町教育委員会により安芸遺跡が余市町黒川第一土地区画整理事業に伴い発掘調査された。黒川砂丘から低湿地部分にかけての調査で縄文時代後期の遺物が多量に出土した²⁴³。遺構として配石遺構が1基発見され、かつて調査された黒川砂丘の配石遺構との関係が想定される。

同年9月、菊池徹夫氏（早稲田大学）は「東北アジア～文字から遠い世界」²⁴⁴において手宮・フゴッペの岩画は仮装したシャマンなどの特殊な人物の姿形を表現しているものが多く、「齊一的に展開される擦文土器の文様は初めから終わりまで、手宮・フゴッペの人物像を主要テーマとする変奏ともいえるのである」と記している。

同年9月、瀬川拓郎氏は「刻印記号の意味」²⁴⁵において擦文文化に見られる刻印記号の分布と分類から日本海沿岸の地域集団は同族関係で結ばれていると推定しており、余市大川遺跡出土の土師器資料にも注意している。

平成17年（2005）2月、畑宏明氏（北海道教育委員会）は「北海道の縄文記念物」²⁴⁶においてストーンサークルと夏至・冬至における太陽の日の出・日の入の方位方向を調査している。西崎山環状列石について日の入はシリバ岬、日の出は忍路半島の根元であることを記している。この調査は小林達雄氏（国学院大学）の縄文ランドスケープの一環として行われたものである。

同年2月、余市ニッカウキスキー北海道工場内の旧竹鶴邸宅・事務所棟・蒸留棟・第一乾燥塔・第二乾燥塔・研究室（現リタハウス）・リキュール工場（現混和室）・第一貯蔵庫・貯蔵庫（現蒸留液タンク室）が国の登録有形文化財（建造物）に認定された²⁴⁷。

同年3月、乾は「竪穴状建物跡の再検討～大川遺跡における竪穴群を中心として」²⁴⁸において報告された竪穴の年代と機能について再検討を試みている。

同年3月、『余市水産博物館研究報告』8号が刊行され、古瀬戸恵美・斎藤努氏（国立歴史民俗博物館）は「続縄文時代のガラス玉の自然科学的分析」²⁴⁹において、4墓坑から出土したガラス玉はカリガラスであり、その流入について考察している。新見倫子氏（名古屋大学）・乾は「フゴッペ洞窟前庭部出土のシカ肩甲骨について」²⁵⁰において実測を行い、観察について記している。原寿靖氏（余市町教育委員

会臨時)は「大川遺跡出土のミニチュア土器について」²⁵¹⁾において墓坑から出土したミニチュア土器と副葬品の関係についてふれている。小川康和氏(余市町教育委員会)は「大川遺跡における近世以降の墓坑について」²⁵²⁾では本報告に掲載されなかった墓坑について追加報告をしている。

同年5月、乾は「続縄文時代の練り玉について」²⁵³⁾において、大川遺跡と小樽市蘭島餅屋沢遺跡出土の練り玉を比較している。

同年6月1日～12月6日、余市町教育委員会による大川遺跡の発掘調査が余市町都市計画道路事業(3・4・13河口港線)に伴って実施された。ここでは縄文時代晩期の墓坑群と近世末と思われる貝塚が発見された²⁵⁴⁾。

同年8月、大塚和義氏(国立民族学博物館)は「岩絵の道～アジアが共有するイメージのネットワーク」²⁵⁵⁾において地域別にみた形象を類型・比較し、現代でも岩絵を崇拜し、信仰の対象として精神的な表象として生命を保持している例を挙げている。

同年9月、北野信彦氏(くらしき作陽大学)は「アイヌ関連遺跡の近世出土漆器」²⁵⁶⁾において入舟遺跡の漆器碗は京都蒔絵師集団である幸阿弥作成の高台寺蒔絵との関連が強いこと、大川遺跡では漆器破片中に琉球漆器と関連が強い沈金技法にあることから、近世アイヌ社会の多様性を指摘している。

同年9月、野村崇氏(北海道北方博物館交流協会)は「北海道出土のヒスイ製装飾品～研究史と出土玉の概観」²⁵⁷⁾において道内ヒスイの分布、出土状況などをまとめている。

同年12月、瀬川拓郎氏(旭川市博物館)は「擦文文化の異文化交流と自然利用」²⁵⁸⁾において擦文土器底部の刻印が日本海沿岸に見られることから道北擦文集団、道南の青苗文化集団、余市を含む積丹半島周辺を道央擦文集団とし、北東アジアとの交易ネットワークを推定している。

平成18年(2006)3月、藤原秀樹氏(北海道教育委員会)は「北海道における縄文後期・晩期の墓制とヒスイ玉」²⁵⁹⁾において墓制の変遷と副葬品のヒスイ玉は後期中葉から後葉と晩期前葉から中葉にかけて多くなる傾向を指摘し、余市大川遺跡が分析対象となっている。

同年3月、『余市水産博物館研究報告』9号が刊行され、乾は「考古学入門 石器の見分け方図鑑」²⁶⁰⁾において町内の遺跡から出土する剥片・礫石器を説

明している。松村博文・川島如仙・島田啓志・乗安整而氏(札幌医科大学)は「余市町大川遺跡 2003年度出土人骨について」²⁶¹⁾において人類学的所見を報告している。

同年3月、小林達雄氏(国学院大学・新潟県立歴史博物館)は「フゴッペ洞窟壁画の原郷土」²⁶²⁾において樺太の宗仁式とフゴッペ洞窟の出土土器と極めてよく似た土器があり、同じ仲間であるとしている。サハリン州郷土博物館のシュービン氏発掘のサドフニキ遺跡の隆起文の人形(ひとがた)モチーフは洞窟壁画に共通していることから両者の関係は尋常なものではなかったと記している。

同年7月、乾は「上ヨイチ運上家とその周辺」²⁶³⁾において、古文書にみる運上家の規模と位置と発掘調査による礎石の配置から運上家の位置を推定している。

同年11月、菊池徹夫氏は「地域文化としての岩絵～北東アジアの中のフゴッペ・手宮刻画」²⁶⁴⁾においてロシア、韓国、山口県下関市でのフィールドノートの調査記録を交えながらフゴッペ・手宮は、現状としてかなり特殊・孤立的と記している。

同年12月、佐藤矩康氏は『北の出土刀を科学する～最新科学と考古学よりみた刀剣文化史への道程』²⁶⁵⁾を刊行している。東北・北海道の出土の刀類をX線CT・CR画像、MPR断層画像で解析しており、余市からは天内山遺跡、フゴッペ洞窟前庭部出土の太刀を調査している。

平成19年(2007)1月、乾は「フゴッペ洞窟の岩面刻画について～縄文・弥生文化からの視点」²⁶⁶⁾において縄文・続縄文文化の意匠遺物と刻画との類似性にふれている。

同年3月、桐谷賢一氏は「フゴッペ洞窟発見当時の発掘に携わって」²⁶⁷⁾において第一次～第二次の発掘調査の発掘状況について記している。

同年3月、『余市水産博物館研究報告』10号が刊行され、乾は「天内山遺跡出土の第Ⅱ群土器について」²⁶⁸⁾において報告書に掲載された土器を再実測して考察を加えている。

同年3月、乾は「山岸コレクションの勾玉と大川遺跡」²⁶⁹⁾においてヒスイ製の勾玉の形態と墓坑内での玉の組み合わせについて記している。

同年5月、藤岡智子氏(早稲田大学生)は「続縄文文化のコハク玉」²⁷⁰⁾において道内のコハク玉の計測や点数を通して、地域差、時期差を検討し貝製平

玉との関連にふれており、余市では大川遺跡が対象となっている。

同年7月11日～8月10日、余市町教育委員会により大川遺跡内にある個人住宅の移転に伴いその敷地内の調査を実施している²⁷¹⁾。

同年9月、島田善造氏のご遺族から札幌市埋蔵文化財センターを通してフゴッペ洞窟採集の遺物が余市町教育委員会に寄贈された。

同年10月、浅野敏昭氏は「北海道積丹半島の漁場遺構」²⁷²⁾において、入舟・大川遺跡の石組炉群の在り方を通して鯨魚が盛況だった頃の杓製造用施設と推定している。

同年11月、乾は「近世アイヌ墓と出土漆器について」²⁷³⁾において大川・入舟遺跡を中心として、出土漆器と伝世漆器との相違、古文書に見られる漆器の値段にふれている。

平成20年(2008)1月、乾は「余市地方における漆器碗に見られるシロシについて」²⁷⁴⁾において擦文時代に見られる刻印土器とアイヌ碗のシロシとの関連性についてふれている。

同年3月、『余市水産博物館研究報告』11号が刊行され、小川康和氏は「大川遺跡における縄文晩期墓墳の特殊な検出事例について」²⁷⁵⁾において覆土の状況から埋葬の工程を推測している。乾は「大谷地貝塚出土の土偶について」²⁷⁶⁾において、大正14年(1925)に清野謙次氏が発掘した中空土偶が天理参考館付属博物館に保存されていることから、実測図を示してその特徴について説明をしている。

同年8月1日～11月25日、栄町7遺跡の発掘が栄町温泉線交付金改築工事に伴って調査された²⁷⁷⁾。当初は5月からの調査を予定していたが、国会で道路特定財源の用途審議のため、大幅に調査期間の変更となった。この工事は平成15年(2003)から進められたフゴッペ川の改修工事の進展によって道路の改築が必要となったもので、現状は畑地であり、かつての旧河川堆積地である。遺物は縄文時代晩期であり、土偶が1点発見された。この報告書において過去に採集及び発掘された町内の土偶集成と変遷図が掲載されている。

同年11月、小樽市総合博物館監修の『図説 小樽・後志の歴史』²⁷⁸⁾が刊行され、原始・古代～中世の主要遺跡を豊富な写真や図で時代ごとにまとめられている。

平成21年(2009)3月、『余市水産博物館研究報

告』12号が刊行され、乾は「考古学入門 木製品の見分け方図鑑」²⁷⁹⁾において安芸遺跡・小樽市忍路土場遺跡の木製品を主として説明している。日並雄太・村元亨輔・千葉弘貴・斎藤明歩・西村ひかり・杉岡舞(札幌稲北高校自然科学部)・松田義章(札幌稲北高校)氏は「北海道指定史跡西崎山環状列石を構成する岩石とその由来について」²⁸⁰⁾において、配石遺構の岩石を調査し、大半がシリパ岬の岩石で他に小樽赤石海岸の岩石も見られるとしている。

同年5月、乾は「余市周辺における擦文文化の様相」²⁸¹⁾において、大川遺跡の擦文集落の変遷と中世への移行についてのべている。これは2009北海道考古学会研究大会での発表要旨である。

同年7月1日～9月6日、北海道開拓記念館・枝幸町教育委員会主催により北海道開拓記念館2009移動博物館・オホーツクミュージアムえさし開館10周年記念事業『謎の岩面刻画～フゴッペ洞窟』²⁸²⁾がオホーツクミュージアムえさしを展示会場として開催され、8月23日にはシンポジウム「謎のフゴッペ洞窟・岩面刻画」が日本先史岩面画研究会の後援により行われている²⁸³⁾。

同年11月、関根達人・佐藤雄生氏(弘前大学生)は「出土近世陶磁器からみた蝦夷地の内国化」²⁸⁴⁾において17～19世紀における道内の陶磁器の分布から普及過程を示し、余市大川遺跡の陶磁器組成は松前など和人地域と変わらないと記している。

平成22年(2010)3月、『余市水産博物館研究報告』13号が刊行され、小川康和氏は「大川遺跡検出の未報告の墓について」²⁸⁵⁾において、1989～1994年に調査された大川遺跡の墓坑16基を報告している。乾は「日本海・道央部における擦文文化のニシン漁」²⁸⁶⁾において余市大川遺跡の例から春ニシン漁の重要性と内陸部への河川を利用したニシン交易について推測している。

同年7月、田中広明氏(埼玉県埋蔵文化財調査事業団)は「腰帯をつけた蝦夷」²⁸⁷⁾において余市大川遺跡出土の腰帯から本州律令国家の官人との関連性について考察している。

同年11月7日、余市町・余市町教育委員会、日本先史岩面画研究会主催による国指定史跡・フゴッペ洞窟発見60周年記念国際シンポジウム「世界から見たフゴッペ洞窟」が余市町中央公民館で開催された²⁸⁸⁾。

平成23年(2011)3月、『余市水産博物館研究報

告（総合地球環境学研究所日本列島プロジェクトフォーラム：海・森・人～林家文書と地域資源利用史を考える研究成果報告集）』14号が刊行される。浅野敏昭氏は「余市川河口の石組炉遺構について」²⁸⁹⁾において大川・入舟遺跡の石組炉に着目して近世～近代における水産加工について推測している。小川康和氏は「大川遺跡出土の泰和重寶」²⁹⁰⁾において道内で大川遺跡のみで出土した泰和重寶と他の渡来銭の分布とその利用方法について推測している。

平成24年(2012)3月26日～5月13日、北海道開拓記念館40周年記念事業・北海道新聞社70周年記念事業「国宝にみる北の縄文～北の土偶展」²⁹¹⁾が北海道開拓記念館で開催された。国宝・重要文化財相当の全国的に著名な土偶が展示され注目を浴びた。余市からもフゴッペ貝塚・大川・登5・栄町7・大谷地貝塚の土偶が展示されている。特に大谷地貝塚の土偶は北海道での初公開となっている。

同年3月、『余市水産博物館研究報告』15号が刊行され、乾は「ヨイチアイヌと海の神カムイギリ」²⁹²⁾において余市地方で拝されているシャチ形木製民具であるカムイギリを紹介しつつ、考古遺物や文献などからその源流を推測している。佐藤美智雄氏（北海道考古学会）は「余市町沢町遺跡GP-20墓出土の徳利形土器について」²⁹³⁾において実際に復元土器を製作しての施文方法や課題について記している。

同年4月、三宅俊彦氏（専修大学）は「サハリンの出土銭」²⁹⁴⁾において金時代の泰和重寶が3枚発見されており、沿海州で発見されず、北海道では大川遺跡で1点出土しており、中央の方孔に2カ所に孔が開けられる類似から、装飾品と使用された可能性を考えている。

同年4月、余市水産博物館活動協力会（会長：駒木根恵蔵氏）が発足し、博物館事業、展示図録や記念品販売などのボランティア協力をする事となった。

同年7月1日～10月31日、余市町教育委員会により登町4遺跡の発掘調査がNEXCO東日本による北海道横断自動車道黒松内釧路線（小樽～余市）建設工事に伴って行われた²⁹⁵⁾。当初計画では2年間であったが、工事の進行から4年間の継続調査となった。この一帯は果樹園であり、地形が部分的に削平されていたが、縄文時代早期の貝殻文土器や中期の円筒土器の竪穴や土坑が発見された。Tピットと呼ばれ

る落とし穴が町内で初めて発見されている。

平成25年(2013)6月1日～10月31日、余市町教育委員会により登町4遺跡の発掘調査が行われた。

同年12月、佐藤美智雄氏（北海道考古学会）は『考古学マニアのための北海道後志の遺跡』²⁹⁶⁾をまとめられ、管内市町村に配布している。管内の遺跡分布、地名表を網羅、遺物の集成図も掲載した労作である。平成26年(2014)5月7日～7月31日、余市町教育委員会により登町13遺跡の発掘調査が行われた²⁹⁷⁾。登町4遺跡と同様に高速道路に伴う橋脚部分の調査であり、現況は水田跡地であるため、約1m掘ると湧水が激しく時折ポンプで揚水しながらの調査となった。遺物は縄文時代晩期の遺物が少量と焼土が確認された。

同年8月26日～11月9日、余市水産博物館特別展「考古遺物が語る余市の歴史～旧石器から近世・近代～余市の至宝たち」²⁹⁸⁾が開催され、主要な遺物が一同に公開された。この展示において青木延広氏の所有する登町アップルポット余市附近・冷水峠出土の旧石器、黒川砂丘出土の彫刻の施された有孔石製品、また博物館所蔵の東中学校庭出土の内耳式土器が初めて一般公開された。

同年8月、関根達人氏は「アイヌの宝物とツグナイ」²⁹⁹⁾において余市大浜中・栄町1遺跡出土の武具類の実測図を掲載し、ツグナイ・手印として太刀や鐔などを差出していることを記している。

同年10月11～12日、日本考古学協会2014年度伊達大会『貝塚研究の新視点・墓とモニュメント』がだて歴史の杜カルチャーセンターを会場として開催された³⁰⁰⁾。道内の貝塚地名表、骨角器集成、墓制の集成などが行われている。

平成27年(2015)3月、越田賢一郎（札幌国際大学）・竹内孝・中村和之（函館工業高等専門学校）・高橋美鈴（北海道埋蔵文化財センター）・乾は「北海道余市町大川遺跡から出土したガラス玉の成分分析」³⁰¹⁾において続縄文文化の墓坑から出土したガラス玉はカリガラス系と確認され、他遺跡と比較をしている。

同年5月8日～10月31日、余市町教育委員会により登町4遺跡の発掘調査が行われている。町内ではじめて縄文時代のTピットが検出されている³⁰²⁾。

同年5月、関根達人・佐藤里穂氏（弘前大学生）は「蝦夷刀の成立と変遷」³⁰³⁾において、道内の出土刀の変遷を試みている。余市では大浜中・栄町1・

大川・入舟遺跡出土の刀外装を蛍光X線分析により材質の特定をしている。

平成28年(2016)年2月、余市町史編さん室編『余市町史1：先史～近世(考古篇)』³⁰⁴⁾が刊行される。一般者向けに写真や図を多数掲載して町内の遺跡・遺物を説明している。

同年3月、関根達人氏は「アイヌ文化と大山酒」³⁰⁵⁾において余市入舟遺跡出土の樽蓋板に見られる大山石寺屋の焼印を山形県大山酒と断定し、アイヌ文化と酒との関係について記している。

平成29年(2017)2月25～26日、中村和之氏(函館高専・研究代表)による国際シンポジウム「中近世のアイヌ文化の再構築をめざした学融合的研究」が函館工業高等専門学校を会場として開催された。越田賢一郎氏は「アイヌ文化期(中世相当期)における北海道出土のガラス玉」³⁰⁶⁾において道内出土のガラス玉の材質分析や技法からガラス玉変遷の概要を記している。余市大川遺跡を基準として墓坑GP4(13世紀：カリ鉛ガラス)→GP608(14～15世紀：カリ鉛ガラス+カリ石灰ガラス)→GP600(16～17世紀：カリ鉛ガラス+カリ石灰ガラス)を推測している。

同年8月5～6日、余市縄文野焼き祭り実行委員会(代表：仲鉢浩)による最後の第20回よいち縄文野焼き祭りがはまなす温泉裏の海岸を会場として開催された³⁰⁷⁾。

同年8月、佐藤一夫氏は『北海道出土銭貨地名表』³⁰⁸⁾において道内から出土した日本・中国・朝鮮銭の地名表と銭種別出土遺跡ををまとめており、余市では大浜中、フゴッペ貝塚、大川遺跡が掲載されている。

同年11月、瀬川拓郎氏は『縄文の思想』³⁰⁹⁾において、フゴッペ洞窟の刻画は九州に見られる装飾古墳との関連にふれ、本州の海民との交流を強調している。

3 考古学史から見た余市

明治～平成にかけての余市の遺跡発見・発掘・論考について記述してきたが、戦後の考古学調査は絶え間なく行われ、調査・研究の論考も非常に多いことに驚かされた。

明治10年にアメリカ人のモース氏によって科学的な考古学が進められるが、翌年7月には小樽市手宮での発掘調査が行われている。また坪井正五郎氏

を中心とするコロポックル説など、北海道考古学は日本考古学の歩みとほぼ並行して発展してきたといえる。しかし、北海道では稲作が行われず、弥生文化以降は本州文化の影響を受けつつ、縄文文化～擦文文化へと独自の文化が展開される。北海道では河野常吉氏がアイヌ文化のチャシにいち早く着目し、河野広道、名取武光氏によって縄文文化から擦文文化の研究が進められていく。昭和38年には大場利夫氏を会長とした北海道考古学会が創立し、考古学研究者の情報交換・研究の推進へと導かれ、今日に至っている。

さて、町内の発掘・研究史について記述してきたが、大まかに4期に分けて説明ができそうである。

第Ⅰ期

a：明治21年～30年

石器時代の民族(住民)論争として、渡瀬荘三郎氏のコロポックル説が過熱する最中、坪井正五郎・石川貞治・高畑宜一氏により余市の遺跡が知られるようになった時期。

b：明治31年～大正14年

北海道の研究者である河野常吉・阿部正己氏が北海道の遺跡について詳細に調査され、余市では天内山チャシが発見されている。寺田貞次氏は丹念に小樽と余市を調査して、遺跡地名表・分布図をまとめられ、現在ある埋蔵文化財包蔵地の基礎を作られた時期。清野謙次氏により余市で最初の発掘調査として大谷地貝塚で実施された。

第Ⅱ期

a：昭和元年～20年

昭和初期は忍路郡考古学研究会³¹⁰⁾によるフゴッペ周辺の遺跡分布調査が精力的に行われ、名取武光・河野広道・山岸禮三・五十嵐鐵氏等による余市の発掘調査も行なわれた時期。

昭和2年の旧フゴッペ刻画の発見、大川遺跡、大谷地貝塚の調査は以後の考古学調査に大きな影響を与えている。旧フゴッペ刻画をめぐる、西田氏と違星氏との論争もあった。

b：昭和21～44年

駒井和愛・名取武光・河野広道・大場利夫・峰山巖氏の考古学研究者と今善作・佐藤利雄・沢口清・

久保武夫氏等の余市郷土研究会³¹¹⁾・余市町教育委員会との連携により発掘調査が進められていく時期。

フゴッペ洞窟の発見、西崎山ストーンサークル、大川遺跡の発掘調査は全道的に注目を浴びた。阿倍比羅夫の記事に見る後方羊蹄の場所について瀧川政次郎氏の余市シリバ説に対して河野広道氏の批判があった。

第Ⅲ期

a：昭和45年～62年

天内山遺跡の緊急発掘を始まりとして、開発に伴う発掘が進められるとともに、北海道教育委員会による埋蔵文化財の一般分布調査が行われ、今日ある埋蔵文化財包蔵地台帳が作成された。峰山巖氏が主として発掘調査の担当者となり余市郷土研究会の協力による調査が進められていく時期。

国指定史跡フゴッペ洞窟保存施設に伴う前庭部、国指定史跡の旧下ヨイチ運上家の整備に伴う発掘調査が行われた。

b：昭和63年～平成8年

道路建設、河川改修工事に伴い大規模な開発によって、緊急発掘が急激に増大したために、余市町教育委員会・(財)北海道埋蔵文化財センターによる大規模な発掘調査が行われた時期。

大川遺跡、フゴッペ貝塚、栄町5遺跡、沢町遺跡、入舟遺跡等が調査され、各遺跡の遺構や遺物の分析(年代測定、樹種同定、花粉分析・黒曜石の産地同定など)も行われる。特に大川遺跡の発掘調査は道内において注目されることとなった。

第Ⅳ期

a：平成9年～22年

フゴッペ洞窟の保存施設改修と岩面刻画の国内外調査・研究が総合的に進められ、フゴッペ洞窟発見50・60周年記念シンポジウムが開催された。また余市町教育委員会による国史跡指定に向けた大谷地貝塚の詳細分布調査、(財)北海道埋蔵文化財センターによる重要遺跡確認として西崎山ストーンサークルの調査が行われた時期。

大川、入舟、安芸、栄町7遺跡等が発掘調査され、博物館活動の一環として『余市水産博物館研究報告』の発刊により、考古学のみならず、歴史、自然など様々な分野から余市に関する調査・研究の寄稿が掲

載されるようになった。

b：平成23年～(29年)

これまでの遺跡調査の成果として、余市水産博物館特別展「考古遺物が語る余市の歴史」の開催、余市町史編さん室から『余市町史(考古編)』が刊行され、一般に先史時代～中・近世の考古資料が周知されている。また以前に出土した遺物である漆器・太刀・ガラス玉の材質や技法の分析から年代や流入経路の推定も試みられている。

高規格道路の建設に伴う登町4遺跡の発掘調査が行なわれた。この調査では地形・遺構の計測と図面の作成、遺物実測は業者委託となり、発掘体制も分担制を採用するなど大きな転換期を迎えている。

4 まとめ

余市考古学の範囲は旧石器～近世・近代と対象範囲が広く、それぞれの時代の考古資料が出土しており、北海道の先史時代において重要な役割を担っている。

昭和30年代までの余市の考古資料と言えば大川遺跡出土の山岸禮三氏所蔵の遺物、大谷地貝塚出土の余市式土器、フゴッペ洞窟出土の遺物など個人的・学術的な小面積による発掘資料であったが、昭和40年代後半からの開発に伴う行政発掘は天内山遺跡をはじめ、大規模面積の発掘調査となった沢町・大川・入舟・安芸・フゴッペ貝塚・栄町7・登町4遺跡他がある。出土遺構と遺物は膨大な量となり、遺物の整理や調査・研究、収蔵施設の増築などの対応に迫られることが予想される。

余市の先史時代は、それぞれに時代によって日本海沿岸の地理的な位置から常に道南文化と道東北・北方文化の影響を受けているため、分布や遺跡の性格を検討し、考古資料の科学的分析などの成果を生かしつつ、諸分野との連携を通して社会復元を構築していく必要がある。

余市考古学は130年の歩みを経て今日に至っており、遺跡や遺物を通して多くの研究者による論考から派生する問題や課題は多岐に渡っている。これからの遺跡調査には問題意識をもって取り組み、一つ一つ解決していかなければならない。そのためにもこの年表や論考によって、問題解決への糸口に役立つものと思う。

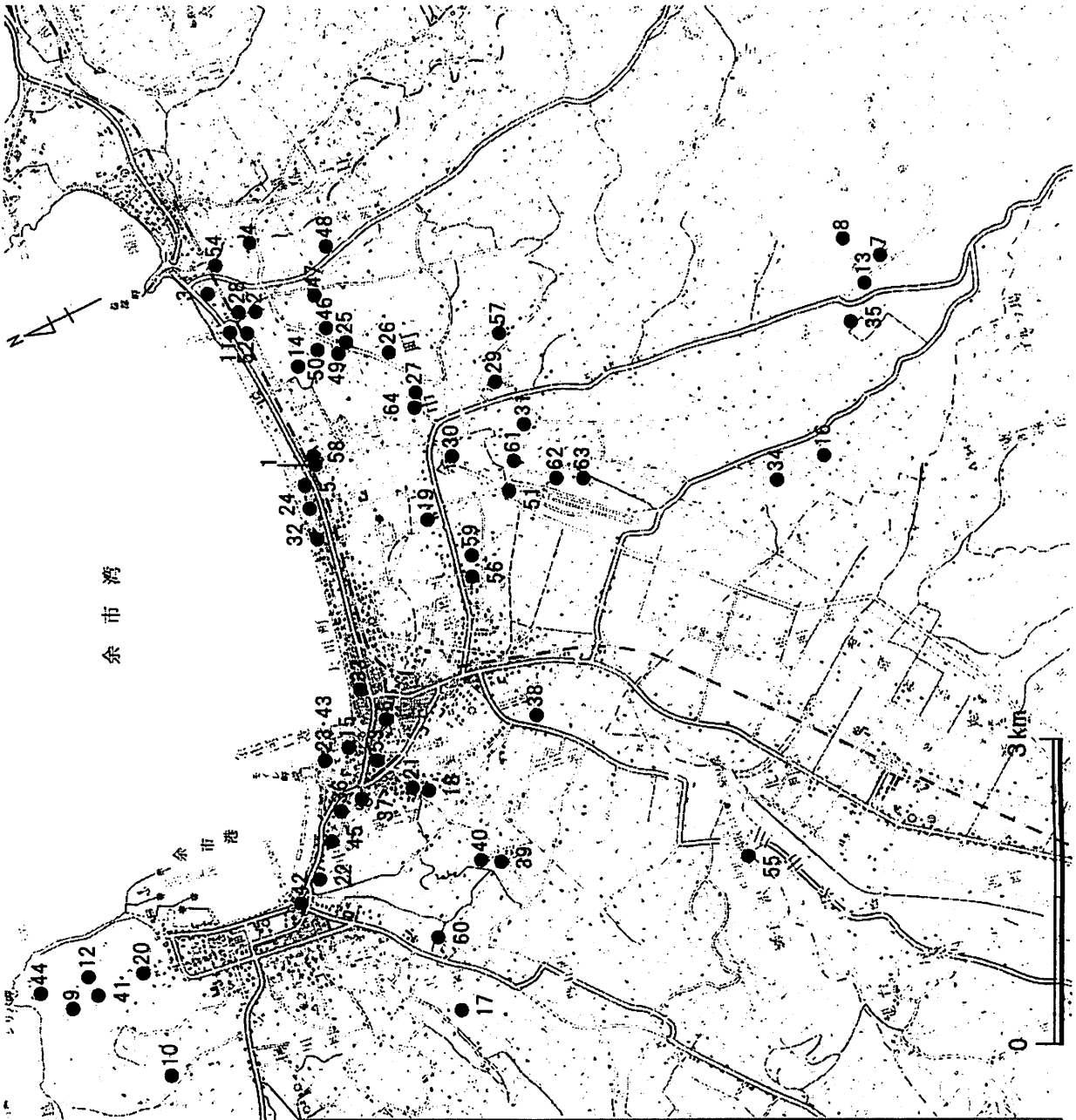
史跡として国指定史跡「フゴッペ洞窟」、大谷地

貝塚」、道指定史跡「西崎山環状列石」、道指定有形文化財「天内山遺跡の考古遺物」などの管理も永久にしなくてはならない。さらに近世～近代として国指定史跡「旧下ヨイチ運上家（重要文化財）」、「旧余市福原漁場」、国の登録有形文化財「ニッカウキスキー余市工場」などの建物、古文書として町指定の「林家文書」のような場所請負の重要史料も残されている。

私見として国指定史跡「フゴッペ洞窟」は、発掘当時から謎の遺跡であるが、今日でも謎と魅力を失わず、日本を代表する洞窟遺跡であることが再認識することとなった。

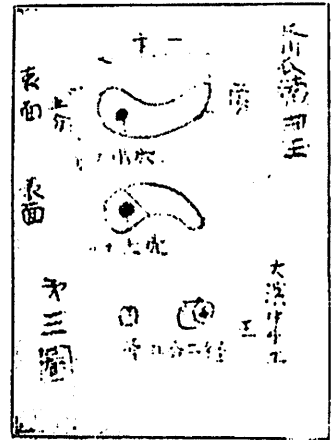
年表・論考の作成にあたり、間違いや遺漏などもあるかと思われるので、ご教示下されれば幸いと存じます。

小文をまとめるために野村崇氏・竹田輝雄氏、大阪学院大学の太塚和義氏、余市水産博物館の浅野敏昭氏、小川康和氏、中塚凧沙氏、山下明子氏、オホーツクミュージアムえさしの高嶋宗孝氏、新冠町郷土資料館の新川剛生氏、小樽市図書館司書の協力を得ましたことを紙面にて感謝いたします。



番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	大浜中真人の塚	39	旧美國競馬場遺跡
2	フゴツベ貝塚	40	沢町(カネイ台地)遺跡
3	栄町1遺跡	41	シリバ沢遺跡
4	西崎山環状列石	42	ヌツチ川遺跡
5	大浜中遺跡	43	旧下ヨイチ運上塚遺跡
6	大川遺跡	44	シリバ輝燐火台跡
7	登町西山遺跡	45	旧余市福原漁場
8	登町政五郎沢遺跡	46	登町7遺跡
9	カッチャライシ遺跡	47	栄町4遺跡
10	木村台地遺跡	48	栄町5遺跡
11	フゴツベ洞窟	49	登町8遺跡
12	シリバ山ケルン	50	登町9遺跡
13	川上山ケルン	51	登町10遺跡
14	大谷地貝塚	52	栄町6遺跡
15	モイレ城塞跡	53	入舟遺跡
16	モンガク古墳	54	栄町7遺跡
17	大崎山遺跡	55	ライクル・ハツタ
18	天内山遺跡	56	黒川1遺跡
19	安芸遺跡	57	登町11遺跡
20	シリバ山麓遺跡	58	登町12遺跡
21	天内山チャシ跡	59	登町13遺跡
22	浜中台地遺跡	60	沢町中島遺跡
23	旧下ヨイチ運上塚	61	水田の沢1遺跡
24	栄町2遺跡	62	水田の沢2遺跡
25	登町3遺跡	63	登町12遺跡
26	登町2遺跡	64	登町13遺跡
27	登町4遺跡		
28	栄町3遺跡		
29	登町5遺跡		
30	八幡山遺跡		
31	登町6遺跡		
32	旧登川右岸遺跡		
33	三吉神社遺跡		
34	モンガク遺跡		
35	追分遺跡		
36	旧東中学校校庭遺跡		
37	警察署山遺跡		
38	山田遺跡		

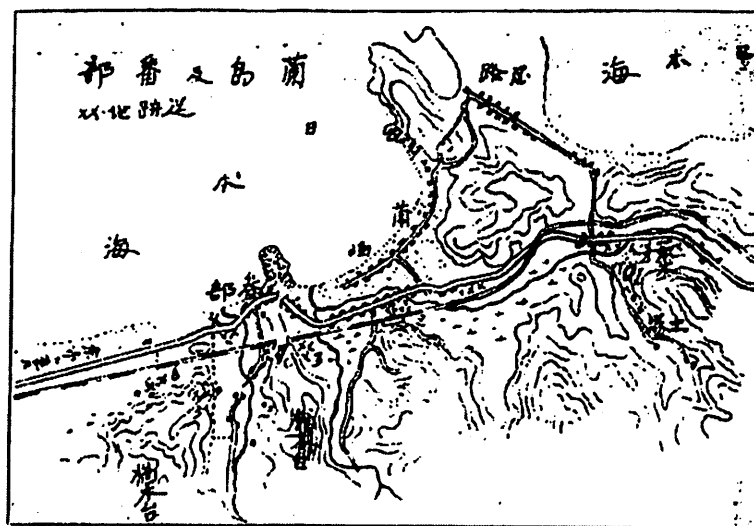
第1図 余市町内の埋蔵文化財



上：大川町出土の曲玉
下：大濱中出土の玉



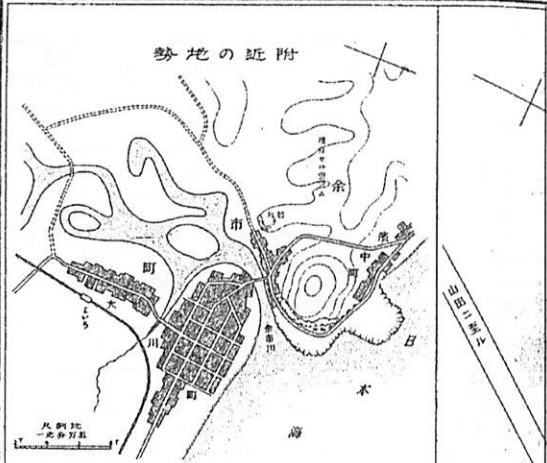
大川町出土の土器



第2図 余市町内の遺跡

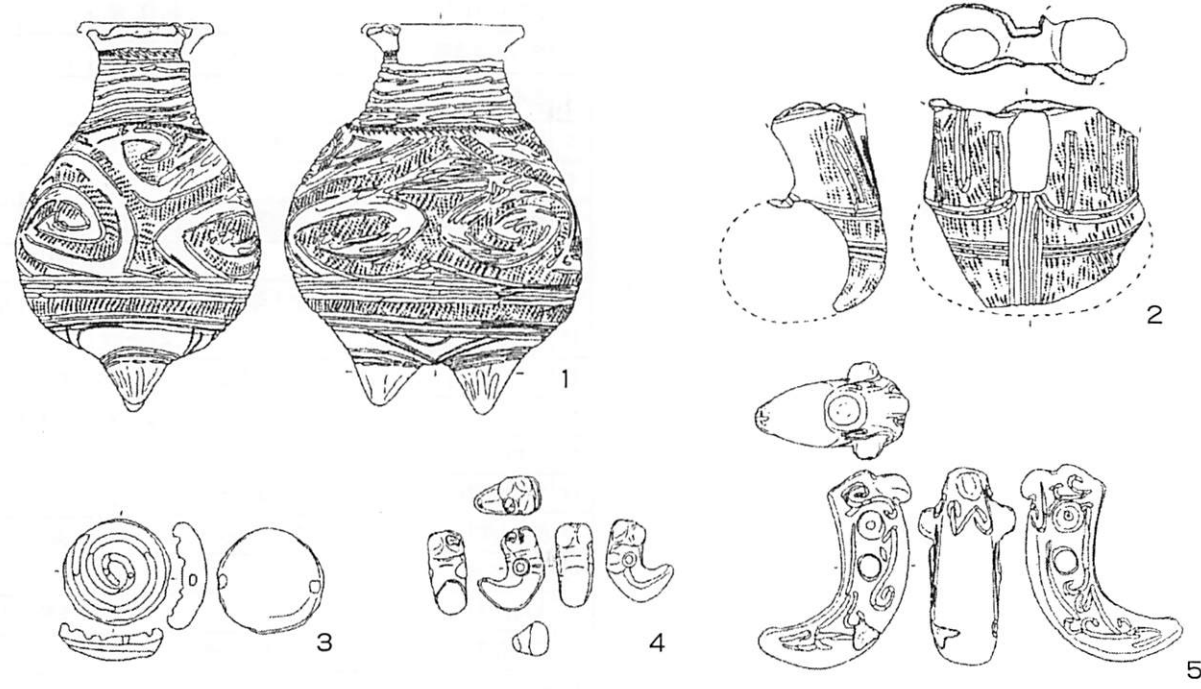
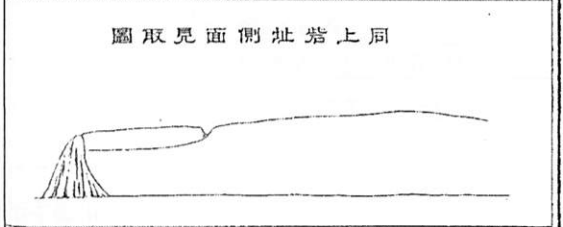
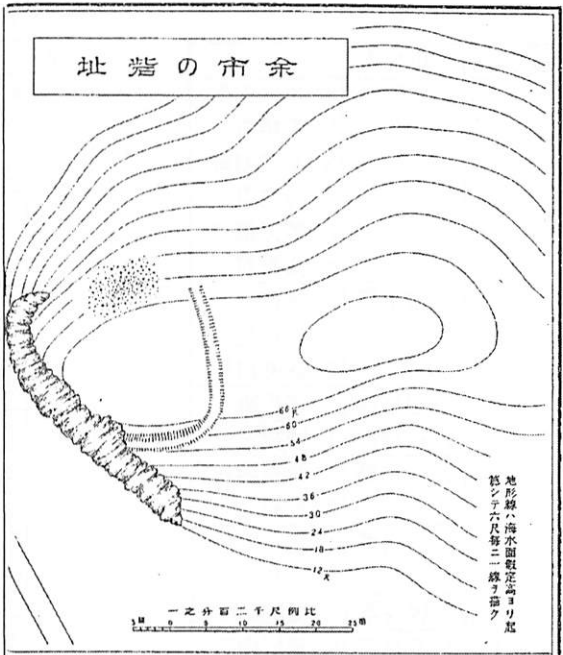
上：寺田貞次 1919 「余市附近の土地と古代住民」：大正8年（注16より）
下：同 上 1918 「北海道小樽附近古代住民の遺跡に就いて」：大正7年（注15より）

記 文 學 校 百 神 社 汽 船 場 市 街 窪 道 橋 塚 塚 家 形 跡
 記 文 學 校 百 神 社 汽 船 場 市 街 窪 道 橋 塚 塚 家 形 跡
 記 文 學 校 百 神 社 汽 船 場 市 街 窪 道 橋 塚 塚 家 形 跡



大正五年九月調査
 明治三十四年六月
 河野常吉見取

後志園余市郡余市町大字大川町に在り。余市縣を距る十餘町余市川の北西岸に斗山十の丘(其突端は明治廿五年以降屢切崩さる)を占む。現今北西の空壕は埋滅し、北東側の中段は残存す。又南西側の貝塚は僅に其痕跡を認むるのみ。四十年前までは壱址の北西四町餘の處に多くの壱穴ありしが今は埋滅して唯其南西一町餘に三箇残存するに過ぎず。此壱一帯往々土器・石器を出す。此地氏有に屬して畑となり、原形を損するを以て、明治三十四年踏査したる河野常吉の見取圖に據り補足す。



第3圖 上：天内山チャシ：大正7年（注14より）
 下：余市水産博物館の山岸コレクション（注143fより）

余市町における考古学調査・研究の歴史
文化財行政をふまえて

余市郡余市町(昭和42年3月)

4後志	A	1	小樽市
	B	1	虻田郡 1 倶知安町 2 京極町 3 喜茂別町 4 狩太町 5 留寿都村 6 真狩村
		2	余市郡 1 余市町 2 大江村 3 赤井川村
		3	古平郡 1 古平町
		4	積丹郡 1 積丹町
		5	古宇郡 1 神恵内村 2 泊村
		6	岩内郡 1 岩内町 2 共和町
	7	磯谷郡 1 蘭越町	
	8	寿都郡 1 黒松内町 2 寿都町	
9	島牧郡 1 島牧町		

- A : きわめて重要
B : 比較的重要
C : 普通
D : 消滅

支庁別	市郡別	町村別	番号		名称	所在地	遺跡の種類	地目	価値				5万分の1の地図
			支庁別	市郡別					町村別	番号	A	B	
4	B2	1	1	1	大浜中貴人の塚	余市郡 余市町栄町	古墳			○			小樽西部
			2		フゴッペ貝塚	" "	貝塚		○				"
			3		余市栄浜遺跡	" "	墳墓			○			"
			4		西崎山ストーンサークル	" "	古墳 ストーンサークル		○				"
			5		大浜中遺跡	" 余市町大川町	遺物包含地			○			"
			6		余市町大川遺跡	" "	墳墓		○				"
			7		登町西山遺跡	" 余市町登町	配石遺構			○			仁木
			8		登町政五郎沢遺跡	" "	盛土塚住居跡	山林	○				"
			9		カッチャライン遺跡	" 余市町梅川町	墳墓	山林・畑			○		小樽西部
			10		余市町木村遺跡	" "	遺物包含地			○			"
			11		番部洞窟	" 余市町栄町	洞窟遺跡	鉄道用地	○				"
			12		シリバ・ケールン群	" 余市町シリバ山	積石塚	山林	○				"
			13		川上山ケールン	" 余市町登町	"			○			仁木
			14		大谷地貝塚	" 余市町栄町	貝塚				○		小樽西部
			15		茂入山城址	" 余市町入舟町	城跡	畑	○				"
			16		モンガク古墳	" モンガク	古墳	"			○		仁木
			17		大崎山遺跡	"	"			○			小樽西部

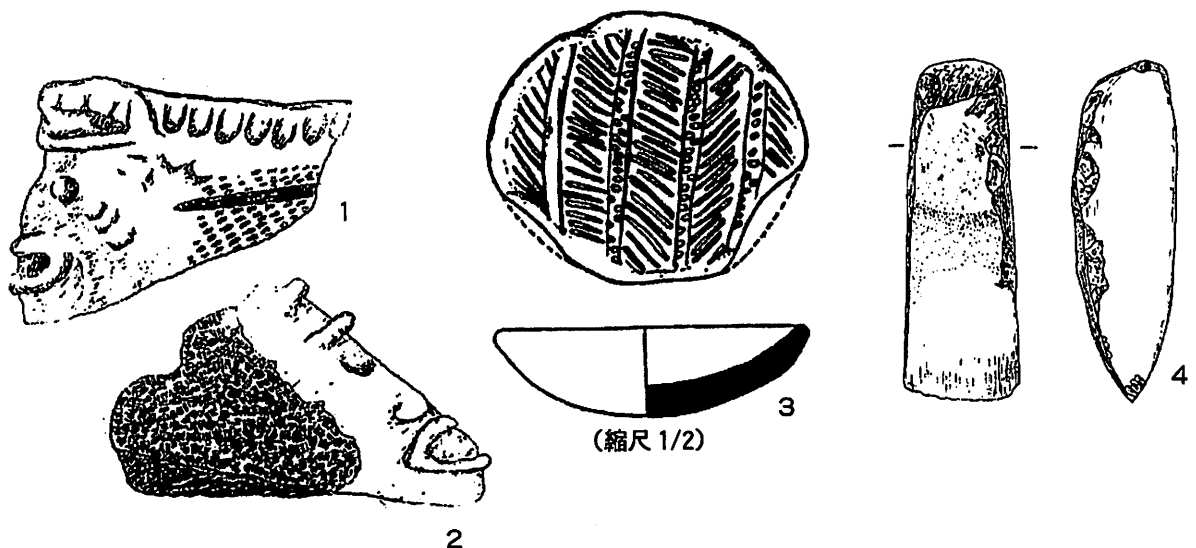
余市郡余市町(昭和46年)

支庁別	市郡別	町村別	番号		名称	所在地	遺跡の種類	地目	価値				5万分の1の地図
			支庁別	市郡別					町村別	番号	A	B	
4	B2	1	1	1	大浜中貴人の塚	余市郡 余市町栄町	古墳						小樽西部
			2		フゴッペ貝塚	" "	貝塚						"
			3		余市栄浜遺跡	" "	墳墓						"
			4		西崎山ストーンサークル	" "	古墳 ストーンサークル						"
			5		大浜中遺跡	" 余市町大川町	遺物包含地						"
			6		余市町大川遺跡	" "	墳墓						"
			7		登町西山遺跡	" 余市町登町	配石遺構						仁木
			8		登町政五郎沢遺跡	" "	盛土塚住居跡	山林					"
			9		カッチャライン遺跡	" 余市町梅川町	墳墓	山林・畑					小樽西部
			10		余市町木村遺跡	" "	遺物包含地						"
			11		フゴッペ洞窟	" 余市町栄町	洞窟遺跡	鉄道用地					"
			12		シリバ・ケールン群	" 余市町シリバ山	積石塚	山林					"
			13		川上山ケールン	" 余市町登町	"						仁木
			14		大谷地貝塚	" 余市町栄町	貝塚						小樽西部
			15		茂入山城址	" 余市町入舟町	城跡	畑					"
			16		モンガク古墳	" モンガク	古墳	"					仁木
			17		大崎山遺跡	"	積石	原野					小樽西部
			18		天内山遺跡	" 余市町入舟町	墳墓	"					"
			19		安芸遺跡	" 余市町黒川町776	積石	畑					"

第1表 町内の埋蔵文化財包蔵地 (注95・105より)

市町村記号番号 D-19		(昭和51年3月)		後志支庁余市町				
登録種別	種別	名称	所在地	土地所有者	住所	1:25,000 地図	指定	備考
1	墳墓	大浜中貴人の塚	字栄町431(大山神社境内)	多田 芳見 他4名	字栄町393	余市		
2	貝塚	フゴッペ貝塚	字栄町369, 370 字栄町367	相馬 政子 余市町	字栄町536	余市		
3	墳墓	栄浜遺跡	字栄町155	梅村 長一	字栄町638	余市		
4	配石遺構	西崎山ストーンサークル	字栄町550	中野 芳一	字栄町549	余市	北海道 昭26.9.6	指1
5	遺物包含地	大浜中遺跡	字大川町20丁目3, 4, 5他	余市町 他		余市		
6	墳墓	大川遺跡	字大川町1丁目88	遠藤 鶴吉	字大川町1丁目88	余市		
7	配石遺構	登町西山遺跡	字登町2193	西山 宗市	字登町2067	余市		
8	集落跡	登町政五郎沢遺跡	字登町2279	吉原 修	字富沢町2丁目10	仁木		
9	墳墓	カッチャライシ遺跡	字梅川町70, 72	余市町		仁木		
10	遺物包含地	木村台地遺跡	字梅川町411-1	木村勝巳	字梅川町412	余市		
11	洞穴	フゴッペ洞窟	字栄町(鉄道敷地内)	日本国有鉄道		余市	国 昭28.11.14	指2
12	配石遺構	シリバ山ケルン群	字梅川町255他	国 他		余市	余市町 昭35.3.22	指6
13	配石遺構	川上山ケルン	字登町2274	川上 孝	字山田町636	仁木		
14	貝塚	大谷地貝塚	字登町72	安田 貢	字登町72	余市		
15	配石遺構	茂入山城塞跡	字入舟町24, 29, 35	竹岡 リエ	字黒川町4-118	余市	余市町 昭35.3.22	指5
16	墳墓	モンガク古墳	字登町1954	近松 鉄見	字登町1955	仁木		
17	配石遺構	大崎山遺跡	字沢町282	飛林 富吉	字沢町282	余市		
18	墳墓	天内山遺跡	字入舟町328	天内 実	字入舟町327	余市		
19	配石遺構	安芸遺跡	字黒川町776	安崎 恒一	字黒川町776	余市		
20	遺物包含地	シリバ山麓遺跡	字港町232, 229, 229-1~4	余市町土地開発公社	字朝日町26	余市		
21	チャシ跡	天内山チャシ	字入舟町328	天内 実	字入舟町327	余市		
22	遺物包含地	浜中台地遺跡	字浜中台地	川内 滋	字浜中町150	余市		
23	運上屋跡	旧下ヨイチ運上家	字入舟町	林 彰 余市町	字入舟町9-4 他	余市	国 昭48.7.31	指19

第2表 町内の埋蔵文化財包蔵地 (注112より)

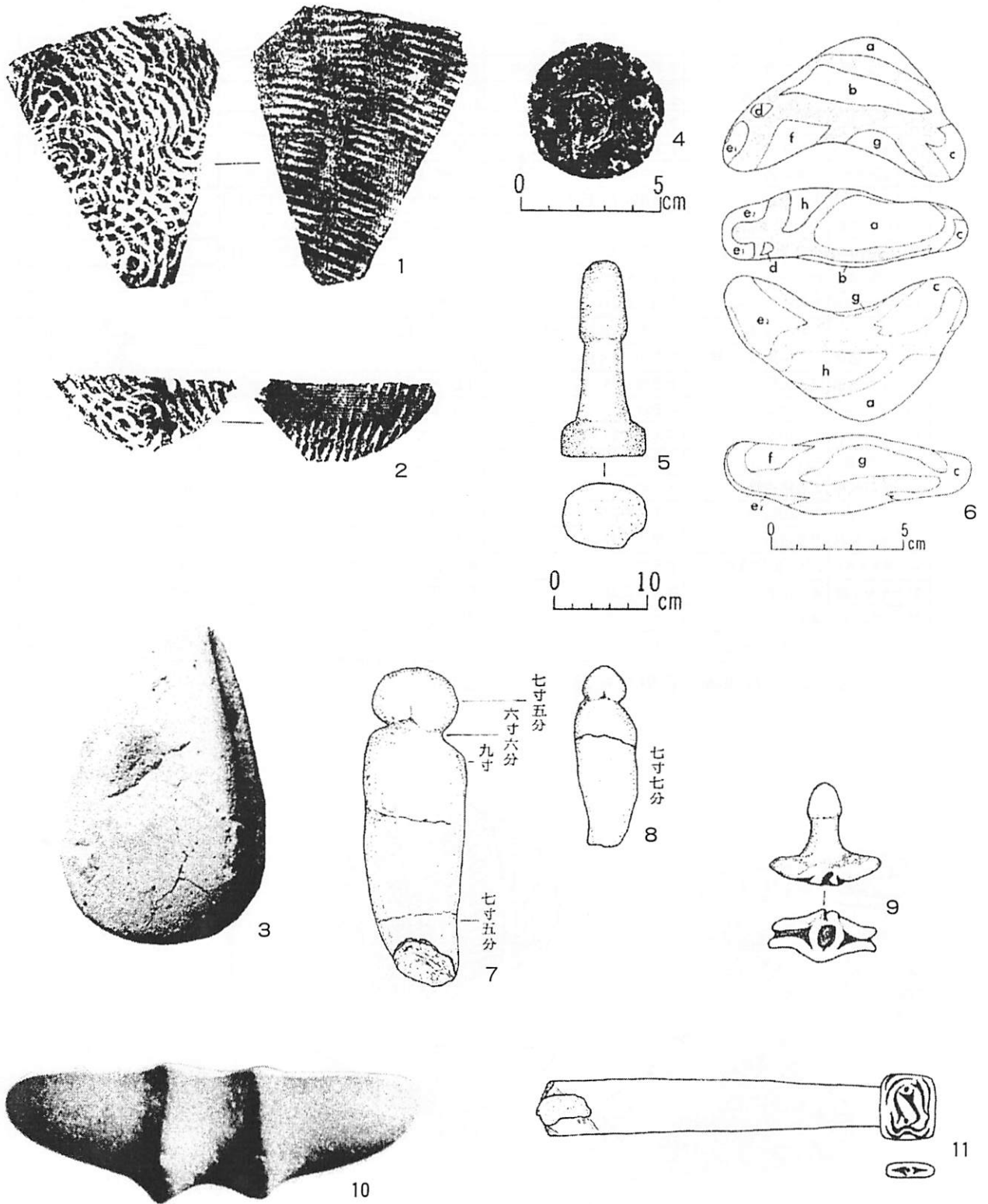


第4図 町内の出土の遺物

No.1・2 フゴッペ村出土 (注29より)
土器に彫刻されたマスク

No.3 余市出土 (注96より)
オロシガネ状土製品

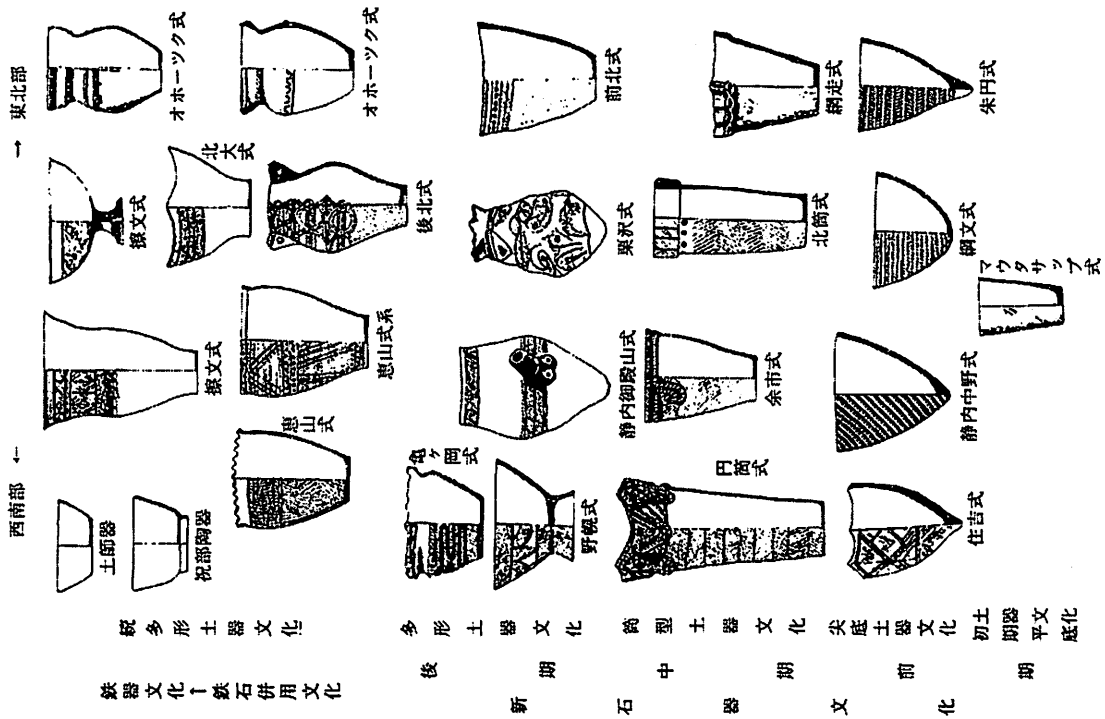
No.4 沢町出土 (注133より)
柱状石斧



第5図 町内出土の遺物

No.1・2: 須恵器 (フゴッペ貝塚) No.3: 側縁有溝石器 (余市フゴッペ) No.4: 刻印土器 (フゴッペ洞窟)
No.5: Phallus 形石器 (大谷地貝塚) No.6: 彩礫 (大谷地貝塚) No.7. 8: 石棒 (余市)
No.9: 性器形土製品 (余市) No.10 独鋸石 (余市山田町) No.11: 石刀 (余市山田町)

『河野広道ノート』 (注 126 より)



第 6 図 北海道土器型式変遷模式図：河野広道氏作成
昭和 34 年 (注 77 より)

日本文化	史年表	年(推定)	北海道先史文化		余市町先史文化
			西 南 部	東 北 部	
縄文文化	夏島式土器	-7,000	住吉町下層式 住吉町上層式	油椀式・東細筒式 網文式・押型文土器	縄文器時代の石器 木村台地 -10,000年以上 土器系系の貝殻文土器 『木村台地』
	黄島式土器	-4,000	春日町式・中野式 石川野式	中野式	
縄文文化	A群土器式	-3,000	円筒土器下層式 (A, B, C, D)	北筒土器下層式	?
	E加式土器利	-2,000	円筒土器上層式 北筒土器上層式 (余市式)	北筒土器上層式	円筒土器上層式 (黒川町) 市式 (糸) 大谷地(貝塚)
弥生文化	安行式土器	-1,000	入江式 野式	前北式 船形上層式	入江式(栄町) 野幌式(稗町)
		紀元 0	亀ガ岡式	御東山式 緑ガ岡式	亀ガ(大川町) 岡式(登町、沢町) 黒川町 墳墓及び墳前築場(大川町)
縄文文化			恵山式・後北式 B, C, D	A: 網文式 B: オク文化 C: 本文化 D: ツツ	恵山式(大川町) 後北式(フゴツベ) フゴツベ岡畑
			線文式 高杯形土器	線文式 高杯形土器	線文式(大川町) 土師器(大川町)
飛鳥文化					ヌツチ川貝塚 (江戸末期)

註1. 現在余市町において発掘中のものもあるので順次追加訂正される。
註2. 北海道の先史文化年表は(北海道の先史文化)に掲げられた竹田輝雄氏案を引用した。

第 3 表 余市における先史文化年表：峰山 滋氏作成
昭和 36 年 (注 74 より)

<注・引用文献>

- 1) a: 野村 崇 1980「北海道考古学の歩み」『北海道考古学講座』 みやま書房
b: 同 上 1992「積丹半島における考古学研究の進展と遺跡の概況」『北海道開拓記念館研究報告』 32
c: 藤本英夫 1983『アイヌ学の歩み』 北海道出版企画センター
- 2) a: 荘司平吉 1887「アイノ及び北海道古代文字」『東京人類学雑誌』 20
この文献には余市アイヌで川村在住の西村富衛門（トミシユス）が板文字を所有しており、樺太、岩内の石文字と比較しているが余市の考古資料でないことから学史から除外した。
b: フゴッペ洞窟、フゴッペ貝塚、大谷地貝塚、大川遺跡、入舟遺跡、西崎山環状列石などは多くの論考で引用されており、それぞれを研究対象別に見ていく必要がある。また論考当時の執筆者については当時の職業を（ ）で示すようにした。
- 3) a: E. S. モース 石川欣一訳 1970『日本その日その日』（講談社学術文庫）講談社
b: 鶴沼わか 1991『モースの見た北海道』 北海道出版企画センター
- 4) 江見水蔭 1907『地底探検記』（復刻） 雄山閣
- 5) 渡瀬荘（庄）三郎 1886「札幌近傍ピット其他古蹟ノ事」『人類学会報告』 1
「明治 17 年（1884）10 月 17 日 本会第二会に於て述ぶ」とあり、氏はこの中で手宮洞窟の彫刻についてもコロポックルの遺跡と推測している。
- 6) a: 坪井正五郎 1888「石器時代の遺物遺蹟は何者の手に成たか」『東京人類学会雑誌』 31
本文に「明治 21 年 9 月 9 日 本会第 43 回に於て大意を述ぶ」と記している。
b: 同 上 1896「北海道手宮に発見せられる古代彫刻」『史学雑誌』 7-4
坪井氏は明治 21 年 7 月に道内の考古学的調査をしたと思われる、21 日に手宮洞窟を実見しており、渡瀬氏と同様に古代のものとしている。渡瀬氏は札幌農学校を卒業後、東京大学理学部に在学したため、同学部の坪井氏は強い影響を受けたと思われる。
c: 荘司平吉 1887「アイノ及び北海道の古代文字」『東京人類学雑誌』 20
余市川村の西村富衛門（旧名トミシユス）宅に板文字が伝わっていることや樺太、岩内の石文を紹介しているが、余市の考古学史には含めていない。
- 7) 石川貞治（次）1889「石器時代住民ノ分布」『東京人類学会雑誌』 38
- 8) 高畑宜一 1889「石器時代の人種」『小樽港史 附小樽岩内間九郡史』
朝鮮土器とは須恵器のことを指している。
- 9) 東京帝国大学人類学教室 1898『日本石器時代人民遺物発見地名表』
- 10) a: 河野常吉 1905「チャシ即ち蝦夷の砦」『札幌博物館学会会報』 1-1
b: 河野常吉 1981「遺跡編～余市町 記 大正 4 年（1915）」『河野常吉ノート考古篇 1』（宇田川洋校注）には「余市側西岸に丘陵あり。土人語にては、フルカ山と称す。・・・古老土人の言によれば、往時は酋長の居住せしチャシコロ（城壁の意義）にて」と有る。
- 11) 藍田弓吉 1912「北海道に於ける石器時代遺蹟遺物所在地」『東京人類学会雑誌』 28-1
- 12) 阿部正己 1918「北海道のチャシ」『人類学会雑誌』 33-1
- 13) 同 上 1918「北海道貝塚に関する私見」『人類学雑誌』 33-4
- 14) 河野常吉 1918「余市の砦址」『北海道史附録地図』 北海道庁
- 15) 寺田貞次（治）1918「北海道小樽附近古代住民の遺跡に就いて」『考古学雑誌』 9-3

- 16) 同 上 1919「余市附近の土地と古代住民」『北海道人類学会雑誌』1
- 17) a: 余市水産博物館資料による。
b: 乾 芳宏 2012「遼星北斗と考古学」『余市文芸』37
- 18) a: 清野謙次 1925「男女生殖器を示し且同時に交接を意味せる日本石器時代土製品」『考古学雑誌』15-3
b: 上記では写真のみであるが『河野広道ノート考古篇』(注126)で実測図が掲載
- 19) a: 同 上 1928「余市国余市の貝塚二篇」『日本石器時代研究』岡書院
b: 同 上 1969「後志国余市郡余市町畚部字大谷地貝塚」『日本貝塚の研究』岩波書店
※清野氏は京都帝国大学医学部病理学が専門であるが、大阪府国府遺跡での埋葬人骨の研究を動機として、全国の古人骨調査に関心を抱くようになる。大谷地貝塚もその目的のために発掘が実施された。
- 20) 河野常吉 1981「畚部の環状石籬」『河野常吉ノート考古篇1』宇田川洋校注 北海道出版企画センター
- 21) a: 河野常吉 1926『国産振興博覧会北海道歴史館陳列品解説』(1974『河野常吉著作集1—考古・民族誌編』収録 北海道出版企画センター)
b: 日本考古学協会編 1931『日本考古学辞典』によれば、須恵器はかつて朝鮮式土器、新羅焼、祝部土器、行基焼と呼ばれており、行基焼は東海地方では古代末・中世の山茶碗や小皿も含めていたらしい。
- 22) 山内清男 1937「縄文土器の細別と大別」『先史時代』1-1
- 23) a: 河野広道 1935「北海道石器時代概要」『ドルメン』4-6
b: 名取武光 1939「北海道の土器」『人類学先史学講座』10
- 24) 小樽新聞社 1927・11・14「神秘を語る古代文字と謎をきざむマスク〜東洋のスフィンクスと喜ぶ西田さん 考古学上の好資料」『小樽新聞』
- 25) a: 西田彰三 1927.11.15~21「フゴッペの古代文字並にマスクについて(1~7)」『小樽新聞』
b: 同 上 1927.12.2~7「再びフゴッペ古代文字と石偶について(1~5)」同上
c: 遼星北斗 1927.12.19~1928.1.8「疑うべきフゴッペの遺跡〜問題の古代文字アイヌの土俗的傍証(1)~(6)」
『小樽新聞』
d: 西田彰三 1928.7.26~8.5「畚部古代文字と砦址並びに環状石籬(1~8)」同上
- 26) 杉山寿栄男編 1928『日本原始工芸』(編輯顧問: 浜田耕作・長谷部言人・高橋健自・喜田貞吉・関野 貞)(復刻 1976『日本原始工芸』北海道出版企画センター)
- 27) 東京帝国大学 1928『日本石器時代遺物発見地名表』第5版
- 28) 室谷精四郎 1929「小樽西部の遺物遺跡について」『東北文化研究』1-6
- 29) 西村正典 1929「畚部村出土の珍しい遺物(1)」『究古』4-7 忍路郡考古学研究会
- 30) 新岡武彦 1929「遺址発見報告」『究古』7 同上
- 31) 新岡武彦 1930「北海道古代文字研究並沿革、環状石籬に及ぶ」『北海道帝国大学新聞58・59』(1977『樺太・北海道の古文化2』収録 北海道出版企画センター)
- 32) 五十嵐 鐵 1930「土器焼場の発見」『究古』10
- 33) 新岡武彦 1931・2・18~19「北海道古代文字論」『北海タイムス』

- 34) 北海道帝国大学付属博物館・札幌市犀川会 1931「第一回北海道先史遺物展覧会陳列目録」『蝦夷往来』6
- 35) 新岡武彦 1931「北海道出土朝鮮土器資料」『北方郷土』2-4
- 36) 河野広道 1933「北海道に於ける洞窟遺跡」『蝦夷往来』9
- 37) 名取武光 1933「故篠原亮一氏蒐集せる北海道先史遺物の紹介」『考古学雑誌』23-3
- 38) a:犀川会編 1933『北海道原始文化展覧会・北海道原始文化要覧』
b:開催にあたり杉山寿栄男氏（北海道庁嘱託）の協力も多大であったという。
- 39) 犀川会編 1933『北海道原始文化聚英』
第28図版 余市出土：No.3.6.7. 土器
第31図版 余市出土：No.3（表）No.4（裏），扁平土偶（遼星北斗氏採集）
第34図版 忍路郡畚部出土：No.1 叉状石鏃，No.2~3 異形石鏃
No.4 石槍，No.5 両頭石槍
小樽富岡町出土：No.6 有溝石器，No.9 独鈷（古）石
『河野広道ノート』によれば宇田川氏調査によりNo.6 フゴッペ，No.9 は山田町と訂正している。
第36図版 余市出土：No.1 石棒，No.3 菱形凹石器（魚形石器と思われる）No.7 環状石
- 40) 余市町教育會 1933『余市郷土史』
- 41) 河野広道 1958「余市出土の彩礫せる石」『北海道学芸大学考古学研究会連絡紙』13
- 42) a:山岸玄津 1934『北海道余市貝塚に於ける土石器の考察』 茂山吟社
遺物図版のみ
第1図 土器数点 昭和5年5月18日出土
土器1点（壺）銘 神通 『北海道原始文化聚英』の掲載
第2図 土器2点 昭和4年5月20日出土：『北海道原始文化聚英』に掲載
朝貌号・畚号と呼称
第3図 二足土器2点 昭和8年10月13日出土
銘 好速甕：君子甕・淑女甕と呼称
第6図 土器13点 No.1.3.9.10 昭和8年10月15日出土
第8図 双口土器1点，土製品1点 昭和8年11月29日出土
第9図 土製勾玉1点 昭和8年11月26日出土
勾玉土器 銘 萬歳
第10図 ヒスイ勾玉1点 昭和8年6月23日出土
青玉勾玉 銘 蠶蟲
第11図 礫2点
銘 好仇石 陽石・陰石
b:近藤芳二 2013『軍医中佐 山岸禮三』余市豆本
- 43) a:五十嵐 鐵 1935『大谷地貝塚之層位的研究』
この中で発掘の沿革に、嘗て浜中の佐藤さんが中央部を5尺掘ったら爐が出た。昭和7年の夏 樽中の尾川先生が生徒と発掘，昭和9年の夏 余市中学校の三輪田先生が生徒と発掘，同時期に小樽図書館長今井福次郎さん手宮小学校の仲尾先生が発掘したことが書いている。この層位的調査は松下亘氏によれば浜田青陵氏の影響があったのではないかとのことである。
b:同 上 1936『大谷地貝塚出土土器に現れたる縄紋土器の発達歴路』余市郷土研究会に於ける講演資料
- 44) 河野広道 1935「北海道石器時代概要」『ドルメン』4-6
- 45) 松下 亘 1983「余市郡フゴッペ貝塚について～昭和17年の試掘記録及び補遺」『北海道地方研究』33

- 46) 米村喜男衛編 1948『北海道先史学十二講』 北方書院
- 47) 文化庁文化財保護部 1966『埋蔵文化財発掘調査の手びき』 国土地理協会
- 48) a: 大塚以和雄・大塚誠之助 2001「フゴッペ洞窟発見当時のこと」『余市水産博物館研究報告（フゴッペ洞窟発見 50周年記念報告集）』 4
 b: 同上 2003「フゴッペ洞窟発見あれこれ」『フゴッペ洞窟・岩面画と文化交流のフィールドステーション作りの基礎研究』平成 12～14 年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 49) 駒井和愛 1959『音江 北海道環状列石の研究』 慶友社
- 50) a: 北海道新聞社 1950.12.16「洞窟の壁に彫刻～手宮の古代文字と全く同一・河野博士ら、余市で発見」『北海道新聞』
 b: 河野広道 2014「余市町洞窟の壁面彫刻について」『北海道郷土研究会会報』 4
 c: 野村 崇 1997「フゴッペ洞窟発見秘話」『日本の古代遺跡～北海道Ⅱ』 41
- 51) フゴッペ洞窟調査団 1990『フゴッペ洞窟』 ニューサイエンス社
- 52) 注 49 と同じ
 西崎山の調査には昭和 24 年 10 月、25 年 9 月、26 年 9 月に名取武光氏も参加している。
- 53) a: 名取武光 1951「北海道フゴッペ洞窟の発掘」『民族学研究』 16-2
 b: 護 雅夫 1951「フゴッペ洞窟と大陸文化との関係」 同上
 c: 服部 健 1951「フゴッペ彫刻」 同上
- 54) a: 北海道新聞社 1951.11.9「遭難船の遺留品? 刀や古銭がぞくぞく 余市の大浜中で発掘」『北海道新聞』 後志版
 b: 松下 亘 1973「北海道余市町大浜中遺跡の遺物～特に一括出土した青磁について」『北海道考古学』 9
 c: 同 上 1984「北海道出土の中国磁器～特に大浜中遺跡の出土資料について」『北海道の研究』 2
 ここでは柴浜遺跡の発掘を昭和 33 年と訂正し、武器類についてもふれている。
- 55) 宇田川洋編 1986『河野広道ノート 考古篇 5』 北海道出版企画センター
- 56) 駒井和愛 1952「日本に於ける巨石記念物 続々々」『考古学雑誌』 38-5・6
- 57) 北海道新聞社 1952.10.5「東中の竪穴発掘」『北海道新聞』
- 58) 瀧川政次郎・島田正郎 1953「調査日誌」『余市』 余市町役場
- 59) a: 注 51 と同じ
 b: フゴッペ洞窟調査団・名取武光 1954『1953 年度フゴッペ洞窟発掘概報・1953 年の北海道考古学会』
- 60) 北海道新聞社 1953.3.23「人類学会一行、フゴッペ洞窟へ」『北海道新聞』
- 61) 余市郷土研究会 1953『余市』
- 62) 護 雅夫 1954「シベリア岩壁画とフゴッペ洞窟彫刻～タールグレン内陸アジア・シベリアの岩壁画の紹介によせて」『北方文化研究報告』 9
- 63) 河野広道 1954『苫小牧地方古代史』 苫小牧開基 80 周年記念出版（1972『河野広道著作集Ⅱ（続北方文化論）』収録 北海道出版企画センター）
- 64) a: 北海道新聞社 1954.8.5「ニセモノか手宮の古代文字」『北海道新聞』
 b: 同 上 1954.9.30「手宮洞窟の彫刻 破門を投じた金田一発言」『北海道新聞』

- 65) 河野広道 1954「後方羊蹄とはどこか」『歴史家』4 北海道歴史学協議会
- 66) 余市町教育委員会 1955「史跡余市町畚部洞窟保存工事完成並びに三笠宮御視察記念啓蒙普及講演日程」『史跡 余市町フゴッベ洞窟』
※余市日果会社は「大日本果汁株式会社」の略でニッカウキスキー株式会社の前身
- 67) 峰山 巖 1960『ヌッチ川遺跡』郷土研究 No. 1 余市町教育委員会・余市郷土研究会
- 68) 余市町教育委員会 1956『シリパ・ケールン発掘概報』
- 69) a: 名取武光・峰山 巖 1968「登の土偶とホリカップ土偶」『北海道の文化』15
b: 余市町登町区会 1986「登町の先史時代」『登郷土誌』
小谷地川遺跡の調査写真には岡崎繁男、峰山巖、園田美根子、朝枝文裕、久保武夫氏が写っている。
c: 宮 宏明 1992「余市出土の重要土偶」『北海道の文化』64
- 70) 余市水産博物館の資料による。
- 71) a: 河野広道 1958「先史時代」『小樽市史』1
b: 宇田川洋 1981『アイヌ伝承と砦』に採録され、闘争伝承のチャンに分類している。
- 72) a: 北海道新聞社 1959. 1. 31「判明発掘された刀剣類 藤原時代のものと判明」『北海道新聞』
b: 松下 亘 1973「北海道余市町大浜中遺跡の遺物～特に一括出土した青磁について」『北海道考古学』9
柴浜遺跡についてふれており、発掘は昭和34年8月としている。
c: 松下 亘 1984「北海道の出土の中国磁器～特に大浜中遺跡出土の資料について」『北海道の研究』2 清文社
柴浜遺跡の発掘を昭和33年に訂正している。
d: 佐藤矩康 1992「余市出土の武具について」『北海道の文化』61
e: 沢口 清 1992・12・4「中世の埋蔵文化財～不思議なヨイチの太刀」『北海道新聞（夕刊）』 柴浜遺跡の発掘調査は昭和33年と記している。
f: 峰山 巖 1963「有珠善光寺遺跡」『北海道の文化』特集号の注2でふれているが、柴浜遺跡の発掘について昭和37年7月と記している。
柴浜遺跡（現在は柴町1遺跡と大浜中遺跡から出土した遺物については混同しており不明なことが多い。その要因として、未だ報告書の刊行はなく、出土遺物が明確に区別できないことである。事実、大浜中と柴町遺跡については松下亘氏が指摘しており、中世遺物であり、関係者の説明も不自然である。報道に掲載された両遺跡の遺物写真でも容易に判別は難しく、余市水産博物館に保存されている遺物でも難しい。調査に関係した郷土史家の青木延広氏によれば兵庫鎖を含めた武具類は柴町からのものと話を聞いた。筆者は当時の記事や報告などから兵庫鎖など武器武具類は柴浜遺跡と考えている。
- 73) a: 畠山三郎（大） 1958「北海道出土の石棒について」『北海道学芸大学考古学研究会連絡紙』2
b: 『河野広道ノート考古篇5』（注126）でトレース図が掲載されている。
- 74) 名取武光・峰山 巖 1961『大川遺跡』郷土研究 No. 4 余市町教育委員会・余市町郷土研究会
- 75) 峰山 巖 1962『遺跡木村台地（予報）』郷土研究 No. 5 余市町教育委員会・余市町郷土研究会
- 76) 河野広道 1958「小樽・余市附近の重要遺跡」『北海道学芸大学考古学研究会連絡紙』2
- 77) 河野広道 1959「北海道の土器」『郷土の科学』23
- 78) 鍛冶照三 1959『日本書紀と余市』郷土研究 No. 2 余市町教育委員会・余市町郷土研究会 発行月日については不明
- 79) 芹沢長介 1960『石器時代の日本』築地書館
写真の土器は山岸玄津氏所蔵の二足土器と河野広道氏所蔵の双口土器である。

- 80) 大場利夫 1960「宗仁式土器について」『北海道考古学誌』1 北海道埋蔵文化財調査会
本文の中で「筆者は名取教授の調査以前に本洞窟より昭和25年秋に採集された資料を、札幌学芸大学河野広道教授のところで見つけたが、その中にも宗仁式土器に類似の資料が数片あって、同教授も注目しているものである」と記している。
- 81) 大崎山遺跡調査団 1966『大崎山遺跡第一次調査概要』
- 82) 峰山 巖 1962「木村台地」『北海道の文化』特集号
- 83) 余市町教育委員会・余市町教育研究所 1963『余市郷土誌(その1)』郷土読本「余市」資料集
- 84) 石沢 徹・佐藤忠雄・武田輝雄・立花弘道 1960『北海道の先史文化』北海道歴史教育研究会
※武田輝雄については竹田輝雄の誤字である。
- 85) a: 日本考古学協会・洞穴遺跡調査特別委員会編 1963『日本洞穴遺跡地名表(第1版)』
b: 日本考古学協会 1962『洞穴遺跡調査会会報』1
- 86) 大崎山遺跡調査団 1965『余市町大崎山遺跡第一次調査概報』
- 87) 峰山 巖 1965『西崎山』郷土研究 No.7 余市町教育委員会・余市町郷土研究会
- 88) 朝枝文裕 1964『彫刻と洞窟人』郷土研究 No.6 余市町教育委員会・余市町郷土研究会
- 89) 吉崎昌一 1945「縄文文化の発展と地域性～北海道」『日本の考古学』II 河出書房
- 90) 注86と同じ
- 91) 大場利夫 1965「北海道先史文化と大陸文化」『ユーラシア文化研究』1 北海道大学
- 92) 久保武夫 1966「余市海岸の砂丘」『北海道余市高校研究紀要』2
- 93) 北海道新聞社 1976.8.9「近く北大に発掘依頼 ストーンサークル時田山の調査で確認」『北海道新聞』
時田山は登地区に相当し、現在の登町4遺跡附近と思われる。青木延広氏に場所の確認のお願いをしたが、地形の変化もあって場所の特定はできなかった。
- 94) 大崎山遺跡調査団 1967『大崎山遺跡第二次調査概要』
- 95) 北海道教育委員会 1967『北海道埋蔵文化財包蔵地一覧』
- 96) 大塚和義 1967「北海道・余市出土のオロンガネ状土製品」『Field 北海道青年人類科学研究会』5
松平義人氏は明治22年(1889)に静岡県に生まれ、昭和前半から北海道の旧石器文化の発見に情熱を傾け、白滝、置戸、遠軽などの調査に貢献している。
- 97) a: 高倉新一郎・大場利夫 1966「余市町大崎山遺跡について」『北方文化研究報告』20
b: 余市町教育委員会 1968『昭和42年度余市町大崎山遺跡発掘報告書』
- 98) 佐藤利雄 1977「余市町登川流域丘陵より出土の石棒について」『北海道考古学』13
注より抜粋して引用
- 99) 桑原 護 1968「余市式土器」『考古学雑誌』54-1
- 100) 大場利夫・重松和夫 1977「北海道後志支庁余市町西崎山遺跡第4区報告」『北海道考古学』13

※この調査により西崎山の区設定が行われた。

- 101) 久保武夫 1970「余市附近のストーンサークルの分布」『北海道の文化』18 北海道文化財保護協会
- 102) 大塚和義 1969「刻みつけられた船〜フゴッペ洞穴における岩壁画の歴史的背景」『歴史研究』101
- 103) 注 51 と同じ
- 104) 余市町教育委員会 1971『天内山〜続縄文・擦文・アイヌ文化の遺跡』
- 105) 北海道教育委員会 1971『埋蔵文化財保護の手引き』
- 106) a:フゴッペ洞窟調査団 1972『フゴッペ洞窟発掘調査概報』
b:新明英仁 1995『小川原 脩』北海道立近代美術館編 北海道新聞社
昭和34年(1959)に岩面刻画を題材とした「フゴッペ変奏曲」「シャーマニズムの祭典」「土のパレエ」を製作している。
- 107) 朝枝文裕 1922『北海道古代文字』
- 108) 注 100 と同じ
- 109) 注 98 と同じ
- 110) 平山久夫編 1975「シンポジウム北奥の古代文化の諸問題」『北奥の古代文化』学生社
- 111) a:余市町史編纂室 1988『余市町郷土史 7〜余市生活発達史(史料2)』
b:本多 貢 1998『余市学入門シリーズ 2〜比羅夫伝説』余市町中央公民館
- 112) 北海道教育委員会 1976『埋蔵文化財包蔵地一覧表』
※北海道では昭和48年(1973)から埋蔵文化財カードを採用し、余市町では昭和60年にカードが更新となっている。
- 113) 石附喜三男 1976「鈴谷式土器の南下と江別式土器」『北海道考古学』12
※土器拓本の縮尺は10cmではなく1cmの誤りである。
- 114) 千代 肇 1976「フゴッペ洞窟人の南進」『季刊どるめん』11
- 115) 余市町 1980『重要文化財 旧下ヨイチ運上家保存工事報告書』
- 116) 同 上
- 117) 余市町教育委員会 1983『史跡 旧下ヨイチ運上家環境整備事業報告書』
- 118) 藤本英夫 1985「天内山チャシ」『日本城郭体系 1 北海道・沖縄』新人物往来社
- 119) 宮 宏明 1980「余市式土器文化研究の史的展開」『北海道史研究』23 みやま書房
- 120) 大沼忠春 1978「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌』66-4
- 121) 余市町教育研究所 1982『余市郷土史 3〜余市文教発達史』
- 122) 峰山 巖・掛川源一郎 1985『謎の刻画 フゴッペ洞窟』六興出版

- 123) 野村 崇 1983「石剣・石刀」『縄文文化の研究』9 雄山閣
- 124) 注 55 の文献により紹介されている。
- 125) 越田賢一郎 1984「北海道の鉄鍋」『物質文化』42
- 126) 注 55 と同じ
- 127) 斉藤 傑 1986「北海道出土の須恵器地名表」『北海道考古学』21
- 128) 矢吹俊男 1986「縄文時代の区画墓（前篇）」『北海道の文化』53
- 129) 大島秀俊 1986「余市町大川遺跡出土の擦文期資料」『北海道考古学』22
- 130) 天野哲也 1986「続縄文期末および擦文期の若干の資料」『北海道考古学会だより』24
- 131) 矢吹俊男 1987「縄文時代の区画墓（後篇）」『北海道の文化』53
- 132) 余市町登町区会 1986「登町の先史時代」『登郷土誌』
- 133) 松下 亘 1986「北海道余市町沢町出土の柱状石斧」『北海道考古学会だより』26
- 134) 加納 博・早川寛志・石川利夫 1987「忍路環状列石の考古岩石学」『郷土と科学』98
- 135) 山本哲也 1998「擦文文化に於ける須恵器について」『国学院大学資料館紀要』4
- 136) 桐谷賢一 1988「フゴッペ洞窟発掘の頃」『北海道考古学』24
- 137) 青柳文吉 1988「北海道のひすい玉」同上
- 138) 余市町教育委員会 1989『沢町遺跡』
 分 析 ・木越邦彦（学習院大学）「沢町遺跡墓壙伴出炭化物の放射能炭素年代測定結果報告」
 ・三辻利一（奈良教育大学）「余市町の遺跡出土須恵器の蛍光X線分析」
 ・藁科哲男・東村武信（京都大学）「余市町沢町遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析」
 ・西本豊弘（国立歴史民俗博物館）「沢町遺跡出土の動物遺体」
 ・山田悟郎（北海道開拓記念館）「沢町遺跡の遺物包含層および擦文住居床面から算出した花粉・胞子について」
 ・吉崎昌一（北海道大学）「沢町遺跡出土の炭化種子について」
- 139) (財)北海道埋蔵文化財センター 1990『余市町栄町5遺跡』北埋調報 66
 分 析 ・興水達司（北海道大学）「栄町5遺跡出土黒曜石の原産地同定および水和層年代測定」
 ・花岡正光・長沼孝「栄町5遺跡出土土器の胎土分析」
- 140) a: (財)北海道埋蔵文化財センター 1990『余市町フゴッペ貝塚』北埋調報 72
 分 析 ・山田悟郎（北海道開拓記念館）「フゴッペ貝塚の古植生について」
 ・(株)ウィングス「フゴッペ貝塚住居跡(FH-16)出土の炭化植物種子」
 ・吉崎昌一（北海道大学）「フゴッペ貝塚から出土した植物遺体とヒエ属種子についての諸問題」
 ・三野紀雄（北海道開拓記念館）「フゴッペ貝塚出土の炭化木片について」
 ・山田 治（京都産業大学）14C年代測定
 ・藁科哲男・東村武信（京都大学）「フゴッペ貝塚出土のヒスイ製垂飾玉の産地分析」
 ・渡辺暉夫（北海道大学）「フゴッペh貝塚出土石器石材の岩石鑑定」
 ・中野寛子・明瀬雅子・長田正宏（ズコーシャ総合科学研究所）・中野益男・福島道広（帯広畜産大学）
 「フゴッペ貝塚から出土した石冠に残存する脂肪の分析」

- ・中野寛子・明瀬雅子・長田正宏（ズコーシャ総合科学研究所）・中野益男・福島道広（帯広畜産大学）
「栄町5遺跡の土壌に残存する脂肪の分析」
- ・花岡正光・熊谷仁志「フゴッペ貝塚出土土器の胎土分析」
- ・金子浩昌（早稲田大学）「フゴッペ貝塚出土の動物遺体と骨角貝製品の特徴」
- b:熊谷仁志 1997「縄文時代の前期」「縄文時代中期の土器」『美々・三沢』北海道埋蔵文化財センター
フゴッペ洞窟出土のフゴッペ式と混同するためにフゴッペ貝塚出土土器のフゴッペ式からフゴッペ貝塚式へと
名称変更をしている。

141) (財)北海道埋蔵文化財センター 1990『余市町登町2・3遺跡』北埋調報 67

142) 同上

143) a:余市町教育委員会 1990『1989年度大川遺跡発掘調査概報』

- 分析 ・松下 亘（北海道開拓記念館）「大川遺跡出土の陶磁器について」
- ・伊藤玄三（法政大学）「大川遺跡のける硬い銚帯金具出土の意義」
- ・佐藤利夫（日本民俗学会）「大川遺跡周辺の歴史的背景と旧下ヨイチ運上家について」

b:余市町教育委員会 1991『1990年度大川遺跡発掘調査概報』

- 分析 ・吉岡康暢（国立歴史民俗博物館）「大川遺跡の中世陶磁器」
- ・木越邦彦（学習院大学）「大川遺跡出土炭化米・炭化物の放射能炭素年代測定結果報告」
- ・松村博文・石田肇（札幌医科大学）・和田雅男「大川遺跡出土人骨リスト」
- ・赤沼英雄（岩手県立博物館）「大川遺跡出土鉄器の金属学的解析について」

c:余市町教育委員会 1992『1991年度大川遺跡発掘調査概報』

- 分析 ・大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）「大川遺跡出土の近世陶磁器」
- ・五十嵐八枝子（ジオサイエンス）「花粉分析」
- ・松田義章（日本地質学会）「余市大川遺跡における氾濫原堆積物」
- ・木越邦彦（学習院大学）「大川遺跡出土炭化米・炭化ソバ・炭化物の放射能炭素年代測定結果報告」

d:余市町教育委員会 1993『1992年度大川遺跡発掘調査概報』

- 分析 ・菊池俊彦（北海道大学）「大川遺跡出土の青銅製の鈴について」
- ・山本哲也（君津郡市文化財センター）「大川遺跡出土の須恵器」
- ・三辻利一（奈良教育大学）「大川遺跡出土土器の蛍光X線分析」
- ・佐藤洋一郎（国立遺伝学研究所）「大川遺跡 SII-3 出土の炭化米に関する調査報告」
- ・吉崎昌一（北海道大学）「大川遺跡のコメ」
- ・木越邦彦（学習院大学）「大川遺跡出土炭化植物遺体の放射能炭素年代測定結果報告」
- ・吉岡康暢（国立歴史民俗博物館）「大川中世遺跡の概要と歴史的意義」
- ・宮 宏明・熊崎農夫博・前田貞子「住居址覆土出土の中世の一括動物遺体と骨角器」

e:余市町教育委員会 1994『1993年度大川遺跡発掘調査概報』

- 分析 ・咲山まどか・赤沼英雄（岩手県立博物館）「大川遺跡出土洪武通寶の蛍光X線分析法ならびに誘導結合プラズマ発光分光分析解析法による分析」
- ・垣内光次郎（石川県立埋蔵文化財センター）「大川遺跡出土の石製品について」
- ・吉岡康暢（国立歴史民俗博物館）「北方流通史と大川遺跡」
- ・青木 誠・宮 宏明「大川遺跡出土の握石とその類例」
- ・青野友哉・宮 宏明「大川遺跡検出恵山期の遺構について」
- ・荒川暢雄・宮 宏明「大川遺跡出土の運上屋・漁場関係資料について」

f:余市町教育委員会 1995『1994年度大川遺跡発掘調査概報』

- 分析 ・小嶋芳孝（石川県立埋蔵文化財センター）「中国東北地方の渤海土器～大川遺跡出土の黒色壺を考える」
- ・三辻利一（奈良教育大学）「渤海国上京龍泉府址および大川遺跡出土黒色土器の蛍光X線分析」
- ・木越邦彦（学習院大学）「大川遺跡出土炭化物・植物遺体の放射能炭素年代測定結果報告」
- ・加藤孝幸・斉藤晃生（ジオサイエンス）「大川遺跡ベンガラX線粉末解析データ解析」
- ・赤沼英雄（岩手県立博物館）「大川遺跡出土鉄器の金属学的解析」
- ・佐伯有清（成城大学）「夫字記載の大川遺跡文字土器の意義」
- ・大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）「大川遺跡出土の近世陶磁器について」
- ・荒川暢雄・宮 宏明「ニシンの歴史と大川遺跡」

- ・佐藤利夫 (日本民俗学会)「余市のアイヌコタンと大川遺跡」
 - ・秋山洋司・宮宏明「大川遺跡検出中世アイヌ墓と出土ガラス玉・渡来銭等について」
 - g:余市町教育委員会 2000『大川遺跡における考古学的調査』Ⅰ
 - h:余市町教育委員会 2000『大川遺跡における考古学的調査』Ⅱ
 - i:余市町教育委員会 2000『大川遺跡における考古学的調査』Ⅲ
 - j:余市町教育委員会 2001『大川遺跡における考古学的調査』Ⅳ
 - 付 編 ・松田義章 (日本地質学会会員)「大川遺跡周辺地域の地質」(概報再録)
 - ・同 上 「大川遺跡における縄文晩期火葬墓の覆土について」(概報再録)
 - ・菊池美智子・小原奈津子 (昭和女子大学)「縄文晩期墓墳伴出の糸の鑑別結果報告」(概報再録)
 - ・同 上 「恵山期墓墳からの糸状出土物の鑑別結果報告」(概報再録)
 - ・同 上 「大川遺跡における発掘物金糸の鑑別結果報告」(概報再録)
 - ・三辻利一 (奈良教育大学)「大川遺跡出土土器の蛍光X線分析」(概報再録)
 - ・小笠原正明 (北海道大学)「大川遺跡出土の首飾り (Okawa1990, GP-102) の材質について」(概報再録)
 - ・同 上 「大川遺跡第 50 号墓墳出土の青銅製鈴の分析について」(概報再録)
 - ・藁科哲男・東村武信 (京都大学原子炉実験所)「大川遺跡出土の硬玉の産地分析」(概報再録)
 - ・同 上 「大川遺跡出土の管玉の産地分析」(概報再録)
 - ・和佐野喜久生・大塚豊揚 (佐賀大学)「大川遺跡の炭化米粒特性と稲作起源」
 - ・松本建速 (筑波大学生)「大川遺跡出土土器の胎土分析」
 - ・小嶋芳孝 (石川健埋蔵文化財センター)「黒色土器の再検討」
 - ・垣内光次郎 (同上)「文房・刃物・飲食の石製品」
 - ・吉岡康暢 (国立歴史民俗博物館)「北方中世史と大川遺跡」
- 144) 松下 亘 1989「北海道出土の中世武具」『よみがえる中世』4
- 145) 佐藤矩康 1990『埋もれていた余市の宝物』 北海道文化財保護協会
- 146) 佐藤矩康編 1990『鉄器が語る余市の文化』
- 147) 宮 宏明 1990「化外の地における鍔帯金具出土の意義」『北奥古代文化』20
- 148) 山岸素夫 1990「北海道大浜中出土の異式の胴丸残欠の一考察」『風俗』29
- 149) 野村 崇・瀧瀬芝之 1990「北海道余市町フゴッペ洞窟前庭部出土の鉄製武器」『古代文化』42 古代学協会
- 150) 野村 崇 1992.12.11「フゴッペ洞窟発掘 40 年～余市記念講演会, シンポから」『北海道新聞 (夕刊)』
記事によれば、峰山巖氏が基調講演, 土谷昭重・大島秀俊氏がフゴッペ洞窟に関連した報告, コメンテーターに菊池俊彦氏となっている。当日は大塚以和雄氏, 島田善造氏 (札幌南高校郷土研究部顧問) の飛び入り発表もあったと記している。
- 151) 野村 崇・大島秀俊 1992「北海道余市町フゴッペ洞窟出土の土器 (1)」『北海道開拓記念館調査報告』31
- 152) 長沼 孝 1992「北海道の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』37
- 153) 土谷昭重 1993「フゴッペ洞窟岩壁画一部画像の民族学及び民俗学資料による若干の考察」『北海道考古学』29
- 154) 宮 宏明 1993「大川遺跡出土のキュラソー瓶とコンプラ瓶」『余市文芸』18
- 155) 同 上 1993「北海道出土の泥めんこ」『どろめん』5 日本どろめんこの会
- 156) 熊谷仁志 1993「押型文土器の変遷と縄文文化への位置付け」『先史学と関連科学 (吉崎昌一先生還暦記念論集)』
- 157) 宮 宏明 1993「墓墳伴出の魚形石器と鉄製品」『南北海道考古学情報交換会会誌』4

- 158) 同上 1993「大川遺跡出土源氏香施文の染付と香道」『余市文芸』19
- 159) 宮 宏明・青木 誠 1994「サメの歯とサパンベ」『動物考古学』2
- 160) 北海道・東北史研究会 1995『余市シンポジウムの記録～北東アジア海域の諸民族と交易』
・岡田淳子（北海道東海大学）「大川遺跡と文化接触」
・大沼忠春（北海道教育委員会）「続縄文時代の遺跡と遺物について」
・李 成市（横浜国立大学）「古代東北アジア諸民族の動向と対日本交易」
・菊池俊彦（北海道大学）「北東アジアからみた余市」
・中村和之（札幌稲西高校）「日本海北方域の交易とアイヌ」
・田島佳也（神奈川大学）「近世後期の余市場所アイヌの出稼ぎ漁について」
・船津 功（札幌学院大学）「関矢留吉に関する基礎資料」
- 161) 注 143 f と同じ
- 162) 宇田川 洋 1994「北方地域の土器底部の刻印記号論」『日本考古学』1
- 163) 大島秀俊 1995「フゴッペ洞窟および手宮洞窟壁画の一考察」『北海道考古学』31
- 164) a: 余市町教育委員会 1996『1995年度余市入舟遺跡発掘調査概報』
・青木 豊（国学院大学）「入舟遺跡・大川遺跡出土和鏡」
・高瀬克範（北海道大学生）「入舟遺跡・大川遺跡出土の魚形石器」
・宮 宏明・斉藤麻紀「入舟遺跡出土の手形付土板と足形付土板」
・米谷登志子・小川康和「入舟遺跡出土の植物遺体について」
・小川和康「入舟遺跡出土の木製品について」
・宮 宏明「入舟遺跡・大川遺跡出土の泥メンコと鋳型」
b: 余市町教育委員会 1999『入舟遺跡における考古学的調査』
分析編・永嶋正春（国立民俗博物館）「入舟遺跡出土の石皿に付着した赤色顔料」
・藁科哲男（京都大学原子炉研究所）「入舟遺跡出土玉材の産地分析」
・三辻利一（奈良教育大学）「入舟遺跡出土の須恵器と珠洲系陶器の蛍光X線分析」
・木越邦彦（学習院大学）「入舟遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定結果報告」
・咲山まどか・赤沼英男（岩手県立博物館）「入舟遺跡出土のガラス玉の材質について」
・松村博文（国立科学博物館）・石田肇（琉球大学）・脇坂マリコ「入舟遺跡より出土した人骨」
・西本豊弘（国立歴史民俗博物館）・佐藤孝雄（常葉学園富士短期大学）「入舟遺跡出土の動物遺体」
・藤村久和（北海学園大学）・宮宏明「入舟遺跡検出の植物遺体について」
・星 梓（陶磁器研究家）「入舟遺跡・大川遺跡出土の挿鉢について」
・北野信彦（元興寺文化財研究所保存科学センター）「入舟遺跡出土漆器資料の材質と製作技法について」
・大谷 諄（北海道大学）「入舟遺跡出土の柱の樹種同定」
- 165) a: 北海道新聞社 1995. 7. 22「発会し初の研修会開催・余市町の文化財ボランティア説明員」『北海タイムス』
b: 余市町文化財ボランティア説明運営要項では、余市町の文化財の説明と普及活動に協力することを目的としており、ア) 建造物及び展示資料の説明、イ) 普及活動への協力（入館者との対話を通じて）、ウ) 展示物の管理・保存への協力などの活動を含んでいる。
- 166) 小樽市教育委員会 1997『手宮洞窟シンポジウム記録集』
・福田正巳（北海道大学）「凍土と人と文化～先史モンゴロイドの歩んだ道筋」
・加藤充彦（奈良国立文化財研究所）「文化財の保存と現代社会」
・佐原 真（国立歴史民俗博物館）「世界の中の手宮・フゴッペ洞窟」
・菊池俊彦（北海道大学）「北東アジア史と手宮洞窟～その歴史的な位置付け」
・大沼忠春（北海道教育委員会）「手宮洞窟の時代～続縄文時代の北海道」
・大島秀俊（北海道文化財保護協会）「発掘された手宮洞窟～研究と調査」
・菊池徹夫（早稲田大学）「岩壁彫刻から土器紋様へ～渡島蝦夷の紋章」
・前田 潮（筑波大学）「北方ユーラシアの岩壁画と手宮ーフゴッペ洞窟画群」

- ・大塚和義（国立民族学博物館）「岩面に刻まれたメッセージ～民族学から見た手宮洞窟の岩面画が意味するもの」
- ・内田昭人（奈良国立文化財研究所）「科学の目で見た手宮洞窟」

- 167) 高瀬克範 1996「恵山文化における魚形石器の機能・用途」『物質文化』60
- 168) 宮 宏明 1996「北の海文化交流を探る～北海道余市町大川遺跡」『月間文化財』390
- 169) 高橋 理 1996「余市式再考」『北海道考古学』32
- 170) 文化庁編 1996「大川遺跡」『96 新発見考古速報～発掘された日本列島』朝日新聞社
- 171) 青野友哉・浅野敏昭・小川康和・藤原秀樹 1998「登町11 遺跡法事立会調査報告」『余市水産博物館研究報告』1
- 172) 鈴木靖民 1996「古代蝦夷の世界と交流」『古代蝦夷の世界と交流』 名著出版
- 173) 宮 宏明 1996「大川遺跡出土古代の文字資料をめぐって」『北奥古代文化』25
- 174) 岡田淳子 1996「流通拠点～余市大川」『第10回大学と科学公開シンポジウム～北方文化と日本列島』 クバプロ
- 175) 宮 宏明・小川康和 1996「渡来銭とガラス玉から余市出土の銭貨幣をめぐって」『出土銭貨』6 出土銭貨研究会
- 176) 同 上 1997「いかさま賭博と考古学」『動物考古学』8
- 177) 同 上 1997「場所請負と大川遺跡」『考古学ジャーナル』417
- 178) 余市町教育委員会 1998『大谷地貝塚』
分 析 ・新美倫子（名古屋大学）「大谷地貝塚出土の貝類・フジツボ類・ウニ類・魚類」
・西本豊弘（国立歴史民俗博物館）「大谷地貝塚出土の鳥類・哺乳類」
- 179) 注164と同じ
- 180) 余市町教育委員会 1998『登川右岸遺跡』
- 181) 宮 宏明 1997「北海道大川遺跡・大浜中遺跡出土の中世陶器」『貿易陶磁研究』17 日本貿易陶磁研究会
- 182) 小樽先史文化懇話会 1997『大谷地貝塚と五十嵐鐵～余市式土器をめぐって』
・竹田輝雄「大谷地貝塚と五十嵐鐵」
・大島秀俊「大谷地貝塚の位置と歴史的環境」
・長谷川 徹「大谷地貝塚出土の土器について」
・宮 宏明「余市式土器研究の軌跡」
・川内 基・大島秀俊「余市式土器の問題点」
- 183) 田才雅彦・青木 誠・乾 芳宏 1999「西崎山ストーンサークル調査について」『余市水産博物館研究報告』2
- 184) a:余市町教育委員会 2000『大川遺跡（1998年度）』
分 析 ・新見倫子（名古屋大学）「大川遺跡出土の動物遺存体」
b:余市町教育委員会 2001『大川遺跡（1999年度）』
分 析 ・三野紀雄（北海道開拓記念館）「墓塚から出土した炭化材」
・汐見 真（吉田生物研究所）・岡田文男（京都造形大学）「墓塚から出土した木製品の樹種調査結果」
・吉田生物研究所「墓塚から出土したウルシ塗り木製品の塗膜構造分析」
c:余市町教育委員会 2002『大川遺跡（2000・2001年度）』
分 析 ・乗安整而・谷口圭吾（札幌医科大学）「迂回路地点 P-9 出土の火葬人骨について」

- ・北野信彦（くらしき作陽大学）「大川遺跡迂回路地点出土漆器資料の材質・技法」
d:余市町教育委員会 2004『大川遺跡（2003年度）』
分析 ・新見倫子（名古屋大学）「大川遺跡出土の動物遺存体」
・地球科学研究所「放射性炭素年代測定結果について」
・乘安整而・松村博文・山上実紀（札幌医科大学）「大川遺跡出土の人骨について」
e:余市町教育委員会 2006『大川遺跡（2005年度）』
分析 ・新見倫子（名古屋大学）「大川遺跡 2005年度調査出土の人骨」
・新見倫子「大川遺跡 2005年度調査出土の動物遺体」
- 185) 余市町教育委員会 2000『入舟遺跡（1998・1999年度）』
分析 ・浅野敏昭（余市水産博物館）「入舟遺跡の角胴について」
・赤沼英男（岩手県立博物館）「入舟遺跡貝塚出土金属輪の蛍光X線分析による調査結果」
・乘安整而（札幌医科大学）入舟遺跡貝塚（SM-1）出土人骨について」
- 186) 余市町 1998『余市郷土史7～余市生活文化発達（史料2）』
- 187) 宮 宏明 1998「中・近世と古墳時代の特殊な刀子」『人類史研究』10
- 188) 石川直章 1998「回転式銚先再考」『時の絆（石附喜三男先生を忍ぶ道を辿る）』
- 189) 宮 宏明 1998「縄文文化の土鈴と鳴る土偶」『北方の考古学（野村崇先生還暦記念論集）』
- 190) 斉野裕彦 1998「北海道・東北の柱状片刃石斧」同上
- 191) 小川 勝 1998「北海道開拓記念館蔵フゴッペ洞窟岩面刻画石膏型資料評価」同上
- 192) 土谷昭重 1998「北海道開拓記念館蔵余市町フゴッペ洞窟岩面刻画 Rock Engravings 石膏型資料調査の概略な報告」
同上
- 193) 大谷地貝塚の発掘調査を契機として、縄文文化の宝庫である余市を盛り上げようとのことから縄文野焼きが始められた。第1～7回まで余市縄文野焼き大会、第8～20回は余市縄文野焼き祭りとして名称の変更をしている。主催は第1～5回は芸術集団自由の会、第6～7回は余市縄文野焼き大会実行委員会、第8回～20回は余市縄文野焼き祭り実行委員会が開催した。中村氏は芸術家の岡本太郎氏で唯一の弟子として知られる。
- 194) 乾 芳宏 1999「旧東中学校校庭遺跡出土の遺物について～内耳土鍋と骨角器」『余市水産博物館研究報告』2
- 195) 押切孝作 1999「ピラミッド・余市姫・刻画～私の好古学」『余市文芸』24
- 196) 国立歴史民俗博物館編 1990『新弥生紀行～北の森から南の海へ』
- 197) 乾 芳宏 2000「八幡山ストーンサークルについて」『余市水産博物館研究報告』3
- 198) 押切氏の呼称するピラミッドの一部調査である。
- 199) 余市水産博物館 2001『余市水産博物館研究報告（フゴッペ洞窟セミナー報告）』4
・木村重信（兵庫県立近代美術館）「世界の岩面画」
・下川浩一（経済産業省産業技術総合研究所地質調査所）「フゴッペ洞窟の成立過程」
・乾 芳宏「フゴッペ洞窟・高語学調査の概要」
・石川直章（小樽市教育委員会）「手宮洞窟から見たフゴッペ洞窟～研究史における意義」
・丑野 毅（東京大学）「フゴッペ洞窟・岩面刻画の制作技法」
・小林幸雄（北海道開拓記念館）「北海道先史時代の赤色顔料～フゴッペ洞窟・岩面刻画に用いられた顔料に関して」
・浅野敏昭「フゴッペ洞窟岩面刻画の発見と現状」

- 200) 日本考古学協会 1999 年度釧路大会実行委員会 1999『シンポジウム海峡と北の考古学～文化の接点を探る』資料集
昭和 50 年 (1975) に日本考古学協会秋期大会が初めて北海道札幌市 (北海道経済センター) で開催されたが、ア
イヌ問題を避けているとの批判により中断を余儀なくされ、日程どおりに進行しなかった。
- 201) 注 143 と同じ
- 202) 仲鉢 浩 2001「北海道余市町フゴッペ貝塚出土の貝製平玉について」『史峰』27
- 203) 石川直章 2000「ヌッチ川遺跡出土の銚頭」『余市水産博物館研究報告』3
- 204) 鈴木克彦 2000「北海道後志・胆振地域中期末葉から後期前葉の編年～北海道西南部の縄文後期の編年学的研究 4」
『北海道考古学』36
- 205) 佐藤一夫 2000「北海道出土の貝製装飾品について」『苫小牧市埋蔵文化財調査センター所報』2
- 206) 余市町教育委員会 2000『安芸遺跡』
- 207) 北海道立埋蔵文化財センター 2001『西崎山ストーンサークル』重要遺跡確認調査報告書
- 208) 赤松守雄 (研究代表) 2003『フゴッペ洞窟・岩面壁画と文化交流のフィールドステーション作りの基礎研究』
〈フゴッペ洞窟発見 50 周年記念〉
・記念講演 木村重信 (大阪大学名誉教授)「フゴッペ刻画と世界の岩面画」
・記念報告 大塚以和雄・大塚誠之助「フゴッペ洞窟あれこれ」
シンポジウム
・乾 芳宏「フゴッペ洞窟の考古学的位置づけ」
・小川 勝 (鳴門教育大学)「フゴッペ洞窟の岩面刻画の位置づけ」
・佐々木史郎 (国立民族学博物館)「民族学から見たフゴッペ洞窟」
・小泉 格 (北海道大学)「フゴッペ洞窟の立地環境と気候」
・三浦定俊 (東京国立文化財研究所)「フゴッペ洞窟の保存と活用」
討論 木村重信・菊池徹夫 (早稲田大学)・福田正己 (北海道大学)
司会 赤松守男 (北海道開拓記念館)
- 209) 同 上
- 210) 高瀬克範・福田正宏 2001「入舟遺跡出土の土器について～道央の終末期縄文土器と初期統縄文土器の編年」
『余市水産博物館研究報告』4
- 211) 乾 芳宏 2001「北海道余市町入舟採集の碧玉製管玉について」『史峰』28
- 212) 仲鉢 浩 2001「側面に貫通孔を持つ土製品」 同上
- 213) 乾 芳宏 2001「余市川流域の中・近世遺跡」『北から見直す日本史』 大和書房
- 214) 余市町教育委員会 2004『国指定史跡フゴッペ洞窟保存調査事業報告書』
- 215) 小川康和 2002「大川遺跡本多地点発掘調査報告書」『余市水産博物館研究報告』5
- 216) 佐藤矩康・成田重信・山崎克彦・石川直章・乾芳宏・佐々木浩一・赤沼英男「石狩・余市湾岸出土上古刀の CT 及び
CR による構造解析 (1)」『北海道考古学』38
- 217) 越田賢一郎 2002「余市町の中・近世」 同上
- 218) 小嶋芳孝 2002「大川遺跡出土の黒色壺再々検討」 同上

- 219) 乾 芳宏 2002「天内山遺跡出土の縄文土器について」同上
- 220) 川端 有 2002「フゴッペ丸山に情熱を傾注した人々」『余市文芸』27
- 221) 乾 芳宏 2002「縄文時代晩期から縄文時代への墓壇変遷～北海道余市町大川遺跡を中心として」『地域考古学の展開（村田文夫先生還暦記念論文集）』
- 222) 乾 芳宏 2002「海の民としてのアイヌ社会の漆器考古学」『考古学ジャーナル』489
- 223) 北海道開拓記念館 2002『第55回特別展 洞窟遺跡を残した縄文の人々』図録
- 224) 天理大学付属天理参考館 2002『天理ギャラリー第117回展 古代の北海道』図録
- 225) 越田賢一郎 2003「Ⅲ 後志管内の遺跡分布調査」『重要遺跡確認調査報告書～奥尻町青苗砂丘遺跡』2
- 226) 岡田淳子 2003「近世アイヌ墓の検証」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』
- 227) 石井淳平 2003「栄町1遺跡・大浜中遺跡出土の中世陶器について」『余市水産博物館研究報告』6
- 228) 浅野敏昭 2003「フゴッペ洞窟古代彫刻の考察～奥野義扶氏の未完遺稿より」同上
- 229) 余市町教育委員会・北海道開拓記念館 2003『国指定史跡フゴッペ洞窟』図録
- 230) 押切孝作 2003「ピラミッド・余市姫・刻画Ⅱ～私の好古学」『余市文芸』28
- 231) 乾 芳宏 2003「北海道出土の中世和鏡について」『史峰』30
- 232) a:余市町教育委員会 2002『安芸遺跡』
b:余市町教育委員会 2003『安芸遺跡』
分析・本吉恵理子（吉田生物研究所）・岡田文男（京都造形芸術大学）「安芸遺跡から出土した漆製品の塗膜構造調査」
・吉田生物研究所「安芸遺跡出土木製遺物の樹種調査結果」
・新見倫子（名古屋大学）「安芸遺跡出土の動物遺体」
・井上 巖（第四紀地質研究所）「安芸遺跡出土黒曜石遺物の化学分析」
・地球科学研究所「放射性炭素年代測定結果について」
・山田悟郎（北海道開拓記念館）「安芸遺跡から採取された低湿地性堆積物の花粉分析結果について」
・山田悟郎「安芸遺跡から採取された低湿地性堆積物の植物遺体」
c:余市町教育委員会 2007『安芸遺跡』
- 233) 日高 慎 2003「北海道大川遺跡出土資料の再検討」『考古学に学ぶⅡ』同志社大学考古学シリーズ
- 234) 小川勝編 2003『フゴッペ洞窟：岩面刻画の総合的研究』中央公論美術出版
第1部 総合的研究
・木村重信（兵庫県立美術館）「フゴッペ岩面画と世界の岩面画」
・小川 勝（鳴門教育大学）「先史岩面画とは何か」
・浅野敏昭（余市町教育委員会）「フゴッペ洞窟及び手宮洞窟研究史と概要」
・乾 芳宏（同上）「考古学的概観」
・下川浩一（産業技術総合研究所）「フゴッペ洞窟の成立過程」
・右代啓視（北海道開拓記念館）「フゴッペ洞窟の成因とその考古学的復元」
第2部 美術史的研究 小川 勝
第3部 各論的研究
・丑野 毅（東京大学）「岩面刻画の制作技法に関わる微細分析」

- ・石川直章（小樽市博物館）「手宮洞窟からみたフゴッペ洞窟」
 - ・菊池徹夫（早稲田大学）「フゴッペ・手宮の岩面刻画の性格について」
 - ・小川 勝「北東アジアの岩面刻画」
 - ・トーマス・ハイド（カナダ・ビクトリア大学）「岩面刻画にふさわしい提示」
 - ・小川 勝「刻画の制作動機と内容解釈」
- 235) 乾 芳宏 2003「北海道の中世墓」『アイヌ文化の成立（宇田川洋先生華甲記念論文集）』北海道出版企画センター
- 236) 余市町教育委員会 2004『国指定史跡フゴッペ洞窟保存調査事業』
考古学的論考
- ・赤松守雄（北海道開拓記念館）「フゴッペ洞窟周辺の地理的・地質的特性」
 - ・添田雄二（同上）「余市湾の古環境～フゴッペ洞窟を中心とする古環境と人とのかかわり」
 - ・山田悟郎（同上）「フゴッペ洞窟周辺の古植生と利用された植物」
 - ・氏家 等（同上）「史跡の活用から見たフゴッペ洞窟」
 - ・乾 芳宏「フゴッペ洞窟発掘調査の歴史」
 - ・浅野敏昭「フゴッペ洞窟及び手宮洞窟研究史の概要について」
 - ・鈴木琢也（北海道開拓記念館）「擦文文化期のフゴッペ洞窟」
 - ・小川 勝（鳴門教育大学）「フゴッペ洞窟岩面刻画について～その美術作品としての問題を中心に」
 - ・右代啓視（北海道開拓記念館）「北東アジアにおけるフゴッペ洞窟の意義」
 - ・菊池徹夫（早稲田大学）「洞窟のセミオロジー～聖域としてのフゴッペ・手宮」
 - ・木村重信（兵庫県立近代美術館）「世界の岩面刻画」
- 237) 鈴木琢也 2004「擦文文化期における須恵器の拡散」『北海道開拓記念館研究紀要』32
- 238) 増田智仁・山田陽介・明朽津信・池内克史 2004「三次元計測データを用いたフゴッペ洞窟線刻画の太陽光線の移動による見えのシミュレーション」『余市水産博物館研究報告』7
- 239) 乾 芳宏 2003「考古学入門 土器の見分け方図鑑（縄文～擦文）」 同上
- 240) 春日拓也・清水正樹・浅野敏昭 2003「フゴッペ洞窟・岩面刻画の立体作成について」 同上
- 241) 千代 肇 2005「謎のフゴッペ洞窟をさぐる（フゴッペ洞窟開館記念講演）」『余市水産博物館研究報告』8
- 242) 乾 芳宏 2004「余市町大川遺跡出土のウニ形土器について」『動物考古学』21
- 243) 余市町教育委員会 2007『安芸遺跡』
- 244) 菊池徹夫 2004「北東アジア～文字から遠い世界」『文字の考古学』Ⅱ 同成社
- 245) 瀬川拓郎 2004「刻印記号の意味」『北方世界からの視点～ローカルからグローバルへ』（佐藤隆広氏追悼論集刊行委員会編）
- 246) 畑 宏明 2005「北海道の縄文記念物」『縄文ランドスケープ』（株）アム・プロモーション
- 247) 浅野敏昭 2005「ニッカウキスキー（株）北海道工場の土地利用について」『余市水産博物館研究報告』8
- 248) 乾 芳宏 2005「竪穴状建物跡の再検討～大川遺跡における竪穴群を中心として」『歴史智の構想（歴史哲学者鯨岡勝成先生追悼論文集）』
- 249) 古瀬戸恵美・斎藤努 2005「縄文時代のガラス玉の自然科学的分析」『余市水産博物館研究報告』8
- 250) 新見倫子・乾芳宏 2003「フゴッペ洞窟前庭部出土のシカ肩甲骨について」 同 上

- 251) 原 靖寿 2003「大川遺跡出土のミニチュア土器について」同 上
- 252) 小川康和 2005「大川遺跡における近世以降の墓坑道について」同 上
- 253) 乾 芳宏 2005「続縄文時代の練り玉について」『史峰』33
- 254) 余市町教育委員会 2006『大川遺跡（2005年度）』
分 析 新見倫子（名古屋大学）「大川遺跡 2005年度調査出土の人骨」
同 上 「大川遺跡 2005年度調査出土の動物遺体」
- 255) 大塚和義 2005「岩絵の道 アジアが共有するイメージのネットワーク」『文化遺産の世界～特集：岩絵の道』18
国際航業株式会社
- 256) 北野信彦 2005「アイヌ関連遺跡の近世漆器」『近世出土漆器の研究』吉川弘文館
- 257) a:野村 崇 2000「北海道出土のヒスイ製装飾品～研究史と出土玉の概観」『日本玉文化研究会第3回北海道大会要
旨・資料集』
b:同上 2000「北海道出土のヒスイ製装飾品」『地域と文化の考古学Ⅰ』 明治大学考古学研究室
- 258) 瀬川拓郎 2005「擦文文化の異文化交流と自然利用」『アイヌ・エコシステムの考古学』 北海道出版企画センター
- 259) 藤原秀樹 2006「北海道における縄文後期・晩期の墓制とヒスイ玉」『玉文化』3
- 260) 乾 芳宏 2006「考古学入門 石器の見分け方図鑑」『余市水産博物館研究報告』9
- 261) 松村博文・川島如仙・島田啓志・乗安整而 2009「余市町大川遺跡 2003年度出土人骨について」 同上
- 262) 小林達雄 2006「フゴッペ洞窟壁画の原郷土」『北方博物館交流』18 （財）北海道北方博物館交流協会会誌
- 263) 乾 芳宏 2006「上ヨイチ運上家とその周辺」『北海道の歴史と文化（北海道史研究協議会創立40周年記念論集）』
北海道出版企画センター
- 264) 菊池徹夫 2006「北東アジアの中のフゴッペ洞窟・手宮岩面刻画」『アジア地域文化学の発展』（早稲田大学アジア地
域文化エンハンシング研究センター）
- 265) 佐藤矩康編 2006『北の出土刀を科学する～最新科学と考古学からみた刀剣文化史への道程』 自費出版
- 266) 乾 芳宏 2007「フゴッペ洞窟の岩面刻画について～縄文・弥生文化からの視点」『考古学の深層（瓦吹堅先生還暦
記念論文集）』
- 267) 桐谷賢一 2007「フゴッペ洞窟発見当時の発掘に携わって」『余市文芸』32
- 268) 乾 芳宏 2007「天内山遺跡出土の第Ⅱ群土器について」『余市水産博物館研究報告』10
- 269) 乾 芳宏 2007「山岸コレクションの勾玉と大川遺跡」『玉文化』4
- 270) 藤岡智子 2007「続縄文時代のコハク玉玉」『北方文化研究』5
- 271) 調査により大川葬法の墓坑が検出された。
- 272) 浅野敏昭 2007「北海道積丹半島の漁場遺構」『考古学が語る日本の近現代』同成社

- 273) 乾 芳宏 2007「近世アイヌ墓の出土漆器について～余市大川・入舟遺跡を中心として」『列島の考古学Ⅱ（渡辺誠先生古希記念論文集）』
- 274) 乾 芳宏 2007「余市地方における漆器碗に見られるシロシについて」『余市アイヌの歴史的研究』（『アイヌ関連総合研究等助成事業研究報告』7） アイヌ文化振興・研究機構
- 275) 小川康和 2008「大川遺跡における縄文晩期墓塚の特殊な事例について」『余市水産博物館研究報告』11
- 276) 乾 芳宏 2008「大谷地貝塚出土の遮光器土偶について」 同上
- 277) 余市町教育委員会 2009『栄町7遺跡』
 分 析 ・ 乾 芳宏「栄町7遺跡出土の土偶について」
 ・ 吉田生物研究所「栄町7遺跡出土木製遺物の樹種調査結果」
 ・ 地球科学研究所「放射性炭素年代測定」
 ・ パリノ・サーベイ株式会社「栄町7遺跡の古環境分析調査」
 ・ 古環境研究所「余市町栄町7遺跡出土黒曜石の産地同定」
 ・ 松田義章（北海道札幌稲北高校・日本地質学会）・斎藤明歩・西村ひかり・杉岡 舞・大野恋奈・日並雄太・千葉弘貴・村元亨輔・金本 悟（北稲高校自然科学部地学班）「余市町栄町7遺跡における砂質堆積物の特性とその形成過程」
- 278) 小樽市総合博物館監修 2008『図説 小樽・後志の歴史』 郷土出版社
- 279) 乾 芳宏 2009「考古学入門 木製品の見分け方図鑑（縄文～続縄文）」『余市水産博物館研究報告』12
- 280) 日並雄太・村本亮輔・千葉弘貴・斎藤明歩・西村ひかり・杉岡舞・松田義章 2009「北海道指定史跡西崎山環状列石を構成する岩石とその由来について」 同上
- 281) 乾 芳宏 2009「余市周辺における擦文文化の様相」『2009 北海道考古学会研究大会資料集～擦文文化における地域間交流・交易』
- 282) 北海道開拓記念館・オホーツクミュージアムえさし 2009『謎の岩面刻画フゴッペ洞窟』図録
- 283) 小川 勝編 2012『先史岩面画博物館の構想のための基礎的調査研究』鳴門教育大学
 シンポジウム「謎のフゴッペ洞窟・岩面刻画を探る」
 第1部：フゴッペ洞窟研究へのアプローチ
 ・ 浅野敏昭（余市水産博物館）「フゴッペ洞窟の現在と課題」
 ・ 鈴木琢也（北海道開拓記念館）「忘れられたフゴッペ洞窟の岩面刻画」
 ・ 田中裕子（早稲田大学生）「フゴッペ岩面刻画の比較資料について～中国の岩面刻画における人物表現」
 ・ 藤原 尚（日本先史岩面画研究会）「鹿児島県徳之島の岩面刻画」
 ・ 宮本洋子（同 上）「韓国の岩面刻画」
 ・ 宮本 径（写真家）「台湾の岩面刻画」
 ・ 五十嵐ジャンヌ（東京藝術大学）「フランスの洞窟壁画～ニオー洞窟を中心に」
 コーディネーター 高島孝宗（オホーツクミュージアムえさし）
 第2部：討論 謎のフゴッペ洞窟・岩面刻画を探る
 コメンテーター 菊池徹夫（早稲田大学）・小川 勝（鳴門教育大学）
 乾 芳宏（余市水産博物館）・右代啓視（北海道開拓記念館）
 コーディネーター 鈴木琢也（他移動開拓記念館）
 第3部：座談会 フゴッペ洞窟の発見から発掘まで
 講師 大塚誠之助（発見者）
 横田 滋（発掘関係者）
 島田和武（発掘関係者）
 コーディネーター 右代啓視（北海道開拓記念館）

- 284) 関根達人・佐藤雄生 2009「出土近陶磁器からみた蝦夷地の内国化」『日本考古学』28 日本考古学協会
- 285) 小川康和 2010「大川遺跡検出の未報告の墓坑について」『余市水産博物館研究報告』13
- 286) 乾 芳宏 2010「日本海・道央部における擦文文化のニシン漁」同上
- 287) 田中広明 2010「腰帯をつけた蝦夷」『北方世界の考古学』 すいれん舎
- 288) 小川 勝編 2012「世界から見たフゴッペ洞窟～国指定史跡フゴッペ洞窟発見 60 周年記念シンポジウム」『先史岩面画博物館の構想のための基礎的研究』鳴門教育大学
- ・木村重信（大阪大学）「先史岩面画と私」
 - ・ドゥニ・ヴィアル（フランス国立パリ自然史博物館）「洞窟から洞窟へ：旧石器時代美術のイメージと意味」
 - ・楊 超（中国山峡大学）「中国岩面画の体系」
 - ・アゲダ・ヴィレーニャ・ヴィアル「ブラジル岩面画遺跡における記号とシンボル：コード化された美術」
- 討論 報告者上記・菊池徹夫（早稲田大学）・大塚和義（国立民族学博物館）
- ・乾 芳宏（余市水産博物館）・右代啓視（北海道開拓記念館）
 - ・小川 勝（鳴門教育大学）
- 289) 浅野敏昭 2011「余市川河口の石組炉遺構について」『余市水産博物館研究報告』14
- 290) 小川康和 2011「大川遺跡出土の泰和重寶」同上
- 291) 北海道開拓記念館 2012『国宝にみる北の縄文・北の土偶展』図録
- 292) 乾 芳宏 2012「ヨイチアイヌの沖神カムイギリ」『余市水産博物館研究報告』15
- 293) 佐藤美智雄 2012「余市町沢町遺跡 GP-20 墓墳出土の徳利形土器について」同上
- 294) 三宅俊彦 2012「サハリンの出土銭」『考古学ジャーナル』626
- 295) a:余市町教育委員会 2013『登町 4 遺跡（2012 年度）』
分 析 ・古環境研究所「余市町登町 4 遺跡出土黒曜石の産地同定」
・松田義章（日本地質学会・北海道札幌あすかぜ高校）「余市町登 4 遺跡及びその周辺地域の地形・地質」
- b:余市町教育委員会 2014『登町 4 遺跡（2013 年度）』
分 析 ・古環境研究所「余市町登町 4 遺跡出土黒曜石の産地同定」
- c:余市町教育委員会 2015『登町 4・13 遺跡（2014 年度）』
分 析 ・古環境研究所「余市町登町 4・13 遺跡出土黒曜石の産地同定」
・古環境研究所「余市町登町 13 遺跡出土炭化物の放射性炭素年代測定」
- d:余市町教育委員会 2016『登町 4 遺跡（2015 年度）』
分 析 ・古環境研究所「黒曜石製石器の産地同定」
・古環境研究所「放射性炭素年代測定」
- 296) 佐藤美智雄編 2013『考古学マニアのための北海道後志の遺跡』私家本
氏は他に『考古学マニアのための北海道の縄文土器』、『考古学マニアの北海道続縄文土器・オホーツク式土器考』を発行している。
- 297) 注 295C と同じ
- 298) 余市水産博物館協会の 2014『第 39 回余市水産博物館図録 考古遺物が語る余市の歴史～旧石器から近世・近代～余市の至宝たち』
- 299) 関根達人 2014「アイヌの宝物とツグナイ」『人文社会論叢』32 弘前大学文学部

-
- 300) 日本考古学協会 2014 年度伊達大会実行委員会 2014『貝塚研究の新視点・墓とモニュメント』
- 301) 越田賢一郎・乾 芳宏・竹内 孝・中村和之・高橋美鈴 2015「北海道余市町大川遺跡から出土したガラス等の成分分析」『札幌国際大学紀要』46
- 302) 注 295 と同じ
- 303) 関根達人・佐藤里穂 2015「蝦夷刀の成立と変遷」『日本考古学』39
- 304) 乾 芳宏 2016『余市町史 1 (考古編)』余市町
- 305) a: 関根達人 2016「アイヌ文化と大山酒～北海道入舟遺跡出土の酒樽の歴史的意義」『斬新考古』4 (私設) 北海道考古学研究所
b: 同 上「北方史とアイヌ考古学」『季刊考古学』133 雄山閣
c: 同 上 2016『モノから見たアイヌ文化史』吉川弘文館
平成 27 年 (2015) 11 月 29 日, 「北海道・東北を中心とする北方交易圏の理論的枠組み構築のための総合的研究」シンポジウム (研究代表 百瀬 響: 北海道教育大学) が余市町中央公民館を会場として開催され, 関根達人氏は「北海道入舟遺跡出土の酒樽の歴史的意義」を発表している。
- 306) 越田賢一郎 2017「アイヌ文化期 (中世相当期) における北海道出土のガラス玉」『中近世のアイヌ文化の再構築をめざした学融合的研究』科学研究費補助金基盤研究成果報告書 (代表 中村和之: 函館工業高等専門学校)
- 307) 縄文野焼き会場の海岸浸食が進み, 場所の確保が困難となり最後となった。
- 308) 佐藤一夫 2017『北海道出土銭貨地名表』自費出版
- 309) 瀬川拓郎 2017『縄文の思想』講談社
- 310) a: 新岡武彦 1977『樺太・北海道の古文化 1』北海道出版企画センター
b: 同 上 1990『瘦せ馬一代記』同上
上記によれば昭和 2 年末に発見されたフゴッペ彫刻が忍路郡考古学研究会の機運を高めたらしく, 翌年に小樽中学校 (現在の潮稜高校) の 5 人組で結成している。昭和 6 年まで雑誌『究古』を刊行している。
- 311) 余市郷土研究会は昭和 10 年に発足し, 初代会長に山岸禮三氏となったが, は昭和 22 年に病没してから休止した。昭和 27 年 (1953) に再発足, 2 代会長に今善作氏となり, 北海道文化財保護協会の設立にも尽力している。この会は遺跡の保存ならびに保護思想の普及が認められ, 第 1 回 (昭和 40 年度) 北海道文化財保護功労賞を受賞している。

<参考文献：50 音順>

- 浅野敏昭 2004『余市町の文化財』（財）北海信金地域振興基金
遼星北斗 1995『コタン 遼星北斗遺稿』 草風館
大場利夫 1982『北海道の先史文化』 みやま書房
小樽市教育課 1950『史蹟 手宮古代文字』
清野謙次 1954『日本考古学・人類学史』上巻 岩波書店
児玉作左衛門 1971『明治前日本人類学・先史学史』（明治前日本科学史刊行会編）丸善
小林行雄 1962「考古学史～日本」『世界考古学体系』16 平凡社
斉藤 忠 1974『日本考古学史』 吉川弘文館
同 上 2006『日本考古学人物事典』 学生社
坂詰秀一 1997『太平洋戦争と考古学』 吉川弘文館
札幌市教育委員会編 1999『古代に遊ぶ』 さっぽろ文庫 90
椎名慎太郎 1977『精説 文化財保護法』 新日本法規
高倉新一郎編 1982『犀川会資料』 北海道出版企画センター
勅使河原 彰 1995『日本考古学の歩み』 名著出版
寺田和夫 1981『日本の人類学』 角川書店
野村 崇 1988『日本の古代遺跡 40～北海道Ⅰ』 保育社
同 上 1997『日本の古代遺跡 41～北海道Ⅱ』 保育社
野村 崇・菊池俊彦編 1980『北海道考古学講座』
藤田亮策 日本考古学協会編 1962『日本考古学辞典』
ふじもとひでを 1968『アイヌ研究史～ある断面』 みやま書房
北海道 1980『新北海道史年表』 北海道出版企画センター
北海道文化財保護協会 1992『創立 30 周年記念 文化財保護の足跡』
山路勝彦 2006『近代日本の海外学術調査』 山川出版社
余市町史編纂室 1969『年表・余市小史』
余市町教育研究所 1982『余市郷土史 3～余市文教発達史』
余市町教育研究所 1982『余市郷土史 4～余市文教発達史（戦後編）』
余市町史編纂室 1993『余市郷土史 5～余市自治発達史』
余市町史編纂室 1998『余市郷土史 7～余市生活文化発達史』

余市水産博物館研究報告別冊

平成 30 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 余市水産博物館

〒046-0011 北海道余市郡余市町入舟町 21

TEL&FAX 0135-22-6187